秋田県文化財調査報告書第356集

堂　の　下　遺　跡　Ⅰ

旧石器時代～弥生時代篇

－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ－

２００３・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂(しろざか)遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

堂（どう）の下（した）遺跡Ⅰ

旧石器時代～弥生時代篇

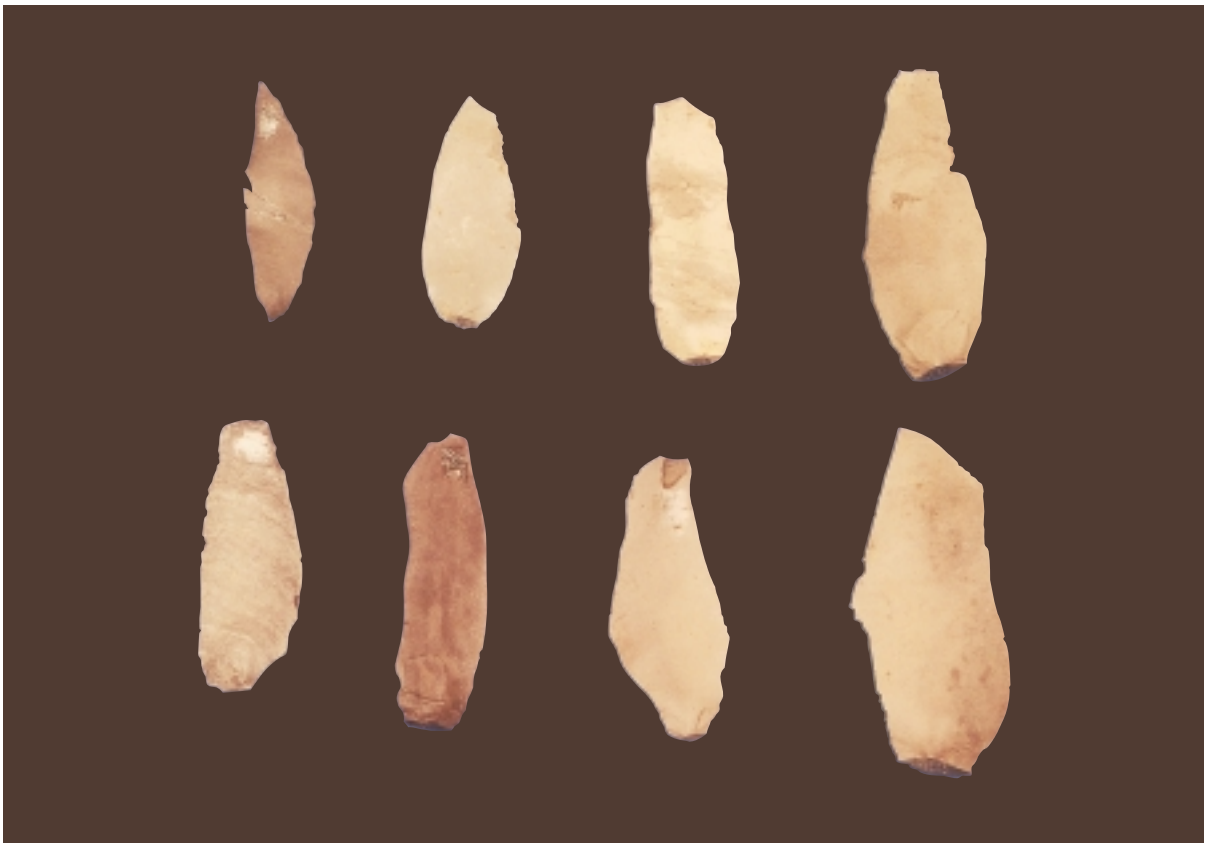
－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ－

２００３・３

秋田県教育委員会

遺跡全景

ナイフ形石器



同上裏面

石棒

石棒頭部

土製品

序

本県には、これまでに発見された約4,600箇所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、ゆとりと活力に満ちた新しいふるさと秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、日本海沿岸東北自動車道建設に先立って、平成10年度から３ヵ年にわたって琴丘町で実施した堂の下遺跡の発掘調査成果のうち旧石器時代から弥生時代についてまとめたものであります。調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡などが発見され、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました日本道路公団東北支社秋田工事事務所、琴丘町、同町教育委員会、五城目町、同町教育委員会、八郎潟町、同町教育委員会、山本町、同町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成15年３月

秋田県教育委員会

教育長　小 野 寺　　清

例　　言

1．本書は、日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本書は、平成10～12年度（1998～2000年度）に発掘調査した、秋田県山本郡琴丘町に所在する堂の下遺跡の調査結果のうち、旧石器時代の遺物、縄文時代・弥生時代の遺構・遺物を収めたものである。

3．調査内容については、一部が年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。

4．本書の執筆は、第１章第１節、第２章、第４章第２節を高橋忠彦が、第１章第２節、第３章、第４章第１節、第６章を磯村亨が担当した。

5．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の25,000分の１地形図『鹿渡』『五城目』と日本道路公団東北支社秋田工事事務所提供の1,000分の１工事用図面である。

6．第５章の自然科学分析は年度毎に以下の機関に委託した。

平成10年度：株式会社古環境研究所　^{14}C年代測定・樹種同定

平成11年度：株式会社パレオ・ラボ　^{14}C年代測定・樹種同定

平成12年度：パリノ・サーヴェイ株式会社　テフラ分析・^{14}C年代測定・樹種同定

これらのうち本編に関わる分析結果のみを抜粋して掲載した。

7．遺構配置図作成・空中写真撮影は株式会社シン技術コンサルに委託した。

8．本報告書の作成にあたり、以下の方々からご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

穴澤義功、石郷岡誠一、遠藤正夫、小山内透、木村鉄次郎、木村将来、小塚裕姫子、佐藤錠司、嶋田仁、庄内昭男、菅原俊行、鈴木克彦、高橋保、手塚均、冨樫泰時、中村良幸、能登谷宣康、安田忠市、渡邊慎一、渡邊朋和

凡　　例

1．遺構番号は、その種類ごとに略記号を付し、種別を問わず検出順に連番としたが、精査と整理作業の過程で欠番としたものもある。また、遺構の種類に用いた略記号は下記の通りである。

ＳＩ　：竪穴住居跡

ＳＫＦ：フラスコ状土坑

ＳＫＴ：陥し穴状土坑

ＳＫ　：土坑

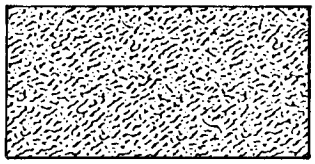
2．遺跡基本層序と遺構土層図中の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』2000年版に拠った。

3．遺物の写真は原則として実物の１／２で掲載した。ただし、石鏃・石製品は１／1.5、凹み石・磨石・石錘は１／３である。

4．挿図中のスクリーン・トーンの凡例は以下の通りである。

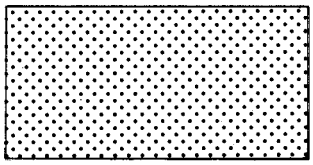
遺構

焼　土



遺物

磨　面



5．本文掲載の出土炭化材の^{14}Ｃ年代測定値は、^{14}Ｃの半減期を5,568年とした計算値を、試料の^{13}Ｃ濃度測定値と標準試料ＰＤＢ（白亜紀のベレムナイト類の化石）測定値とのずれに基づいて補正したものである。

目　　次

巻頭図版
序…… i
例言……iii
凡例……iv
目次…… v
挿図目次……vi
図版目次……vii

第１章　はじめに
　第１節　調査に至る経過…… 1
　第２節　調査要項…… 1
第２章　遺跡の環境
　第１節　遺跡の位置と立地…… 8
　第２節　歴史的環境……10
第３章　発掘調査の概要
　第１節　遺跡の概観……13
　第２節　基本土層……16
　第３節　調査の方法……16
　第４節　調査の経過……18
第４章　調査の記録
　第１節　検出遺構と出土遺物……21
　第２節　遺構外出土遺物……43
第５章　自然科学分析……70
第６章　まとめ……74
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　調査範囲図…… 4
第２図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡…… 5･6
第３図　堂の下遺跡の位置…… 8
第４図　堂の下遺跡周辺の地形…… 9
第５図　堂の下遺跡周辺の遺跡分布図……12
第６図　遺構配置図……14
第７図　調査区区分図……15
第８図　基本層序……17
第９図　ＳＩ29竪穴住居跡（１）……22
第10図　ＳＩ29竪穴住居跡（２）……23
第11図　ＳＩ31竪穴住居跡……25
第12図　ＳＩ291竪穴住居跡（１）…… 27
第13図　ＳＩ291竪穴住居跡（２）…… 28
第14図　ＳＩ436竪穴住居跡 ……29
第15図　ＳＫＦ155･232･234･236フラスコ状土坑 ……31
第16図　ＳＫＦ244･297･317･320フラスコ状土坑 ……33
第17図　ＳＫＴ239･251･288陥し穴状土坑 ……35
第18図　ＳＫ06･08･13･14･43･47土坑 ……37
第19図　遺構内（ＳＩ29）出土遺物（１）……38
第20図　遺構内（ＳＩ29）出土遺物（２）……39
第21図　遺構内（ＳＩ31･291）出土遺物（４）……40
第22図　遺構内（ＳＩ436）出土遺物（４）…… 41
第23図　遺構内（土坑）出土遺物（５）……42
第24図　遺物出土分布図……44
第25図　旧石器出土分布図……45
第26図　遺構外出土遺物（１）……46
第27図　遺構外出土遺物（２）……47
第28図　遺構外出土遺物（３）……49
第29図　遺構外出土遺物（４）……50
第30図　遺構外出土遺物（５）……51
第31図　遺構外出土遺物（６）……52
第32図　遺構外出土遺物（７）……53
第33図　遺構外出土遺物（８）……56
第34図　遺構外出土遺物（９）……57
第35図　遺構外出土遺物(10)……58
第36図　遺構外出土遺物(11)……59

第37図　遺構外出土遺物(12)……60
第38図　遺構外出土遺物(13)……61
第39図　遺構外出土遺物(14)……62
第40図　遺構外出土遺物(15)……63
第41図　遺構外出土遺物(16)……64
第42図　遺構外出土遺物(17)……65
第43図　遺構外出土遺物(18)……66
第44図　遺構外出土遺物(19)……67
第45図　遺構外出土遺物(20)……68
第46図　遺構外出土遺物(21)……69
第47図　テフラ分析試料一覧と火山ガラス屈折率……72

図 版 目 次

図版１　１　Ａ区近景（北から）
　　２　Ｊ区近景（東から）
図版２　１　ＳＩ29竪穴住居跡完掘状況（西から）
　　２　ＳＩ29竪穴住居跡石棒出土状況（１）（南西から）
図版３　１　ＳＩ29竪穴住居跡石棒出土状況（２）（北から）
　　２　ＳＩ31竪穴住居跡検出状況（西から）
図版４　１　ＳＩ31竪穴住居跡完掘状況（西から）
　　２　ＳＩ291竪穴住居跡完掘状況（西から）
図版５　１　ＳＩ291竪穴住居跡遺物出土状況（東から）
　　２　ＳＩ436竪穴住居跡検出状況（北東から）
図版６　１　ＳＩ436竪穴住居跡完掘状況（北東から）
　　２　ＳＩ436竪穴住居跡断面（１）（南から）
図版７　１　ＳＩ436竪穴住居跡断面（２）（東から）
　　２　ＳＩ436竪穴住居跡遺物出土状況
図版８　１　ＳＫＦ232フラスコ状土坑土層（北西から）
　　２　ＳＫＦ232フラスコ状土坑完掘状況（北西から）
図版９　１　ＳＫＦ234フラスコ状土坑土層（北西から）
　　２　ＳＫＦ234フラスコ状土坑完掘状況（北西から）
図版10　１　ＳＫＦ236フラスコ状土坑検出状況（北西から）
　　２　ＳＫＦ236フラスコ状土坑完掘状況（北西から）
図版11　１　ＳＫＦ244フラスコ状土坑土層（北東から）
　　２　ＳＫＦ244フラスコ状土坑完掘状況（北東から）
図版12　１　ＳＫＦ297フラスコ状土坑土層（北西から）
　　２　ＳＫＦ297フラスコ状土坑完掘状況（北西から）

図版13　1　ＳＫＦ317フラスコ状土坑土層（南東から）
　　2　ＳＫＦ317フラスコ状土坑完掘状況（南東から）
図版14　1　ＳＫＴ239陥し穴状土坑完掘状況（南東から）
　　2　ＳＫＴ239陥し穴状土坑土層（北西から）
図版15　1　ＳＫＴ251陥し穴状土坑完掘状況（北東から）
　　2　ＳＫＴ251陥し穴状土坑土層（南東から）
図版16　1　ＳＫＴ288陥し穴状土坑完掘状況（西から）
　　2　ＳＫＴ288陥し穴状土坑土層（西から）
図版17　1　ＳＫ06完掘状況（南西から）
　　2　ＳＫ06土層（北東から）
図版18　1　ＳＫ13完掘状況（西から）
　　2　ＳＫ13土層（東から）
図版19　1　ＳＫ43完掘状況（南から）
　　2　ＳＫ43土層（南から）
図版20　1　Ｊ区遺物出土状況（１）（西から）
　　2　Ｊ区遺物出土状況（２）（北東から）
図版21　遺構内出土遺物（１）
図版22　遺構内出土遺物（２）
図版23　遺構内出土遺物（３）
図版24　遺構内出土遺物（４）
図版25　遺構内出土遺物（５）
図版26　遺構外出土遺物（１）
図版27　遺構外出土遺物（２）
図版28　遺構外出土遺物（３）
図版29　遺構外出土遺物（４）
図版30　遺構外出土遺物（５）
図版31　遺構外出土遺物（６）
図版32　遺構外出土遺物（７）
図版33　遺構外出土遺物（８）
図版34　遺構外出土遺物（９）
図版35　遺構外出土遺物（10）
図版36　遺構外出土遺物（11）
図版37　遺構外出土遺物（12）
図版38　遺構外出土遺物（13）
図版39　遺構外出土遺物（14）

第１章　は　じ　め　に

第１節　調査に至る経過

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市にかけての日本海沿岸や県内の高速交通体系の改善など、地域の生産活動と県民生活に必要な情報や物資の交流を促進することを目的として計画された総延長340㎞の高速道路である。このうち、秋田県内では、国土交通省によって一部事業化されている象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路と連結して、小坂ＪＣＴで東北自動車道に接続する。1997（平成９）年２月に新潟市～青森市までが日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうちの秋田南Ｉ・Ｃ～昭和男鹿半島Ｉ・Ｃ間の25.7㎞については、同年11月13日に開通している。また、2001（平成13）年７月には河辺Ｉ・Ｃ～秋田空港Ｉ・Ｃ間が、2002（平成14）年には、３月に琴丘・森岳Ｉ・Ｃ～能代南Ｉ・Ｃ間（17.1㎞）、９月に昭和・男鹿半島Ｉ・Ｃ～琴丘・森岳ＩＣ間（20.7㎞）、10月には岩城Ｉ・Ｃ～秋田空港Ｉ・Ｃ間（14.8㎞）が既に開通している。

堂の下遺跡に係る昭和～琴丘間の20.7㎞については、1991（平成３）年12月に整備計画区間に、1993（平成５）年12月には実施計画認可を経て1994（平成６）年11月に路線が発表された。

これを受けて県教育庁文化課では、路線上における埋蔵文化財の確認のため、1996（平成８）年９・12月に分布調査を実施し、その結果、堂の下遺跡を含む新たに発見した遺跡16箇所と、周知の遺跡３箇所の計19遺跡が予定路線内に存在することが明らかとなった。

堂の下遺跡の確認調査は、63,600㎡を対象として1998（平成10）年５月18日から６月12日にかけて実施され、中世の製鉄関連遺構を中心として、縄文時代の集落跡もある複合遺跡であり、工事区域内遺跡面積は55,000㎡であるとされた。発掘調査は、1998（平成10）年７月から３ヶ年にわたって行い、確認調査では認められなかった旧石器時代と弥生時代の遺構・遺物も発見された。

第２節　調査要項

遺　跡　名	堂の下遺跡（どうのしたいせき）
遺 跡 略 号	３ＤＮＳ
遺 跡 所 在 地	秋田県山本郡琴丘町鯉川字堂の下72外
調 査 期 間	平成10年７月８日～11月27日
	平成11年４月26日～12月27日
	平成12年４月24日～10月31日
調 査 目 的	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
調 査 面 積	平成10年度　22,000㎡
	平成11年度　24,000㎡
	平成12年度　9,000㎡

調 査 主 体 者　　秋田県教育委員会

調 査 担 当 者　　**平成10年度**

高橋　忠彦（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　科長）
磯村　　亨（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　学芸主事）
泉田　　健（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　学芸主事）
高橋　　保（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　主事）
伊藤　一彦（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
倉田　伸治（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
佐藤　秀一（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
関　　友明（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
高階　和也（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
高平　信也（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
竹内　弘和（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
戸嶋　正明（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
播摩　芳紀（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
藤田　賢哉（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）

平成11年度

磯村　　亨（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　学芸主事）
泉田　　健（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　学芸主事）
半田あきほ（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　学芸主事）
遠藤　　元（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
菊池　朋宏（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
工藤　幸作（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
倉田　伸治（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
小澤　昌弘（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
佐々木幸世（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
竹内　弘和（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
田村　瑞保（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
戸嶋　正明（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）
羽根川敬夫（秋田県埋蔵文化財センター調査第１科　非常勤職員）

平成12年度

磯村　　亨（秋田県埋蔵文化財センター中央分室　学芸主事）
齋藤　重隆（秋田県埋蔵文化財センター中央分室　学芸主事）
油川龍一郎（秋田県埋蔵文化財センター中央分室　学芸主事）
足利　直哉（秋田県埋蔵文化財センター中央分室　非常勤職員）
菊池　朋宏（秋田県埋蔵文化財センター中央分室　非常勤職員）
羽根川敬夫（秋田県埋蔵文化財センター中央分室　非常勤職員）

総務担当者　**平成10年度**

菅原　　晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査）

佐藤　幸嗣（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

平成11年度

菅原　　晃（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主査）

佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

八文字　隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

平成12年度

佐々木敬隆（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

成田　　誠（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

平成13年度

土橋　謙一（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

平成14年度

土橋　謙一（秋田県埋蔵文化財センター総務課　主事）

調査協力機関　日本道路公団東北支社秋田工事事務所　琴丘町　琴丘町教育委員会

八郎潟町　八郎潟町教育委員会　五城目町　五城目町教育委員会

山本町　山本町教育委員会

《参考文献》

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第270集　1997(平成９)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第281集　1998(平成10)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第291集　1999(平成11)年

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第308集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸIX－古野遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第253集　1995(平成７)年

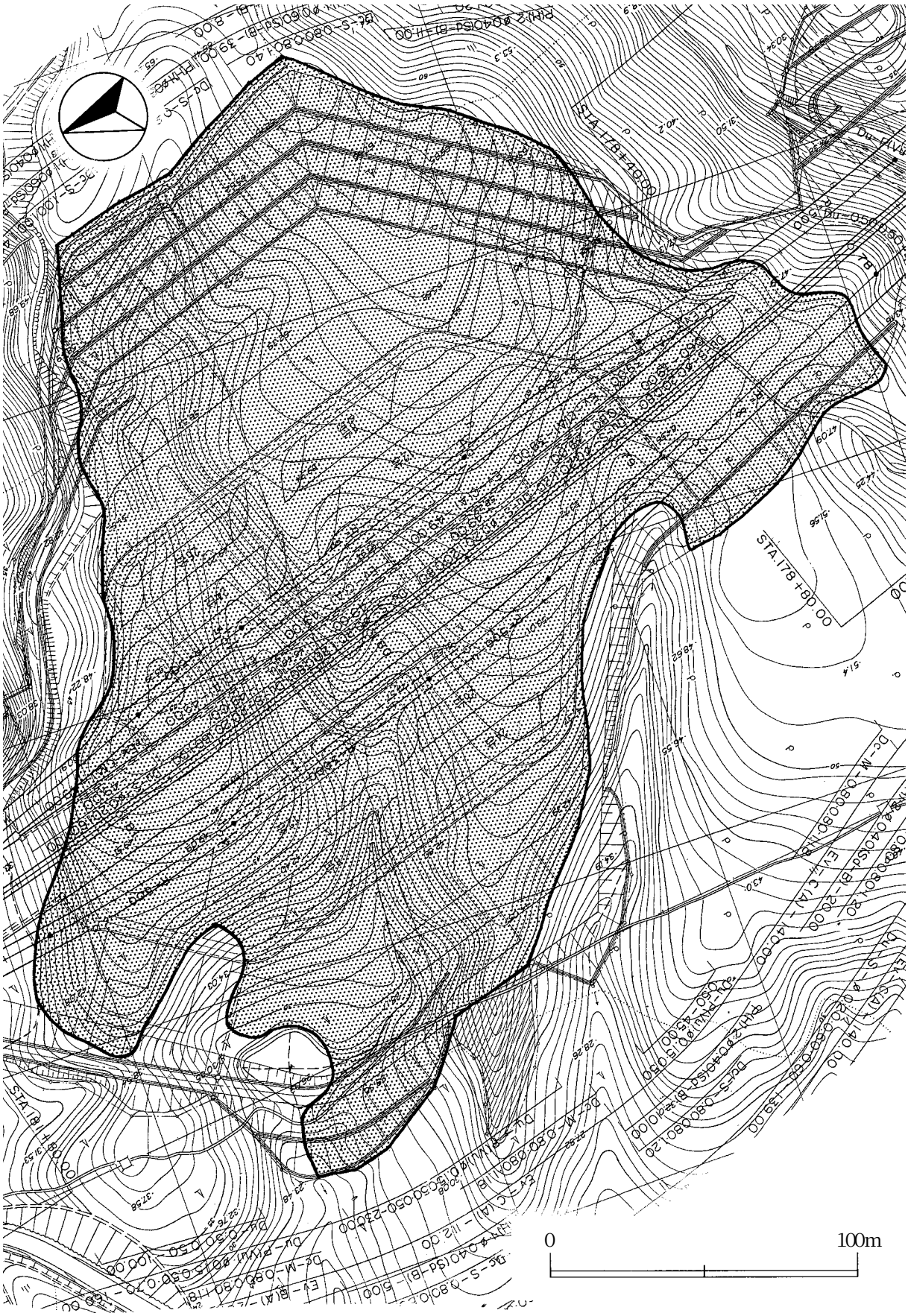
秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸ－蟹子沢遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第261集　1996(平成８)年

秋田県教育委員会　『戸平川遺跡－東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸIV－』　秋田県文化財調査報告書第294集　2000(平成12)年

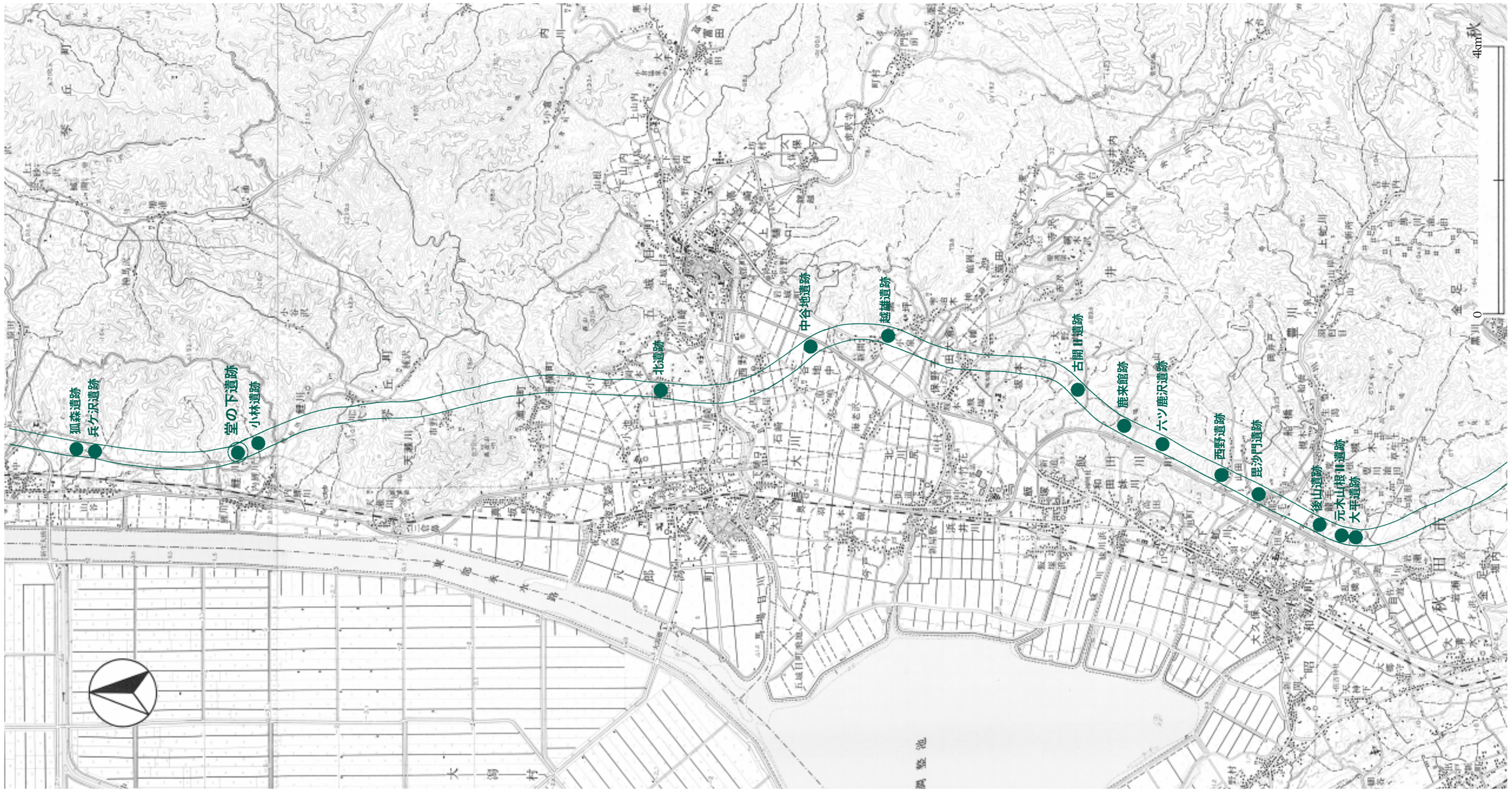
秋田県教育委員会　『兵ヶ沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』　秋田県文化財調報告書第296集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会　『元木山根Ⅱ遺跡・毘沙門遺跡・六ツ鹿沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　秋田県文化財調査報告書第309集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会　『岱Ⅰ遺跡・岱Ⅱ遺跡・岱Ⅲ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ－』　秋田県文化財調査報告書第314集　2001(平成13)年



第１図　調査範囲図



第２図　日本海沿岸東北自動車道と関連遺跡

秋田県教育委員会　『北遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－』　秋田県文化財調査報告書第314集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会　『中谷地遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ－』　秋田県文化財調査報告書第316集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会　『古開Ⅱ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』　秋田県文化財調査報告書第317集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会　『大平遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第314集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会　『鹿来館跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅠ－』　秋田県文化財調査報告書第332集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会　『後山遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅡ－』　秋田県文化財調査報告書第340集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会　『岱Ⅱ遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅢ－』　秋田県文化財調査報告書第341集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会　『小林遺跡Ⅰ(縄文時代編)－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅣ－』　秋田県文化財調査報告書第341集　2002(平成14)年

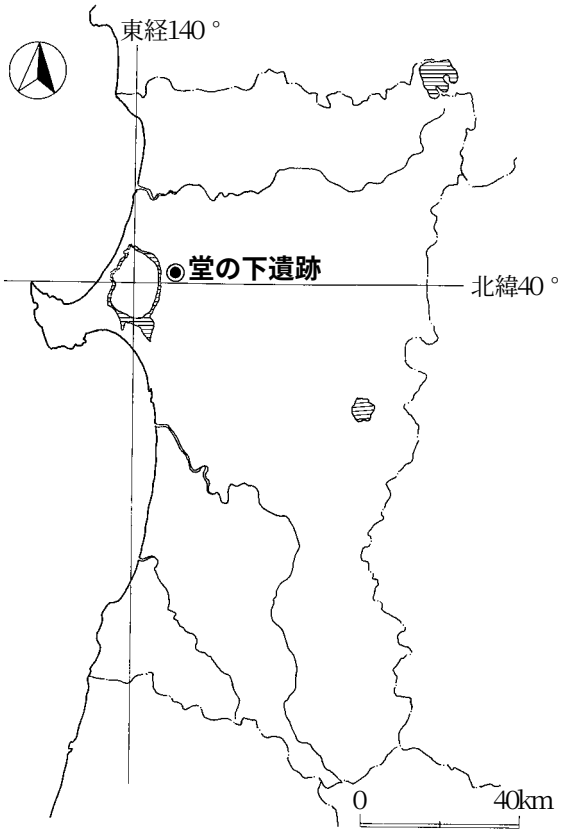
第２章　遺跡の環境

第１節　遺跡の位置と立地

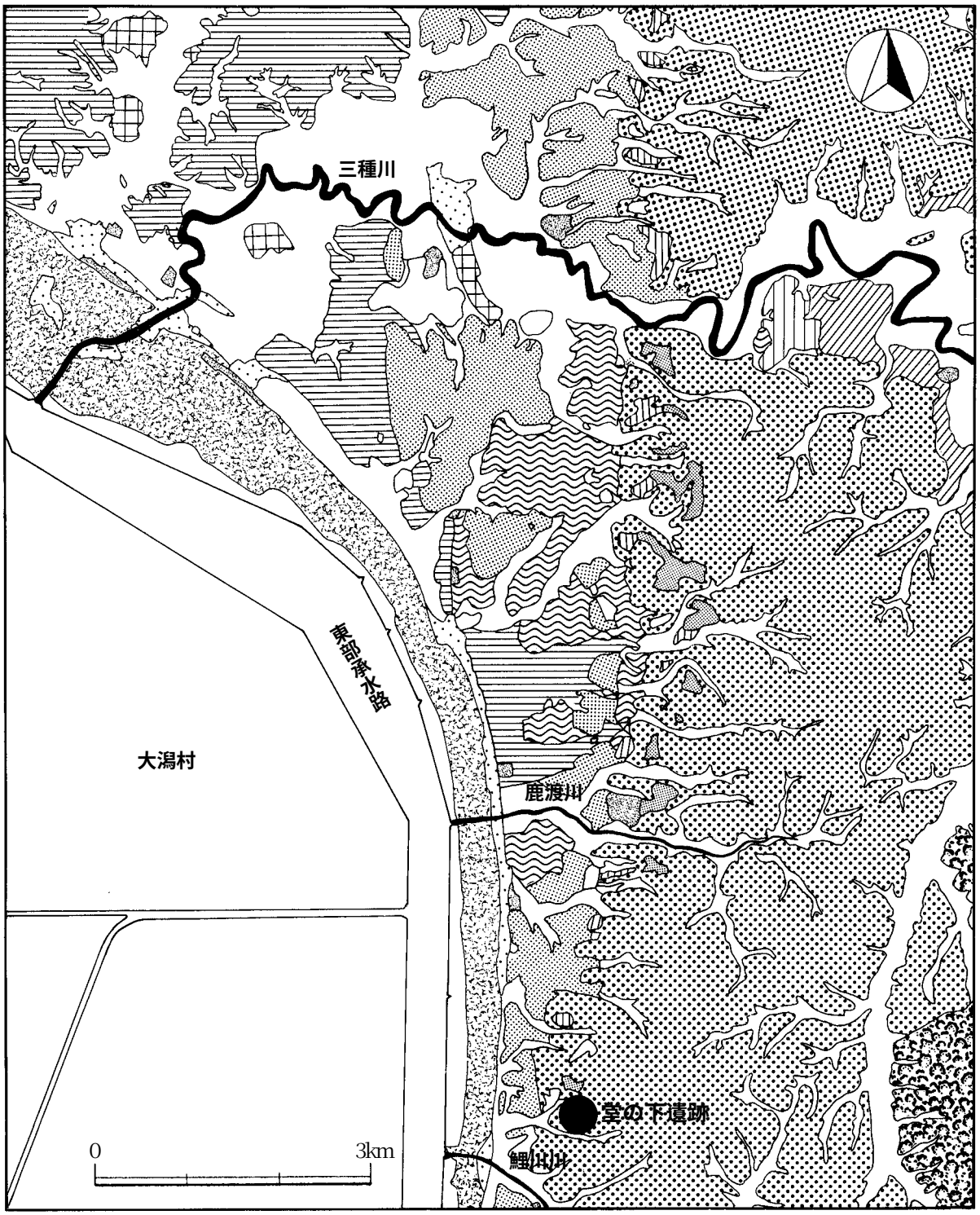
遺跡のある琴丘町は、西側の東部承水路から東側の出羽丘陵の間にある狭小な平野部を中心に集落が点在する町である。旧八郎潟の東岸に沿って南北に延びる平野のほぼ中央を、国道７号とＪＲ奥羽線が南北に平行しており、遺跡はこのＪＲ奥羽本線鹿渡駅から南東へ４㎞ほどの北緯40度０分44秒、東経140度５分29秒に位置している。

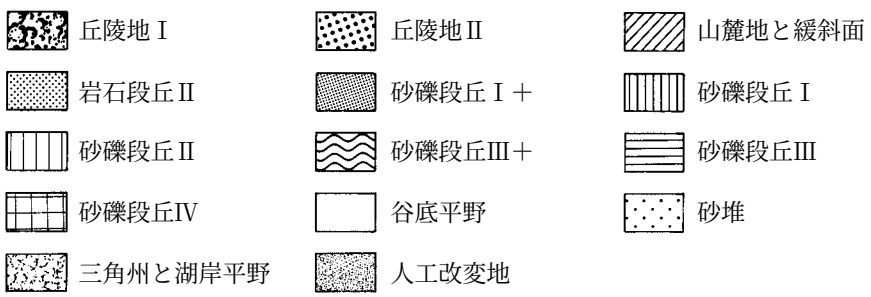
琴丘町を含む旧八郎潟東岸地域は、出羽丘陵地の北寄りに位置し、東は奥羽脊梁山地から分岐する太平山地に連なる七座山地・房住山山地、北は白神山地、西は日本海に面している。遺跡の東側で南北に聳える房住山山地と北の七座山地を結ぶ山頂部は、標高300～400mの高位浸食小起伏面群で、西側にはこれらの山腹をとりまくように丘陵頂部の標高が40～100mの斉高性のある浸食小起伏面群が発達している。また、この丘陵頂部の東側で山地に接する地形は急斜面となっており、西側では低位段丘面が平野面とともに低地面を形成し、この地域では山地、丘陵地、台地・低地の三段化した地形が規則正しく連なっている。平野面を形成する水系は、遺跡から北に7.5㎞ほどを西流するこの地区最大の三種川の他は、遺跡周辺で鹿渡川や鯉川川が八郎潟干拓地の東部承水路に注ぎ込んでいるに過ぎない。小林遺跡は、鯉川川水系により侵食を受ける鹿渡丘陵地、第四紀更新世に形成された潟西層の砂および泥層上に立地し、遺跡の標高は20～60mである。

遺跡周辺の地質は下位から新第三紀中新世の小谷沢層、女川層、船川層、天徳寺層、鮮新世の笹岡層、第四紀更新世の潟西層、段丘堆積物、完新世の段丘堆積物、沖積低地堆積物で構成されている。山地から湖岸に向かって地質時代の古い地層から若い地層が順に重なっているが、地層が褶曲しているため、南北の褶曲軸に沿って同一層が繰り返し露出している。このため湖岸に近い丘陵地の一部では、船川層の泥岩、女川層の珪質頁岩がみられる。また、鹿渡丘陵地、森山高岳山山地にそれぞれ火山岩類層がみられ、遺跡の南北にそれぞれ分布する。鹿渡丘陵地にみられる火山岩類は馬ノ松火山岩類と呼ばれており、岩種は石英安山岩、角閃石安山岩など多種にわたる。森山、高岳山では石英安山岩がみられる。堂の下遺跡から出土した石器の原材は、潟西層や段丘礫層に由来している。



第３図　堂の下遺跡の位置





第４図　堂の下遺跡周辺の地形

第２節　歴史的環境

遺跡のある琴丘町は、八郎潟東部承水路（八郎潟残存湖）東岸に位置する町である。町の東側には出羽丘陵が南北に連なり、承水路東岸との間には狭小な平野が存在し、多くの遺跡が平野に面した丘陵先端部に立地している。近年の道路整備事業や大規模ほ場整備事業に伴う発掘調査により、琴丘町を含む旧八郎潟東岸地域における旧石器時代以降の歴史が明らかにされてきた。

家の下遺跡（18-25）は、町内北部の標高24mほどの低丘陵上（森岳段丘面）にあり、縦長剥片を素材とするナイフ形石器や米ヶ森型台形石器が出土しており、ＡＴ降灰以前（約25,000年前）に位置付けられている。秋田市以北で調査された旧石器時代の遺跡としては、能代市此掛沢Ⅱ遺跡に次いでの旧石器時代の調査であるばかりでなく、その石器組成などからほぼ同時期の遺跡と考えられている。一方で、堂の下遺跡（18-28）のナイフ形石器は、ほぼ両遺跡と同時期と考えられるが、両遺跡の旧石器の出土点数が15,000点以上であるのに対して、堂の下遺跡の旧石器は10点である。同時期における出土石器の点数、石器組成、遺跡の立地の違いなどからも、25,000年前前後の能代山本地域における旧石器時代の遺跡が多様であったことがうかがえる。

家の下遺跡から南へ５㎞には、縄文時代前期の狐森遺跡（18-10）がある。遺跡は平野部に張り出した、標高20m前後の丘陵先端部にあり、これまでに３次にわたる発掘調査が行われている。平成10・11年に行われた調査では、縄文時代前期（円筒下層様式）全般にわたる捨て場が確認され、多量に出土した礫石錘や半円状扁平打製石器からは、遺跡内で行われた当時の生業の実態が解明されつつある。同遺跡では、縄文時代中期前半の竪穴住居や後期前半の土坑なども見つかっており、長期間にわたって営まれた遺跡であることがわかってきている。狐森遺跡から南東2.5㎞の標高50～60mの丘陵上にある小林遺跡（18-29）では、中期後半の竪穴住居跡や陥し穴状土坑などが確認されている。中期の遺跡としては、他に狐森遺跡と同時期の竪穴住居跡が見つかった宝竜前遺跡（18-15）が、標高15m前後の丘陵末端に立地している。縄文時代後期には、家の下遺跡で後期前半のフラスコ状土坑が多数調査され、堂の下遺跡においては、後期後半の竪穴住居跡が見つかっている。縄文時代晩期になると、家の下遺跡や狐森遺跡などが立地する段丘面に、高石野Ⅰ遺跡（旧:高石野遺跡、18-７）がある。昭和57年の琴丘町教育委員会による調査では、縄文時代後期後半から晩期の中頃までの遺物が多数出土しており、中でも晩期前半の大洞Ｂ・ＢＣ式に伴う土製品が多く、特に海獣を模したと思われる土製の土笛は、琴丘町のシンボルにもなっている。

旧石器時代から縄文時代の遺跡の多くは、既述のとおり平野に面した標高20m前後の丘陵先端部に立地していることが概観できる。特に、縄文時代にあっては海進・海退が繰り返され、これら縄文の遺跡は、当時八郎潟の汀線近くに面していたことが考えられ、海進・海退が縄文人の住環境や生業に大きく影響を与えたものと想像され、遺跡の立地と検出遺構や出土遺物の状況もそれを強く反映した結果であると考えられる。

平安時代になると、小林遺跡では竪穴住居や掘立柱建物のある大規模な集落が現れ、製鉄炉や鉄製品なども見つかっていることから、製鉄から鍛冶までを集落内で行っていたことがわかってきた。小林遺跡から北へ3.5㎞にある盤若台遺跡（18-13）と金仏遺跡（18-30）や泉沢中台遺跡（18-26）でも平安時代の製鉄関連遺構の他に竪穴住居や掘立柱建物などが多数見つかっており、これら遺跡群が製

鉄を中心とする生産遺跡であったことがわかってきた。平安時代にこの地域で、盛んに製鉄が行われたのは、原料となる砂鉄が容易に獲得できたからである。このことは、堂の下遺跡で13世紀ころの製鉄炉や大量の鋳型が見つかり、製鉄から鋳造まで行われていたことでも明らかである。堂の下遺跡の製鉄及び鋳造技術が、小林遺跡などの平安時代の技術とは別の系譜であり、北陸地方の技術がもたらされたものであることが、現在整理作業の進めている段階でわかってきている。中世の琴丘地区では、大規模な製鉄業と鋳造業が営まれ、鋳造品はおそらくは、八郎潟から日本海に出る海運によって消費地に供給されたことが考えられる。これまで、琴丘地域の古代から中世の歴史については明確ではなかったが、既述のとおり、近年の発掘調査結果からこの地域における当時の社会を解明できるようになってきた。江戸時代には羽州街道が整備され、現在の国道７号とほぼ平行して八郎潟東岸を通っており、旧石器時代からの歴史をたどることが可能になってきたと言える。

参考文献

藤岡一男・高安泰助　「八郎潟周辺の地質及び地形」『八郎潟の研究』　1965(昭和40)年

琴丘町教育委員会　『宝竜前遺跡緊急発掘調査報告書』　1978(昭和53)年

琴丘町教育委員会　『高石野遺跡発掘調査概報』　1983(昭和58)年

秋田県教育委員会　『歴史の道調査報告Ⅵ－北部羽州街道』　秋田県文化財調査報告書第132集　1985(昭和60)年

秋田県教育委員会　『家の下遺跡(２)旧石器時代編－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　秋田県文化財調査報告書第275集　1998(平成10)年

秋田県教育委員会　『泉沢中台遺跡－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』　秋田県文化財調査報告書第276集　1998(平成10)年

秋田県教育委員会　『兵ヶ沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』　秋田県文化財調査報告書第296集　2000(平成12)年

秋田県教育委員会　『狐森遺跡－県営ほ場整備事業(琴丘南地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』　秋田県文化財調査報告書第344集　2000(平成12)年

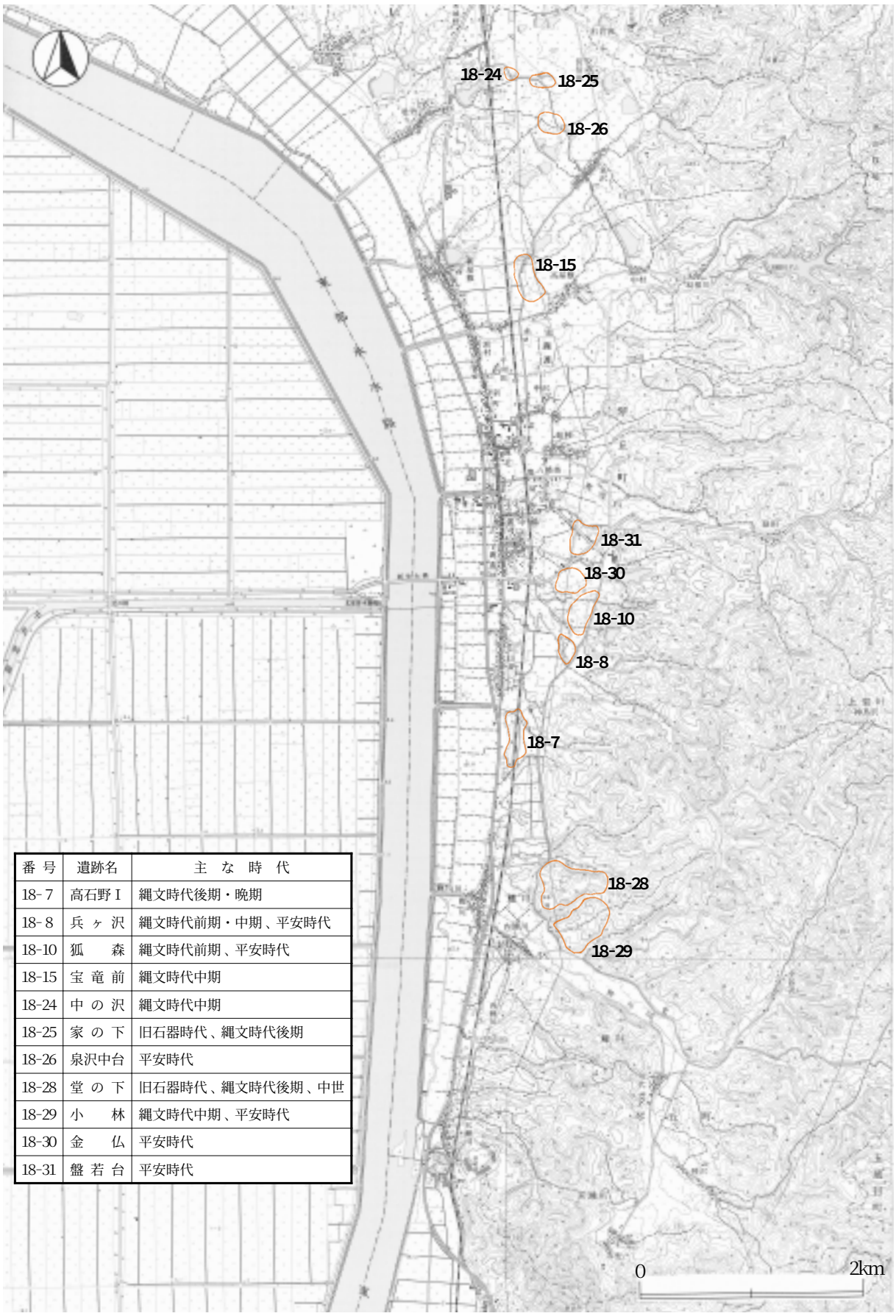
秋田県教育委員会　『盤若台遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る発掘調査報告書Ⅷ－』　秋田県文化財調査報告書第319集　2001(平成13)年

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図(山本地区版)』　2002(平成14)年

秋田県教育委員会　『金仏遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ－』　秋田県文化財調査報告書第333集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会　『小林遺跡Ⅰ縄文時代編－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－』　秋田県文化財調査報告書第344集　2002(平成14)年

秋田県教育委員会　『狐森遺跡－一般国道琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ－』　秋田県文化財調査報告書第345集　2002(平成14)年



番 号	遺跡名	主 な 時 代
18-7	高石野Ⅰ	縄文時代後期・晩期
18-8	兵 ヶ 沢	縄文時代前期・中期、平安時代
18-10	狐　　森	縄文時代前期、平安時代
18-15	宝 竜 前	縄文時代中期
18-24	中 の 沢	縄文時代中期
18-25	家 の 下	旧石器時代、縄文時代後期
18-26	泉沢中台	平安時代
18-28	堂 の 下	旧石器時代、縄文時代後期、中世
18-29	小　　林	縄文時代中期、平安時代
18-30	金　　仏	平安時代
18-31	盤 若 台	平安時代

第５図　堂の下遺跡周辺の遺跡分布図

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

堂の下遺跡は、八郎潟東岸の丘陵上に立地する旧石器時代から中世に至る複合遺跡で、平成９年度に行われた日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴う遺跡分布調査で発見された新発見の遺跡である。約2.5㎞西側には八郎潟東部承水路があり、東側には出羽丘陵がひかえる。

発掘調査区の標高は25～68mで、大小の沢が東から西に向かって流れ出す起伏の大きい地形となっている。高低差は、Ｈ区最高地点とＡ区最低地点で43mあり、東側に向かうほど標高が高くなっている。北側および南側は標高差約30mの谷となっている。Ａ区の北側は、Ｆ区東端部から流れる水が溜まる場所となっており、西側調査区外に流れ出ている。遺跡の南側には、古代の製鉄関連集落である小林遺跡がある。

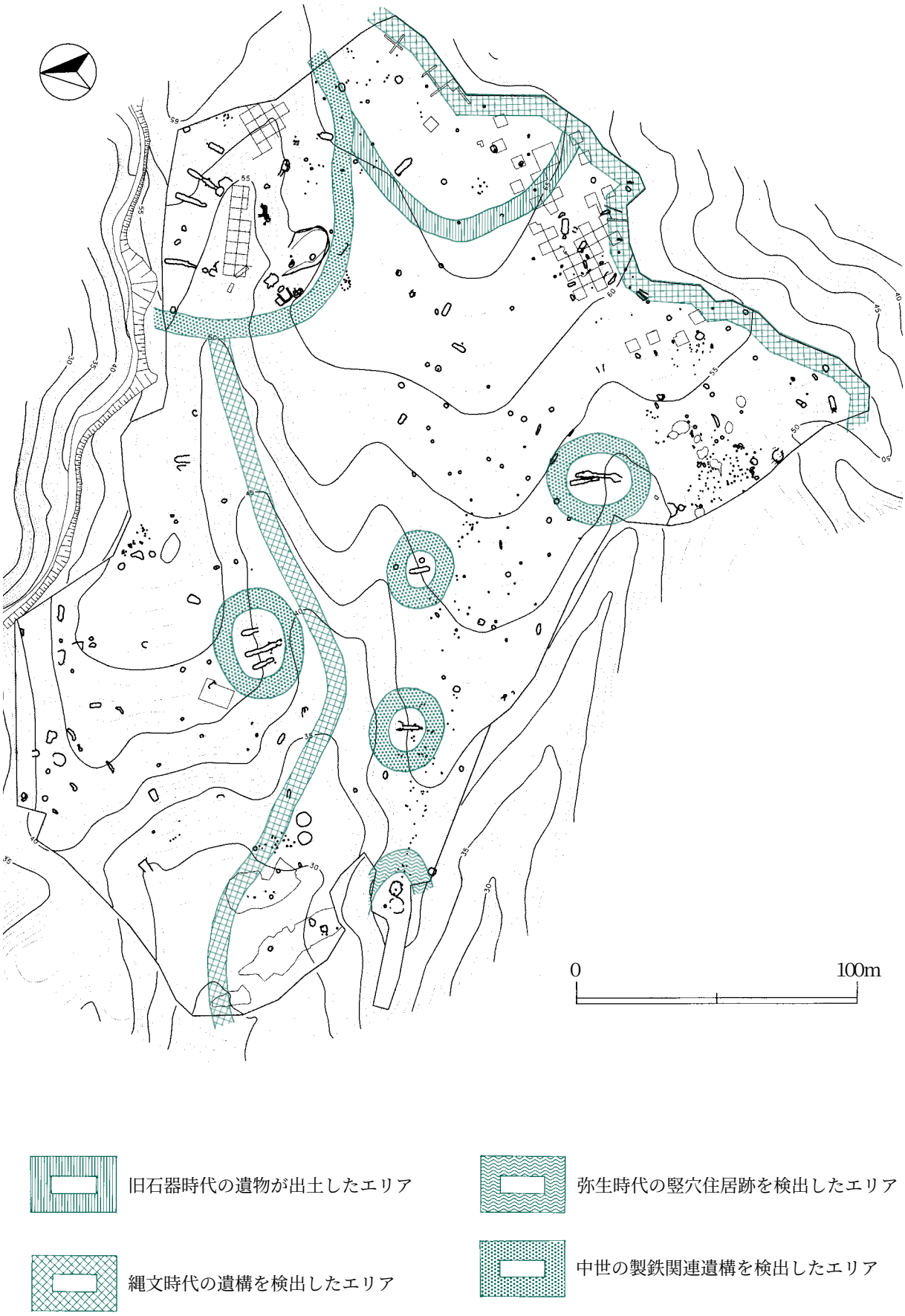
旧石器時代の遺物としては、縦長剥片を利用したナイフ形石器が調査区東側で出土している。平成６年度に発掘調査が行われた琴丘町内の家の下遺跡では、標高26mの地山面下から18,305点にのぼる遺物が出土し、ナイフ形石器や石刃の他、石核・チップ・フレークからなる複数のブロックの存在が確認されている。堂の下遺跡の場合、石核やチップが出土していないことから、旧石器時代のブロックが存在する可能性は低い。

縄文・弥生時代の遺構・遺物は、調査区の中央を東西に縦断する沢の南側一帯で検出した。検出した遺構は、縄文時代後期の竪穴住居跡３軒、フラスコ状土坑８基、陥し穴状土坑３基、土坑６基、弥生時代の竪穴住居跡１軒である。これらの他に、土器片、石器、石器剥片が多量に出土する範囲を１ヵ所確認している。

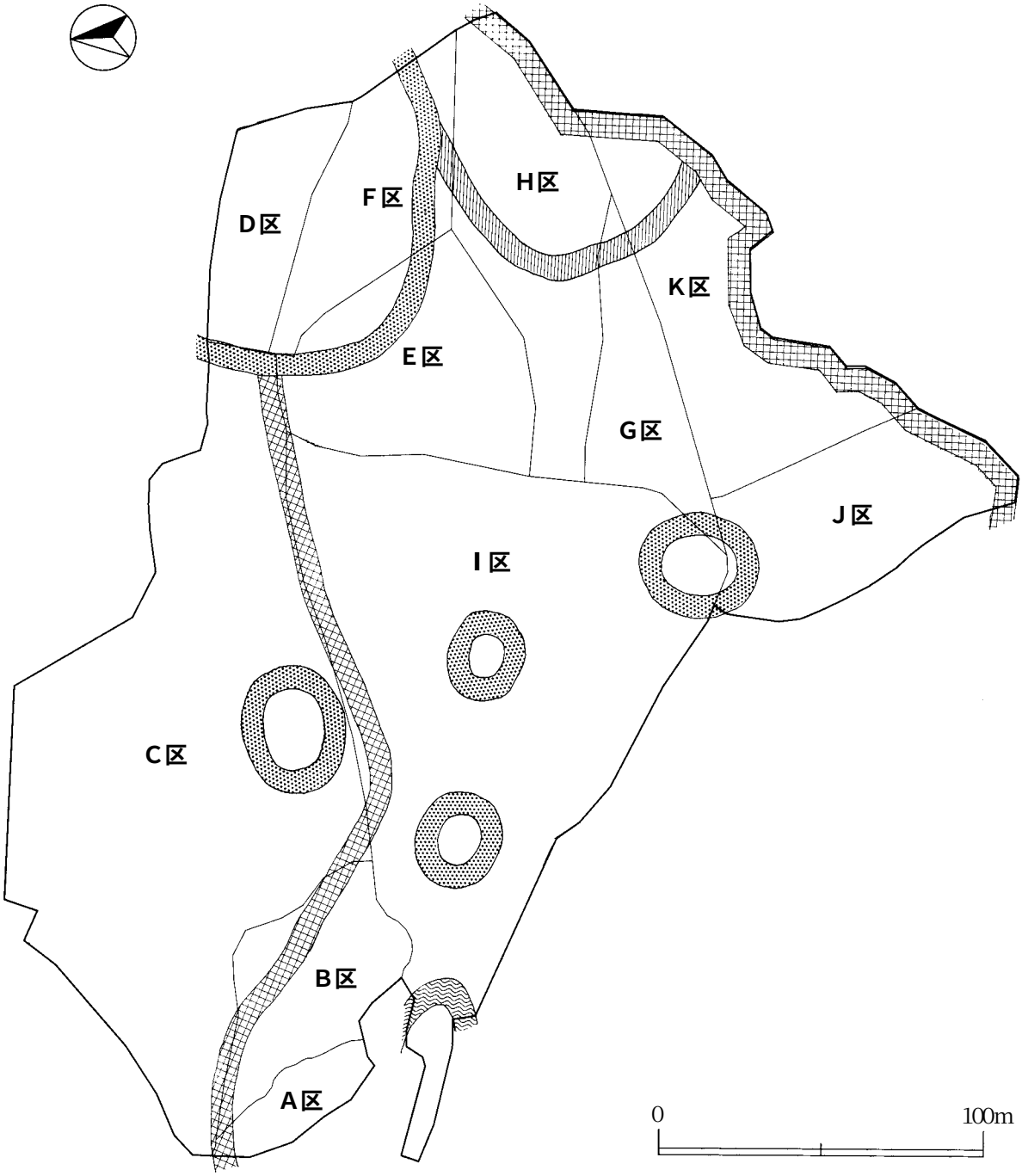
各時代の主な遺構・遺物の分布は、旧石器時代ではＨ・Ｋ区の緩斜面、縄文時代ではＣ区を除きほぼ全域、弥生時代では西側の尾根先端部にそれぞれまとまっている。竪穴住居は、縄文時代では沢の底面および比較的平坦な尾根上に、弥生時代では細い尾根上に立地している。限定された平坦な場所に１～２軒からなる小規模な集落が営まれていたようである。Ｃ区では縄文・弥生時代の遺構は皆無であり、遺物も少なかった。中世になると随所に製鉄に関連する施設が分布し、前時代にはほとんど利用されていなかったＣ区にも、尾根上には半地下式炭窯、斜面には地下式炭窯が構築されるようになる。この時代では建物跡等の居住施設が一切検出されていないことから、遺跡が鉄生産を目的とした工場地になったと想定される。

遺構数は調査面積に対して少なく、切り合い関係がある遺構は１つも存在しない。これは遺跡全体が斜面となっており、平坦面が狭小であるために大規模な集落が成立しなかったことによるものと考えられる。北および南側の谷は、トレンチによる調査の結果、遺構が存在せず、遺物も流れ込みと判断され、遺跡範囲から除外している。

堂の下遺跡の広がりは発掘調査した55,000㎡とその東西に延びる丘陵尾根に及んでいる。推定される総面積は70,000㎡以上と考えられる。


0
100m
旧石器時代の遺物が出土したエリア
弥生時代の竪穴住居跡を検出したエリア
縄文時代の遺構を検出したエリア
中世の製鉄関連遺構を検出したエリア

第６図　遺構配置図



A区：　822.68㎡	B区：2,519.21㎡	C区：14,704.07㎡	D区：1,920.57㎡
E区：4,012.27㎡	F区：2,775.80㎡	G区：1,992.20㎡	H区：4,393.43㎡
I区：14,341.35㎡	J区：3,575.31㎡	K区：4,762.31㎡	

総調査面積：55,819.2㎡

第７図　調査区区分図

第２節　基本土層

遺跡の基本土層は、Ｋ区を南北に縦断するベルトを設定し観察した。旧石器時代のナイフ形石器がＫ区から出土ており、地山土以下の土層堆積状況を把握するために同区の一部を深掘りしている。これらをⅠ～Ⅷ層に分層して、各層の特徴を記録した。

以下に、Ｋ区基本土層ベルトおよび深掘りの観察結果を記す。

第Ⅰ層　表土

第Ⅱ層　暗褐色土（7.5Ｙ R3/3）

第Ⅲ層　明褐色土（7.5Ｙ R5/6）

第Ⅳ層　明褐色土（7.5Ｙ R5/8）地山

第Ⅴ層　橙色土（7.5Ｙ R6/8）

第Ⅵ層　旧石器時代ナイフ形石器出土層

第Ⅶ層　青灰色砂質土

第Ⅷ層　砂岩混じりの灰白色砂質土

Ⅱ層には全体的に炭化物粒子が混入していた。これは、中世製鉄関連遺構の分布する区域からの流れ込みと判断される。Ⅳ層は縄文・弥生時代の遺構確認面、いわゆる地山面である。Ⅲ層は明褐色を呈するが縄文土器が出土していることから地山漸移層と判断した。遺構の掘り込み面は、本来はⅢ層上面と考えられる。Ⅴ層は橙色を呈する土である。被熱による発色ではなく、酸化による影響と考えられる。Ⅶ・Ⅷ層からは遺物や炭化物の出土はなかった。Ⅷ層はⅠ～Ⅶ層とは明らかに異質な土質であり、砂岩混じりの砂質土である。ナイフ形石器のうちＫ区の１点はⅥ層の上位から出土した。Ｈ区のものについては、Ⅰ～Ⅷ層との対比ができない。

なお、Ａ～Ｊ区については、遺構精査を優先的に行っており、基本土層図としては記録していない。全体の傾向としては、旧石器時代の遺物がＫ・Ｈ区の東側を中心とする丘陵尾根の平坦面がやや広くなった場所に集中し、縄文時代の遺物は疎らではあるが、ほぼ全域で認められる。弥生時代の遺物は竪穴住居跡の周辺に集中する傾向が見られ、特に住居北側の谷からの出土が目立った。

第３節　調査の方法

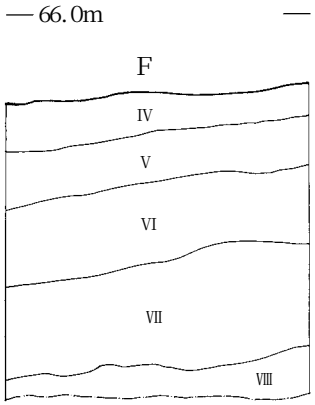
１　調査区の設定

工事工程上、段階的に調査区を引き渡す必要があったことから、調査対象範囲をＡ～Ｋ区に区画して調査を進めた。

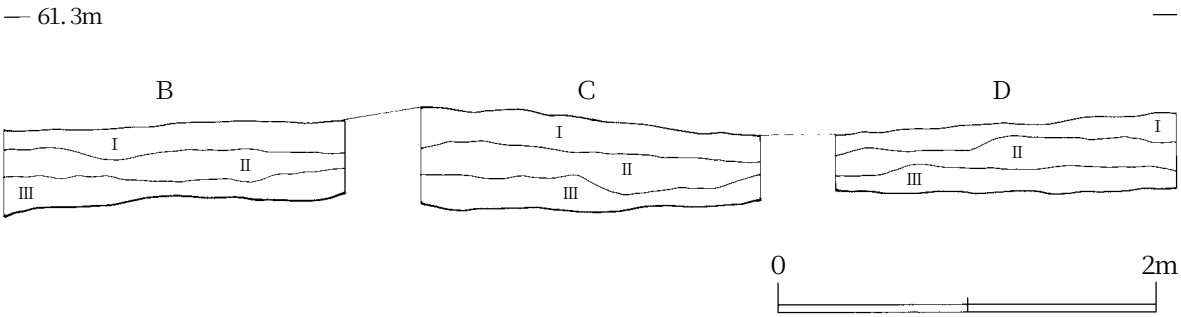
各調査区が起伏の激しい地形であることから、従来の４×４ｍのグリッドを設定する方法ではなく、トータルステーションで各測点を国家座標値で割り出して調査区全体の把握に努めた。また、調査区内の随所に水準杭を打設し、遺構断面図作成等の際これを基準とした。

２　調査及び記録の方法

調査はＡ～Ｃ区を平成10年度、Ｄ～Ｉ区を平成11年度、Ｊ・Ｋ区を平成12年度と３カ年に分けて



Ⅰ　表土層
Ⅱ　暗褐色土（7.5ＹＲ３／３）　シルト質土　やや固く締まり強い　粘性弱い
　　炭化物微粒子全体に混入（２％）
Ⅲ　明褐色土（7.5ＹＲ５／６）　粘土～シルト質土　固く締まり強い　粘性強い
　　上部には２層の漸移が不明瞭に見られる　遺物包含層
Ⅳ　明褐色土（7.5ＹＲ５／８）　粘土質土　固く締まり強い　粘性強い　地山層
Ⅴ　橙色土（7.5ＹＲ６／８）　粘土質　非常に固く締まり強い　粘性強い　地山漸移層
Ⅵ　旧石器遺物包含層
Ⅶ　青灰色砂質土
Ⅷ　砂岩混じりの灰白色砂質土



第８図　基本層序（Ｋ区）

行った。表土除去は全て重機を用いて行った。

遺構配置図、遺構平面図、遺物分布図等の作成は全て業務委託して行った。

測量業務委託は、調査区の地形図作成を各年度当初に、遺構完掘平面図作成、遺物出土地点記録をある程度まとまった段階で行った。また、現場引き渡し前に航空写真撮影を数回に分けて行い、最終的に各調査区の写真を合成して調査区全景写真を作成した。

遺構断面図については、半割により遺構内部に堆積した覆土の土層を観察・記録した。平面図との整合性は、トータルステーションで測定したポイントを元にして合成し、平面図を修正して第２原図を作成した。

遺物はチャック付きのビニール袋に遺跡略号・地区名もしくは遺構名・遺物番号・出土年月日を記入して取り上げた。排土中から出土したものについては、全て表面採集として取り上げた。

写真撮影は、遺構精査では確認状態・土層断面・遺物出土状況・完掘状態を35㎜判モノクロフィルム、リバーサルフィルムで行い、場合によってネガカラーフィルムも併用した。また、６×4.5、６×６、６×９判フィルムも適時使用した。

３　遺物整理の方法

出土した遺物は洗浄・注記した後、接合作業を行った。注記は取り上げ時にビニール袋に書いてある項目を記した。遺構内出土のものについては、遺構床面あるいは床面直上から出土したものを選別し、拓影・断面実測し図示した。遺構外については、遺物番号を付して平面位置をトータルステーションで測定したものを１点ずつ実見して検討した。石器は取り上げたもののうち加工痕のない自然礫を抜き出し、次にトゥールと判断されるものを選別し実測した。土器は器面の文様が鮮明なものを優先して拓影・断面実測を行った。遺物は全て１／１で図化した。

第４節　調査の経過

調査は平成10年度から平成12年度にかけての３ヵ年にわたり行われたことから、年度毎に記載する。なお、本篇の内容が旧石器時代から弥生時代であることから、中世の製鉄関連遺構・遺物についての記録は省略している。

平成10年度　調査期間：７月８日～11月27日

７月８日から重機による表土除去を始める。

８月18日、ＳＩ29・31を検出する。21日、ＳＩ29内より縄文時代後期の深鉢形土器が１個体出土する。また、北東側床面より頭部に緻密な文様が刻まれた石棒を検出する。

９月３日、Ａ・Ｂ区の調査を終了する。

９月から11月にかけてはＣ区の精査を中心に行った。Ｃ区は尾根部から剥片が集中する範囲を確認し、ユニットの存在が予想された。結果的に、接合関係等を示す資料は認められなかった。

10月12日、Ｅ区中央部より弥生時代の甕形土器が出土する。体部には平行沈線、鋸歯状沈線が施され、口縁部は波状になり「Ｂ」突起を有するものである。20日、ＳＫＦ155を検出する。

11月は地下式炭窯、製鉄炉の精査を行い、11月27日今年度の調査工程を終了する。

平成11年度　調査期間：４月26日～12月27日

４月26日、職員、非常勤職員で精査可能な遺構から調査を開始する。27日、重機によりＩ区の表土除去を始める。

５月、６月は中世製鉄関連遺構の精査を行う。

７月８日、H区南側のＳＸ234は精査の結果フラスコ状土坑であると判断する。また、Ｅ区西側緩斜面においても同様の遺構を確認する。12日、Ｉ区の粗掘りに入る。Ｔピットを南側斜面において検出する。15日、ＳＫＦ234の精査を終了する。27日ＳＫＦ232、ＳＫＴ251を検出する。29日、ＳＫＦ232の精査を終了する。

８月23日、中世の地下式炭窯跡であるＳW274周辺から弥生土器が出土する。26日、青山学院大学教授藤原良章氏他３名、中世製鉄遺構の見学で来跡する。

９月２日、Ｉ区西端部で弥生時代の壺形土器が出土する。６日、壺形土器出土地点周辺部に円形のプランを確認する。ＳＸ291として精査を開始する。９日、ＳＫＴ288の精査を終了する。13日、ＳＸ291の掘り下げを進めたところ柱穴が床面にあることが確認されたことから、竪穴住居跡と認定する。14日、ＳＫＦ297、302を検出する。20日、ＳＫＦ317を検出する。ＳＫＦ302の精査を終了する。24日、ＳＫＦ297、302の精査を終了する。

10月１日、ＳＩ291の床面で地床炉を検出する。５日、ＳＩ291完掘写真を撮影して精査を終了する。

この後12月27日までは中世製鉄関連遺構の精査を行う。

平成12年度　調査期間：４月24日～10月31日

４月24日、重機による表土除去を開始する。27日、遺物が多く出土するレベルを確認し、これ以下を人力で掘り下げることとする。

５月１日、表土除去が終了した。15日、Ｊ区から作業員を入れての作業を開始する。17日、ベルトコンベアー等のリース機材が到着する。26日、調査区全域にわたって土器・石器が散在していることを確認する。１点ずつ取り上げる。

６月14日、Ｊ区中央部の掘り下げを行ったところ縄文時代後期の土器・石器が多量に出土する。29日、中央部の遺物集中出土範囲をＳＸ427として実測を開始する。

７月２日、ＳＸ427を継続して調査する。縄文時代後期の石器製作跡の可能性がある。４日、北側沢においても土器、石器片が多量に出土する。17日、西側に遺物出土量が多い範囲が認められＳＩ436として精査を開始する。24日、ＳＩ436の掘り下げ中に、床面西側寄りで地床炉と推定される焼土範囲を確認する。28日、午後道路公団と業者立ち会いのもとＪ区の現場引き渡しを行う。ラジコンヘリコプターでＪ区全景空中写真撮影を実施する。

８月２日、ＳＸ427、ＳＩ436の精査を終了した。21日、Ｋ区に山積みされた排土移動を重機で開始する。29日、重機による排土移動を終了する。

９月21日、Ｋ区東側の深掘り区からナイフ形石器が１点出土した。22日、深掘り地点の北側に層位確認用のトレンチを設定して掘り下げを進めた。26日、ナイフ形石器出土付近の土層は撹乱が及んで

おらず、プライマリーな堆積を示していることを確認する。深掘りを進めたがチップ・フレークが集中する地点はない。

10月11日、秋田県文化財保護審議委員等が遺跡現地指導のため来跡する。13日、坪掘り箇所を増やして旧石器の有無を確認する。17日､深掘り箇所をさらに掘り下げたところ､粘土層下が青砂層になっていることを認識する。30日、ラジコンヘリコプターで発掘調査区全域の撮影を行う。

31日、Ｋ区を道路公団立ち会いのもと引き渡し、平成10年度から始まった堂の下遺跡発掘調査の全工程を終了する。

《参考文献》

秋田県教育委員会　『県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－家の下遺跡(１)－』　秋田県文化財調査報告書256集　1995(平成７)年

秋田県教育委員会　『家の下遺跡(２)　旧石器時代編－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』　秋田県文化財調査報告書第275集　1998(平成10)年

第４章　調査の記録

調査区全体の面積は55, 000㎡と広大であり、前章で述べたとおりＡ～Ｋ区に区分して調査を進めた。調査区により地形が大きく異なり、各遺構の記述に入る前に調査区全体の概観について記す。

調査区は、Ｆ区東側に端を発する沢によって大きく南北に分かれる。北側は比較的痩せた尾根地形となっており、南側は舌状の台地で西に至るほど小さな沢によって所々東西方向に開析されている。調査区南西側のＪ区にはやや広い平坦地があり西側に続いている。一方、北東側のＤ区は南北が急な角度で落ち込んでおり、尾根頂部の幅が約２ｍと狭小になっている。南側にはトンネル状に掘り込んだ中世の地下式炭窯が数基構築されているが、縄文・弥生時代の遺構は検出されなかった。調査面積が広いにもかかわらず遺構の分布密度が低いのは、上述のように地形的な制約によるものと推定する。

遺物は、場所によって分布密度に差があるが、全域から出土している。縄文時代後期のものが大半を占め、東側では中世の製鉄・鋳造に関連する炉壁や鍋鋳型が多数出土している。中世の遺物については、平成15年度刊行予定の中世篇に掲載することにする。

遺構の記述については、竪穴住居跡、フラスコ状土坑、陥し穴状土坑、土坑の順で記載している。縮尺は遺構図を１／40、出土遺物を原寸の１／３ないしは１／２で掲載している。旧石器時代の遺物については、第２節に掲載している。

第１節　検出遺構と出土遺物

１　竪穴住居跡

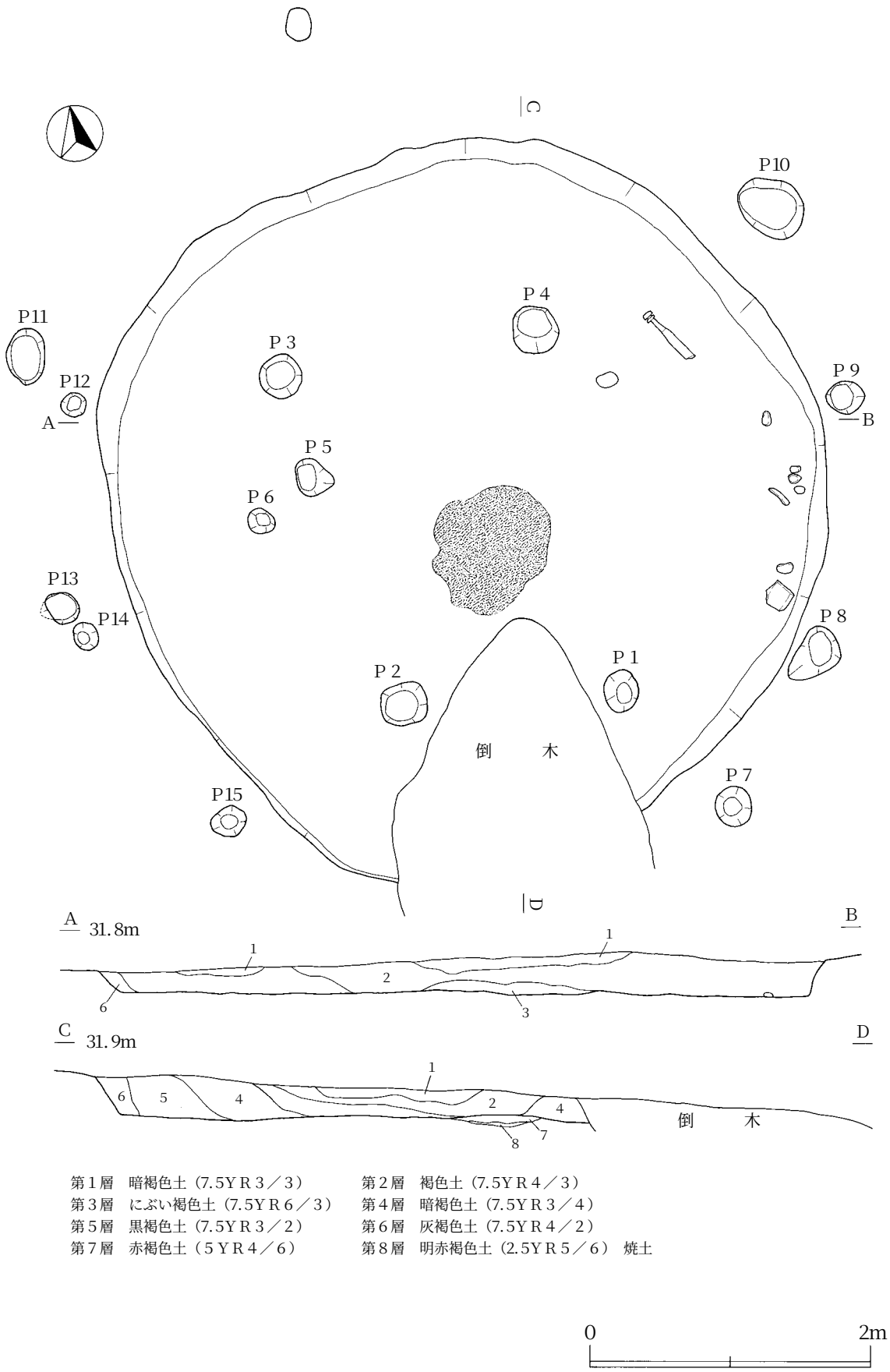
ＳＩ29竪穴住居跡（第９・10・19・20図、図版２・３）

Ｂ区東側に位置し、西側にＳＩ31が隣接する。

平面形は直径約5.4mの円形である。壁は南側が倒木により失われているが、全般にゆるやかに立ち上がり、壁高は現状で0.3m前後である。床面は沢に堆積した粘土層を掘り込んでおり、平坦である。床面の中央やや南東側には、赤変硬化している範囲があり、これが被熱によるものであると推定すれば、炉であったと考えることができる。柱穴は床面および竪穴周辺で15基を検出し、径0.17～0.5mの略円形を呈する。壁から約１ｍ内側に配置する４基（Ｐ１～４）は、直径・深さがいずれも0.3m程と揃っており、掘り方の形からいずれも柱は垂直に立てられていたと推定され、本竪穴住居の主柱穴と想定し得る。竪穴の外周には、直径・深さ・平面形とも異なる９基の柱穴が配置している。主柱穴と外周に巡る柱穴が、住居の上屋構造をどのように支えていたかについては構造材が出土していないことから不明である。

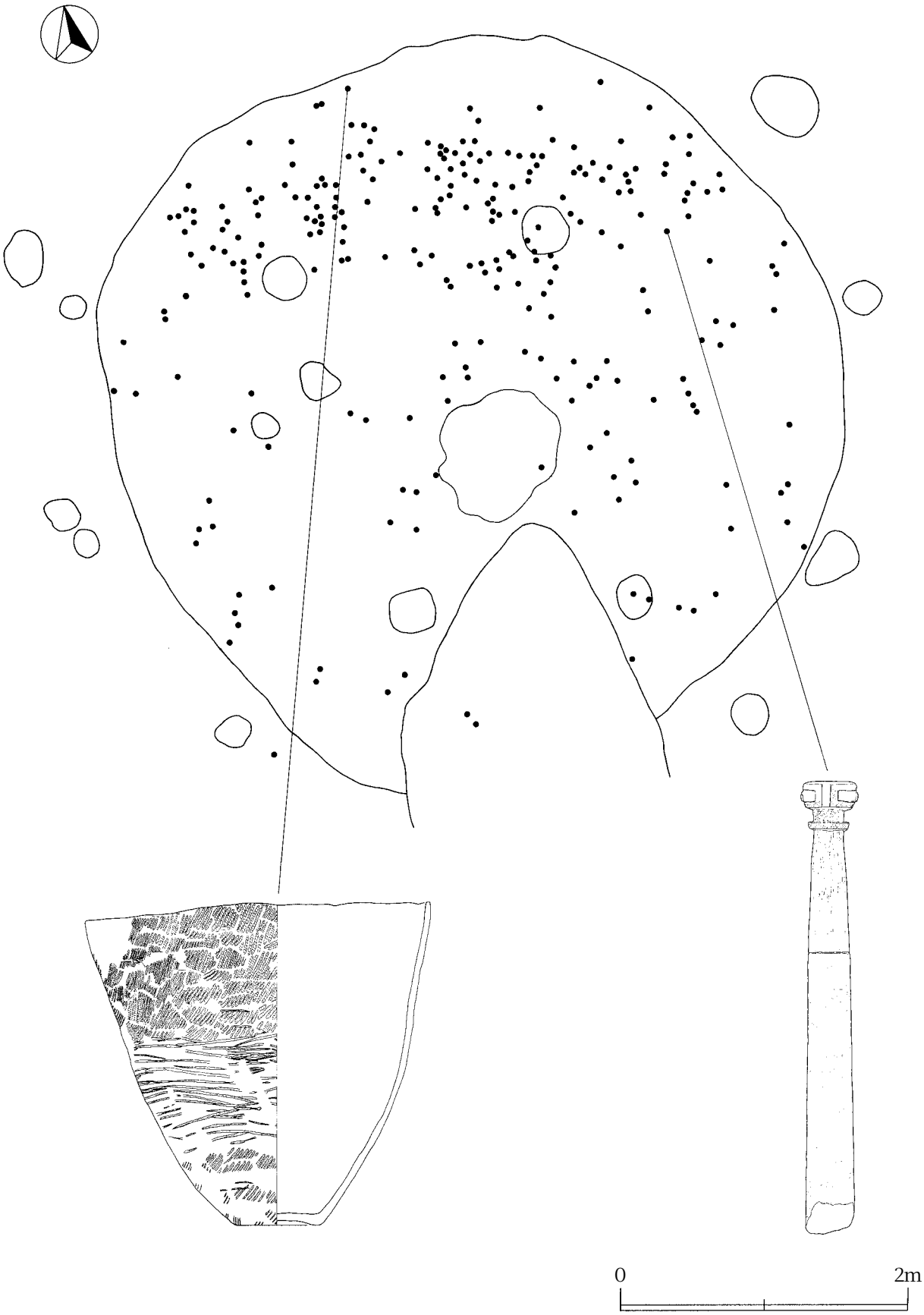
埋土は１～８層に分けた。全体的には北西方向からの堆積となっており、レンズ状に堆積していることから、自然堆積により埋没したものと考えられる。壁際の６層は地山土に由来し、壁の上位部分が崩壊したものもしくは周堤が流れ込んだものと推定する。

遺物はそのほとんどが床面から出土しており、第10図にはその平面分布をドット図で示してある。図示した遺物は254点であり、北側からの出土が比較的多くなっている。北西側壁際からは縄文時代



第１層　暗褐色土（7.5ＹＲ３／３）　第２層　褐色土（7.5ＹＲ４／３）
第３層　にぶい褐色土（7.5ＹＲ６／３）　第４層　暗褐色土（7.5ＹＲ３／４）
第５層　黒褐色土（7.5ＹＲ３／２）　第６層　灰褐色土（7.5ＹＲ４／２）
第７層　赤褐色土（５ＹＲ４／６）　第８層　明赤褐色土（2.5ＹＲ５／６）　焼土

第９図　ＳＩ29竪穴住居跡（１）



第10図　ＳＩ29竪穴住居跡（２）

後期中葉の深鉢形土器（１）、北東側床面からは折損した石棒（５）がそれぞれ出土している。１は、底部から体部下半がやや丸みをもち、体部上半から口縁部が外傾してほぼ直立する深鉢である。口縁部はやや歪んでおり、口唇部は平滑に作られている。文様は体部に横位の平行沈線が施された後、その上下にはＬＲ縄文が施されている。底部は外面中央部がくぼむいわゆる上げ底となっている。２～11の表面には弧状あるいは蛇行する沈線による磨り消し縄文が施されている。12～16にはＬＲあるいはＲＬ縄文が施されている。１は鏃身の断面が菱形を呈する有茎の石鏃である。３・４は石匙で、３はつまみ部を作出した後に素材剥片の片側縁に二次調整を行っている。５は粘板岩製の石棒で、頭部にはレリーフ状の細工が施され、その窪み部には微細な工具により格子目文様が描かれている。

なお、炉周辺から出土した炭化物の^{14}Ｃ年代測定結果は、補正年代3,040±40ＢＰ、材の樹種同定結果はクリであった。

埋土の堆積状況、遺物の出土状況から本竪穴住居は縄文時代後期中葉に構築され、廃絶後短時間のうちに埋没した可能性が強い。

ＳＩ31竪穴住居跡（第11・21図、図版３・４）

Ｂ区東側に位置する。

平面形は直径約５ｍの円形である。壁は急角度で立ち上がり、壁高は現状で0.3m前後である。床面は粘土層を掘り込んでおり平坦である。東側には貼り床が施されていて、掘り込み時に凸凹になった場所を整地したものと考えられる。床面の中央やや西寄りには長径0.5m、短径0.3mの不整な楕円形の赤変硬化した範囲を検出しており、ＳＩ29同様の地床炉であった可能性が高い。柱穴は整然とした位置に配置されたものはなく、直径0.2～0.5mの円形を呈するものを床面で４基、竪穴の西側外で２基それぞれ検出している。

埋土は１～８層に分けた。８層は貼り床に使用するために地山土を基礎とした土である。西側の５層は地山ブロックを多く含んだ土であり、壁崩壊土が流れ込んだものと考えられる。レンズ状に堆積しており、自然堆積による埋没である。

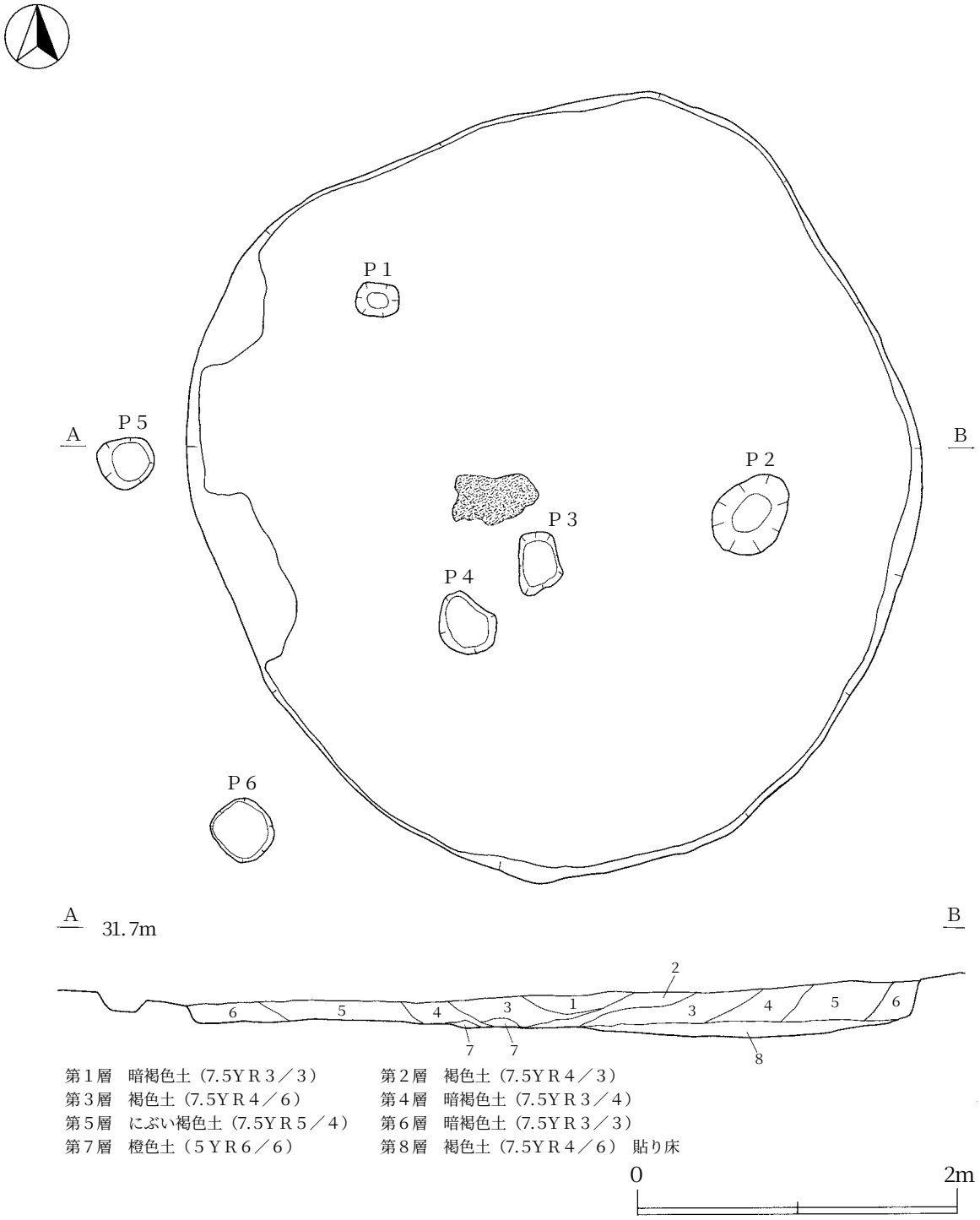
遺物は、１～４層で多く出土している。貼り床土中からは出土しなかった。17は正面に小渦巻きをもった沈線文が施されている。橋状把手部分である。縄文時代後期初頭の門前式に比定される。18～20は縄文が施された深鉢の体部破片である。21、22は深鉢の底部で、立ち上がりが強く外反し、底部側面下端が外側に張り出す。

ＳＩ291竪穴住居跡（第12・13・21図、図版４・５）

Ｉ区西側の尾根上に位置する。

平面形が長径5.7m、短径4.8mの歪な円形である。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高は現状で0.2mである。床面は緩く歪んでおり、中央やや北東寄りでは長径0.9m、短径0.7mの楕円形の範囲が赤変硬化しており、地床炉であったと考えられる。柱穴は床面から８基検出した。直径0.2～0.3mの円形であり、壁に沿うようにして円形に配置されている。南北が急角度で落ち込んでいる尾根の頂部に立地しており、北側の斜面からは本竪穴住居と時期を同じにする遺物が多数出土している。

埋土は１～５層に分けた。３～５層は床面にある炉の影響から土が漸移的に変化したものである。



第11図　ＳＩ31竪穴住居跡

出土した遺物はいずれも弥生時代のものである。37・38は台付浅鉢の台部、36・39・40は壺、34はミニチュア土器、41・42は円盤状土製品、他は甕である。39は底部がやや上げ底気味で、内湾しながら口縁部に至る。体部下位から上位にかけてはＲＬ縄文が施文され、その上には数条の平行沈線と連弧文からなる文様が施されている。23は、頸部と肩部に対応する平行沈線が施され、その間に縦方向の刷毛目が見られ、裏面には横方向の刷毛目が見られる。31・32は数条の平行沈線文の下位に鋸歯文が施されるものである。33は頸部から急な角度で外傾して口縁部に至る。波状口縁を呈し、口唇部には連続刺突文が巡る。37・38には沈線による変形工字文が施されている。40は磨り消し縄文による複雑な文様が描かれている。34は鉢形土器のミニチュアである。41・42は土器片を再利用した円盤状土製品である。

ＳＩ436竪穴住居跡（第14・22図、図版５～７）

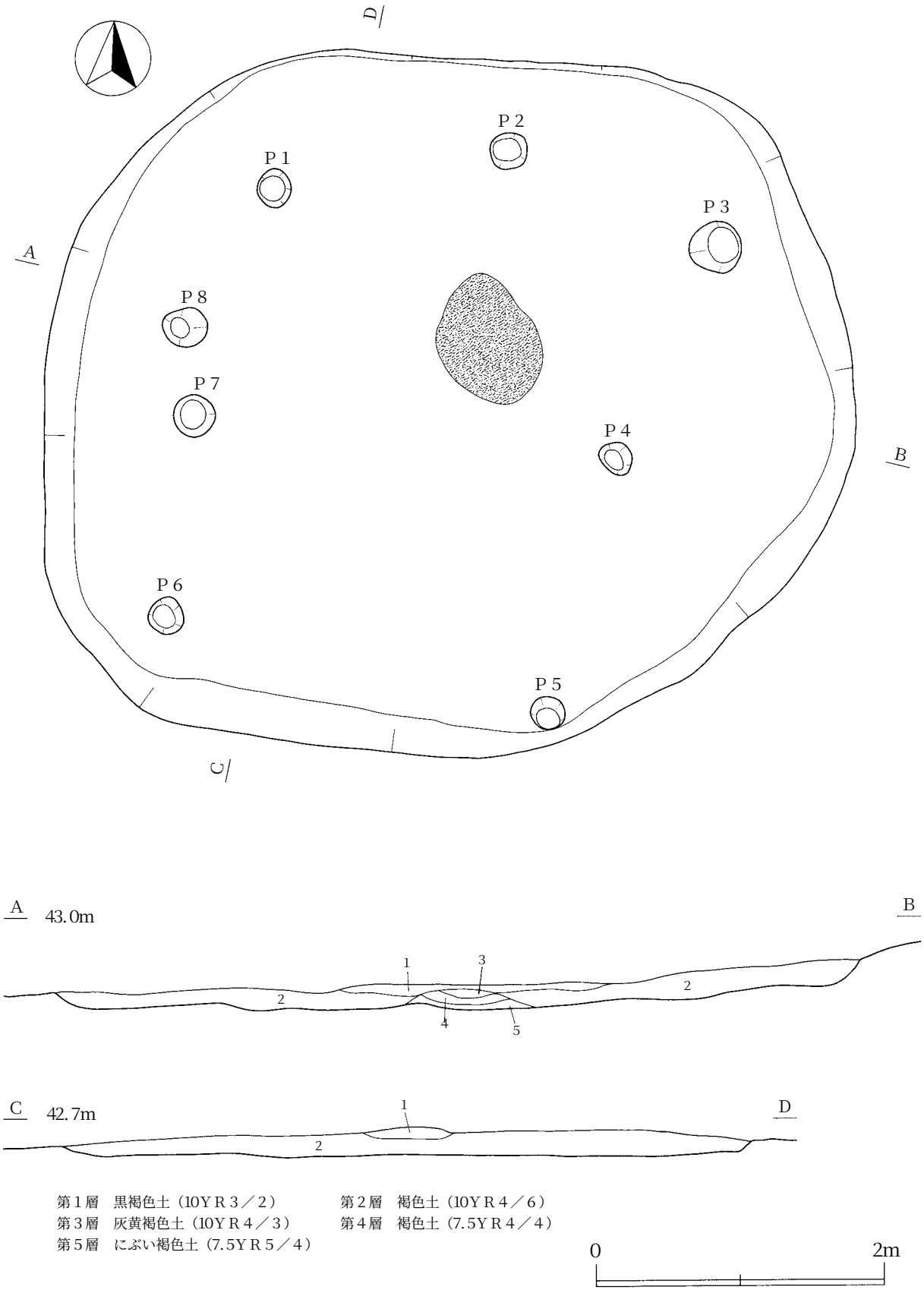
Ｊ区西端部に位置する。

平面形が直径約４ｍの円形である。壁は北側で急な角度で立ち上がり、壁高は北側で約0.5mであるのに対し、南側は遺存状態が悪い。これは、竪穴の掘り込み時にすでに南側が斜面となっており、床面の確保が北側のみを掘り込むだけで可能であったためと推定する。床面は平坦であり、中央やや西寄りでは長径1.7m、短径1.4mの範囲が赤変硬化しており、炉の可能性が高い。この中には径0.2m前後のピットが２基（Ｐ４・５）存在する。柱穴は床面壁際に２基（Ｐ１・２）、南側に１基（Ｐ３）が位置する。

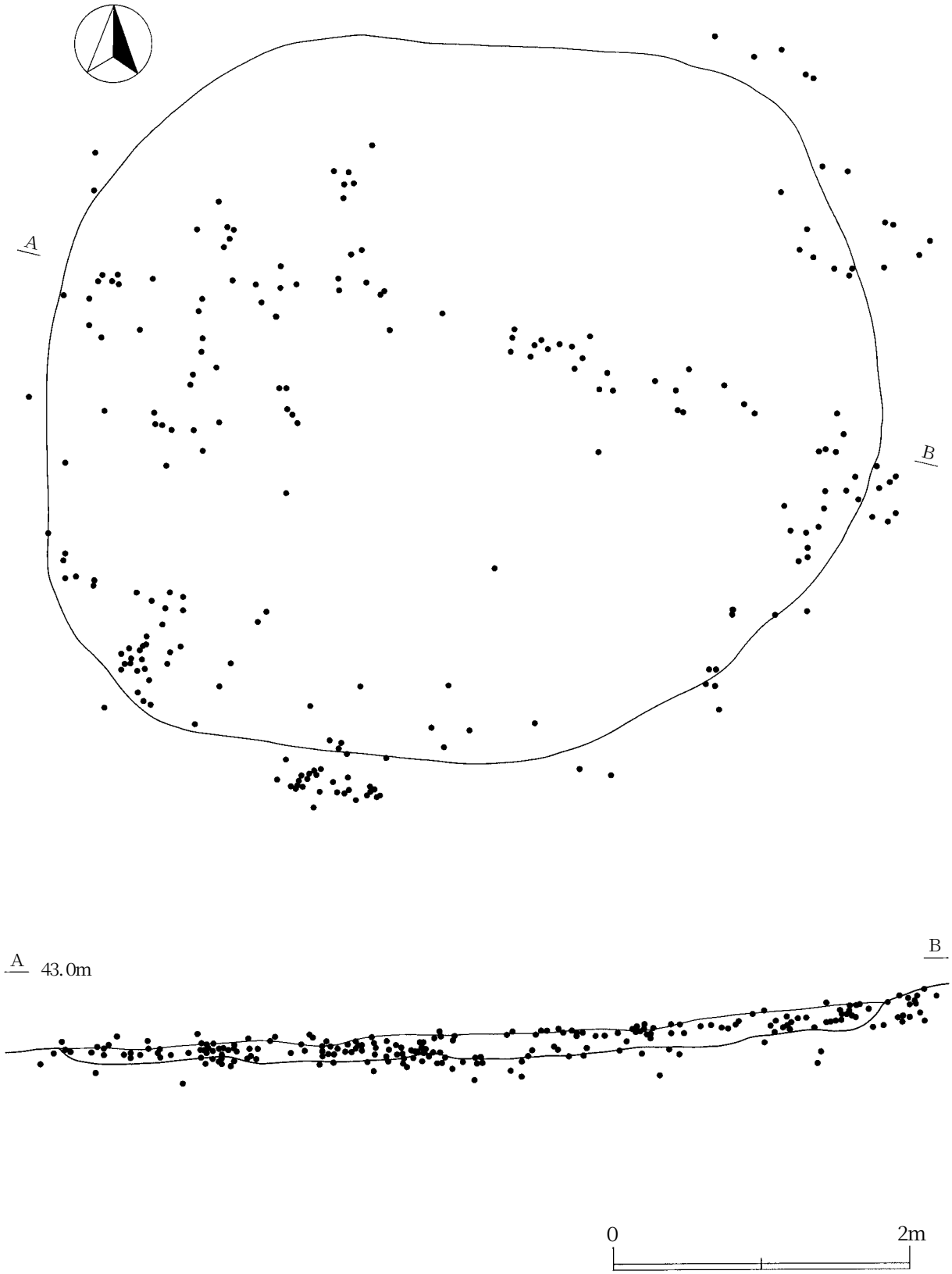
埋土は１～５層に分けた。５層は床面にある地床炉の影響でやや赤味がかった土になっている。その上位に堆積する３・４層は斜面上位からの自然堆積によるものと見られる。１・２層からは土器・石器等の遺物が多数出土しており、埋まりきらない住居跡の窪みに遺物を廃棄した可能性がある。

遺物は、床面からは少なく、埋土中位～上位にかけて多く出土している。これは、東側にある縄文時代後期の遺物密集範囲からの流れ込みによるものと思われる。

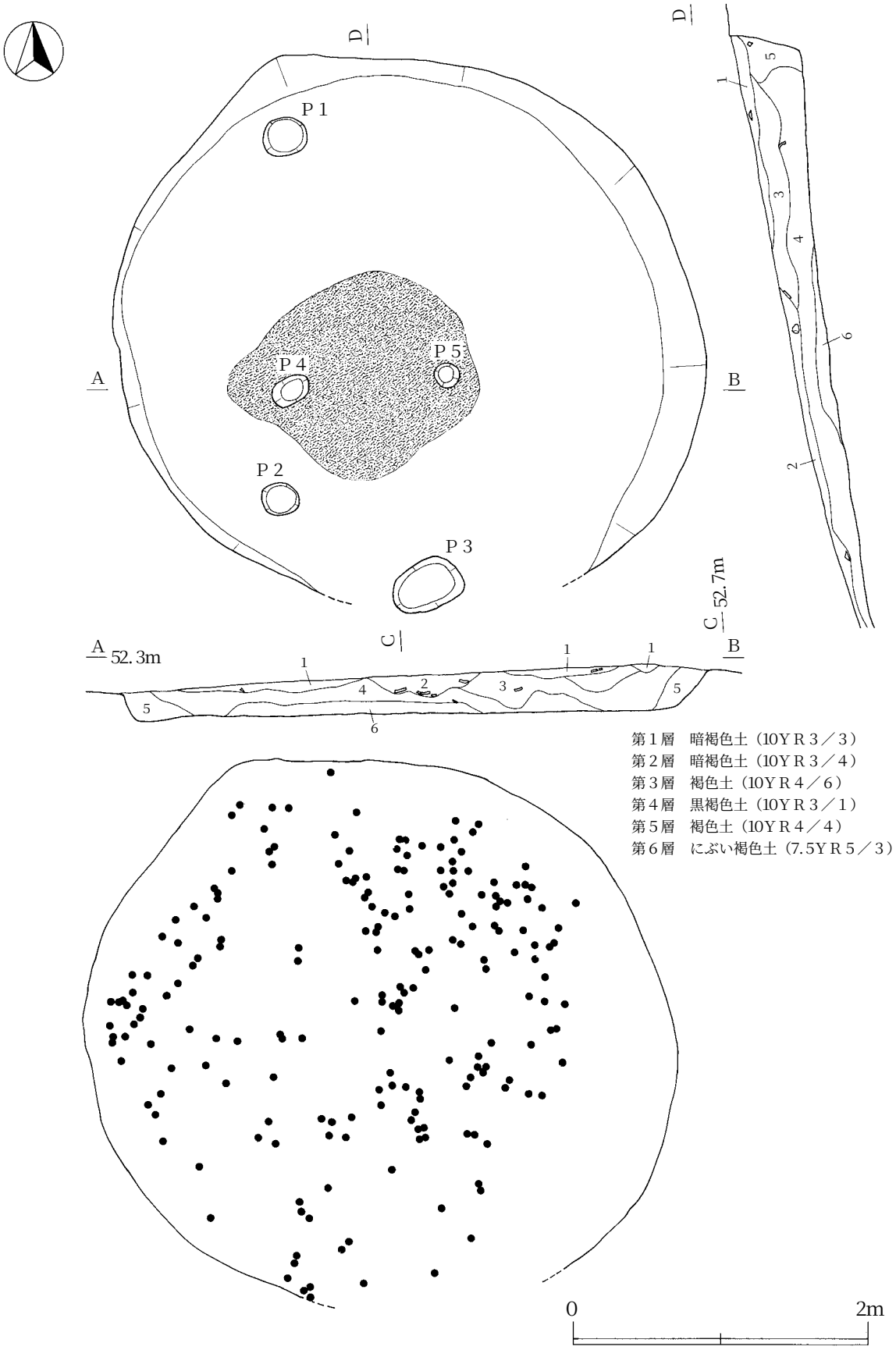
43は深鉢形土器の体部下半から口縁部である。体部下半は外傾して立ち上がり、やや内湾しながら口縁部に達する。器面には口縁部から体部上位にかけては横走縄文、体部中位以下には斜行縄文が施される。口唇部は平滑である。44～47には縄文施文後に平行沈線が施される。48～50は深鉢土器の破片である。50は口縁部が丁寧にナデ調整されている。51は、土製品で器高7.5㎝で袋状を呈する小形の製品である。口縁部に近い両側面には紐を通すための径３㎜ほどの孔が穿たれている。断面形は貝蓋状で、器面には無節縄文が全面に施されている。



第12図　ＳＩ291竪穴住居跡（１）



第13図　ＳＩ291竪穴住居跡（２）



第14図　ＳＩ436竪穴住居跡

２　フラスコ状土坑

ＳＫＦ155フラスコ状土坑（第15図）

Ｉ区中央のやや傾斜の急な斜面に位置する。確認はⅣ層上面で暗褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.2m前後の円形で、深さ1.25m、底面も直径1.3mの円形を呈する。断面形は上面から深さ0.3mほどの所で大きく括れて底面に達する。

埋土は１・２層に分けた。斜面上位からの堆積により埋没したものであり、自然堆積と判断する。壁の崩落は少ないが、南側に壁が崩落したと思われる地山ブロックが僅かに混入する。また、埋土中には微少な炭化物が認められる。

遺物は出土していない。

ＳＫＦ232フラスコ状土坑（第15図、図版８）

Ｈ区ほぼ中央部の平坦な場所に位置する。確認はⅣ層上面で土器・石器が集中して出土した付近に暗褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.8mの円形で、深さ1.4m、底面形も直径1.7mの円形を呈する。断面形は上面から深さ0.4mほどの所で一度わずかに括れて底面に達する。底面は堅くしまり、壁際に径0.2m、深さ0.15mほどのピットがある。

埋土は１～７層に分けた。４・５・７層は地山ブロックが多量に混入する土で、両側の壁が崩落したものである。深さ0.7m地点から上位は１層のみの堆積となっている。

遺物は１層中からのものが多く認められる。現状では１層が流れ込みによるものか人為的に埋め戻されたものか、どちらとも断定できないが、遺物の分布状況からは流れ込みによるものの可能性が高い。これは本遺構が埋まりきる前に遺物を含んだ土が一気に堆積したことを示す。

ＳＫＦ234フラスコ状土坑（第15図、図版９）

Ｈ区南側の平坦な場所に位置し、北側約15m地点にはＳＫＦ232が存在する。確認はⅣ層上面で褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.2mの円形で、深さ1.3m、底面も直径1.5mの円形を呈する。断面形は北側が上面から深さ0.5mほどの所で括れて底面に達する。底面は堅くしまる。

埋土は１～７層に分けた。底面に堆積する７層は混入物が少なく、埋没の初期に自然堆積したものと見られる。１～６層は地山ブロックが多く混入し、特に５層でそれが顕著である。

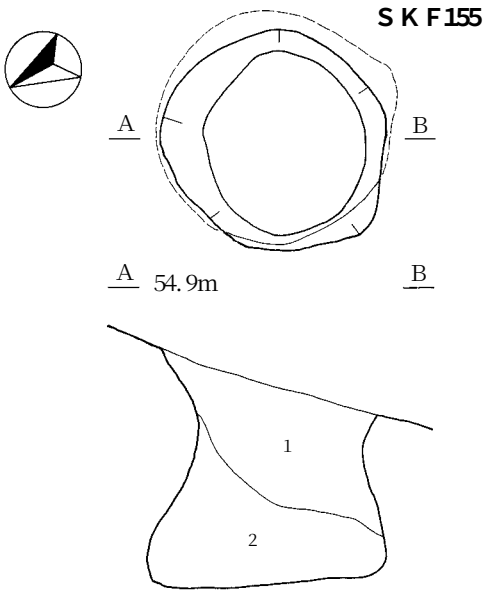
遺物は出土していない。

ＳＫＦ236フラスコ状土坑（第15図、図版10）

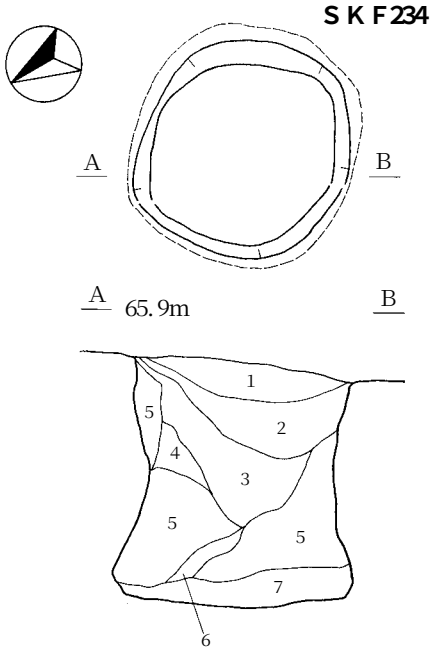
Ｅ区西側の緩斜面に位置する。確認はⅣ層上面で炭化物粒子を含む暗褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.3mの円形で、深さ0.7m、底面も直径1.8mの円形を呈する。断面形は上面から深さ0.3mほどの所で括れ袋状となっている。

埋土は１～９層に分けた。８層は壁が大きく崩落した際の土で、１～７層は８層堆積後地山ブロックを含みながら自然堆積により埋没したものである。

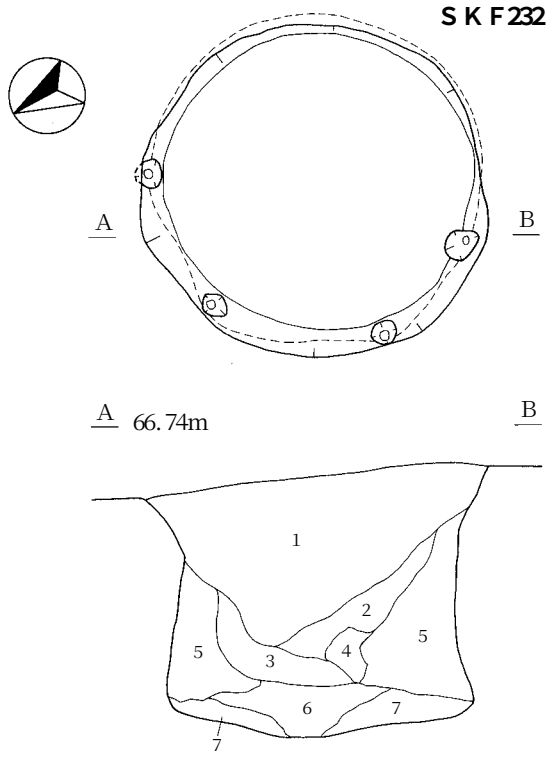
遺物は出土していない。



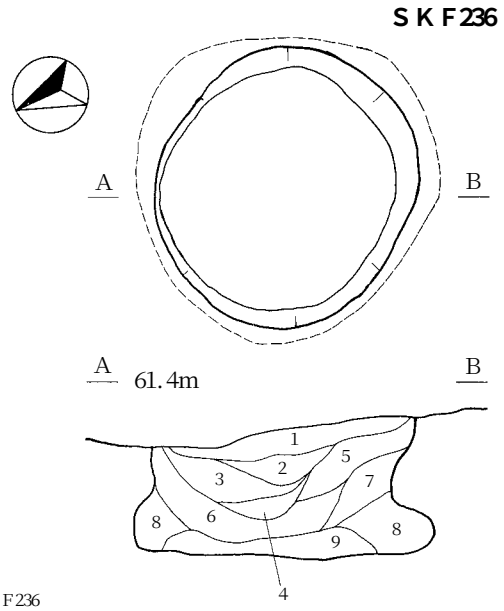
ＳＫＦ155
第１層　褐色土（10ＹＲ４／４）
第２層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）



ＳＫＦ234
第１層　褐色土（10ＹＲ４／４）　第２層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）
第３層　褐色土（10ＹＲ４／６）　第４層　褐色土（10ＹＲ４／４）
第５層　黄褐色土（10ＹＲ５／８）　第６層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）
第７層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）



ＳＫＦ232
第１層　褐色土（10ＹＲ４／４）　第２層　褐色土（10ＹＲ４／６）
第３層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）　第４層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ４／３）
第５層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ５／４）　第６層　褐色土（10ＹＲ４／６）
第７層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）



ＳＫＦ236
第１層　褐色土（10ＹＲ４／４）　第２層　褐色土（10ＹＲ４／６）
第３層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）　第４層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）
第５層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ４／３）　第６層　灰黄褐色土（10ＹＲ４／２）
第７層　黄褐色土（10ＹＲ５／６）　第８層　黄褐色土（10ＹＲ５／８）
第９層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）

第15図　ＳＫＦ155・232・234・236フラスコ状土坑

ＳＫＦ244フラスコ状土坑（第16図、図版11）

Ｅ区西側に位置する。確認はⅣ層上面で炭化物粒子を含む暗褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.4mの円形で、深さ1.1m、底面も直径0.9mの円形を呈する。断面形は上面から深さ0.2mほどの所で大きく括れ、以下はほぼ垂直に落ち込んで、底面に達する。底面は平坦である。

埋土は１～７層に分けた。３～５層が壁の崩落土であり、自然堆積により埋没したものである。

遺物は出土していない。

ＳＫＦ297フラスコ状土坑（第16図、図版12）

Ｉ区南側急斜面の落ち際で暗褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.4mの円形で、深さ1.3m、底面は長径1.5m、短径1.3mの楕円形を呈する。断面形は上面から底面までほぼ垂直に落ち込んでいる。底面はかたく締まっており、平坦である。

埋土は１～６層に分けた。３・５層は壁の崩落土であり、自然堆積により埋没したものである。

遺物は弥生時代の鉢形土器が出土している。底部から口縁部まで全面に縄文が施された後、口縁部に平行沈線が引かれるものである。

ＳＫＦ317フラスコ状土坑（第16図、図版13）

Ｉ区南側急斜面で黒褐色土が楕円形に広がる範囲として認められた。ＳＫＦ297と隣接している。上面形は長径1.6m、短径1.4mの楕円形で、深さ１m、底面は径1.1mの円形を呈する。断面形は北側が垂直に、南側が上面からやや袋状に広がり底面に達する。底面は、北から南に向かって傾斜しており、基盤の砂岩まで掘り込まれており凸凹が目立つ。

埋土は１～５層に分けた。２・４・６層は壁の崩落土であり、斜面上方にあたる北側からの自然堆積により埋没したものである。

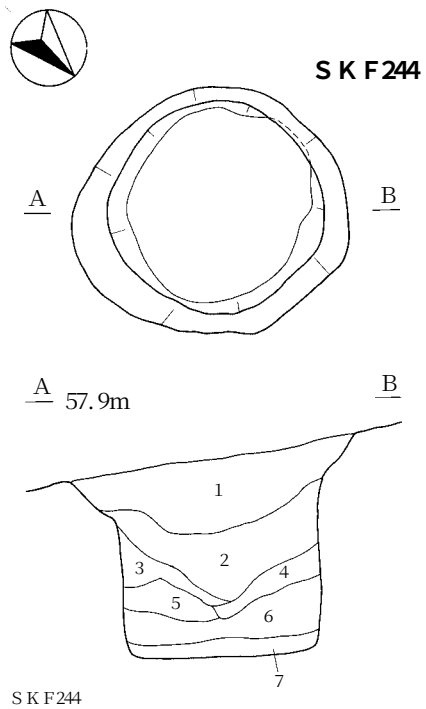
遺物は出土していない。

ＳＫＦ320フラスコ状土坑（第16図）

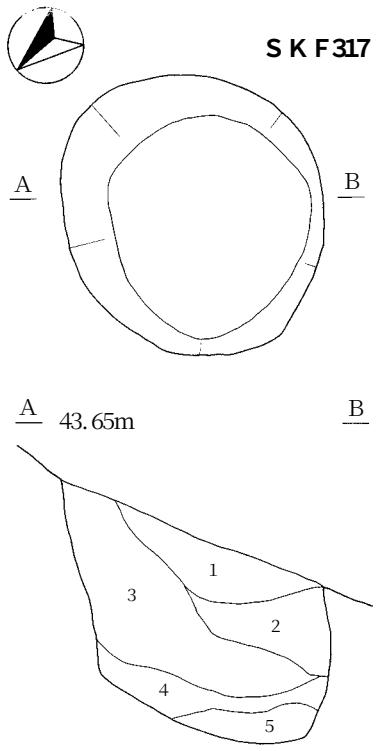
Ｉ区南側急斜面の段になった場所で、暗褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は長径1.6m、短径1.2mの楕円形で、深さ0.6m、底面も長径0.9m、短径0.7mの楕円形を呈する。断面形は、北側が大きく失われており、全体形は不明であるが、上面から底面までほぼ垂直に落ち込んでいると推定される。底面は北から南に向かって傾斜しており、ＳＫＦ317同様に砂岩が露出することにより凸凹している。底面南側は緩い段がついているが、機能については不明で、遺構の立地条件からくる自然作用によるものの可能性が考えられる。

埋土は１～５層に分けた。１～４層は南側からの堆積を示す土層で、壁の流出に伴い流れ込んだと見られる。

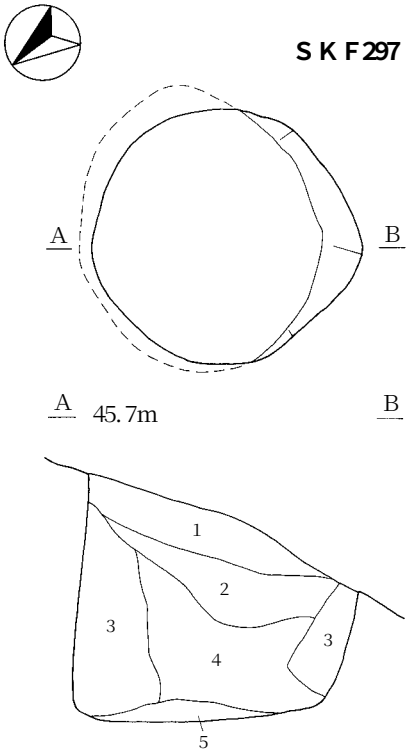
遺物は出土していない。



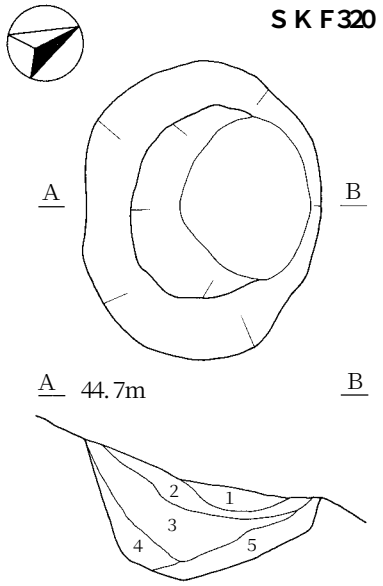
ＳＫＦ244
第１層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）　第２層　褐色土（10ＹＲ４／４）
第３層　にぶい褐色土（7.5ＹＲ５／３）　第４層　褐色土（10ＹＲ４／４）
第５層　褐色土（10ＹＲ４／６）　第６層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）
第７層　黒褐色土（10ＹＲ３／２）



ＳＫＦ317
第１層　褐色土（10ＹＲ４／４）　第２層　黄褐色土（10ＹＲ５／６）
第３層　にぶい黄褐色土（10ＹＲ５／４）　第４層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）
第５層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）



ＳＫＦ297
第１層　褐色土（10ＹＲ４／４）　第２層　褐色土（10ＹＲ４／６）
第３層　黄褐色土（10ＹＲ５／６）　第４層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）
第５層　黒褐色土（10ＹＲ３／２）



ＳＫＦ320
第１層　褐色土（10ＹＲ４／４）　第２層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）
第３層　にぶい褐色土（7.5ＹＲ５／４）　第４層　褐色土（10ＹＲ４／６）
第５層　暗褐色土（10ＹＲ３／４）

第16図　ＳＫＦ244・297・317・320フラスコ状土坑

３　陥し穴状土坑

ＳＫＴ239陥し穴状土坑（第17図、図版14）

Ｉ区北東側に位置し、北東から南西に向かって傾斜する緩斜面で黒褐色土が溝状にのびる範囲として認められ、等高線にほぼ平行している。平面形は開口部、底面ともに北西－南東に細長い楕円形で、長軸方向はＮ－44°－Ｗである。上面形は長径2.8m、短径0.7m、深さ1.1m、底面は長径3.2m、短径0.2mである。長軸方向の断面形は上面より底面が外に張り出す台形状で、短軸方向の断面形はＵ字形を示す。

埋土は１～４層に分けた。１層は遺構の大半が埋没した後周囲から表土が流入したものと見られる。２層以下は地山ブロックが混入しており、壁の崩壊土を主体とするものと考えられる。

遺物は出土していない。

ＳＫＴ251陥し穴状土坑（第17図、図版15）

Ｉ区北東側、ＳＫＴ239の北側約15m地点に平行して位置する。平面形は開口部、底面ともに北西－南東に細長い楕円形で、長軸方向はＮ－52°－Ｗである。上面形は長径3.9m、短径0.7m、深さ1.3m、底面は長径3.6m、短径0.1mである。長軸方向の断面形は上面の方が若干底面よりも幅広くなっており、逆台形状で、短軸方向の断面形はＶ字形を示す。

埋土は１～11層に分けた。１～４層は遺構が半分ほど埋没した後に表土が流れ込んだものと考えられ、５層以下は遺構壁面の崩壊土と推定される。

遺物は出土していない。

ＳＫＴ288陥し穴状土坑（第17図、図版16）

Ｉ区中央やや東寄り、東から西に向かって傾斜する緩斜面で暗褐色土が溝状にのびる範囲として認められた。上記２基のＳＫＴの北西側のやや離れた地点に位置する。平面形は開口部、底面ともに東西に細長い楕円形で、長軸方向はＮ－90°－Ｗである。上面形は長径３m、短径0.7m、深さ1.1m、底面は長径３m、短径0.1mである。長軸方向の断面形は上面より深さ0.4mの所で括れ、底面で袋状に広がり、断面形はＵ字形を示す。

埋土は１～３層に分けた。地山土は３層に若干見られるが、１層は遺構が埋没した後、周辺の表土が流れ込んだものである。

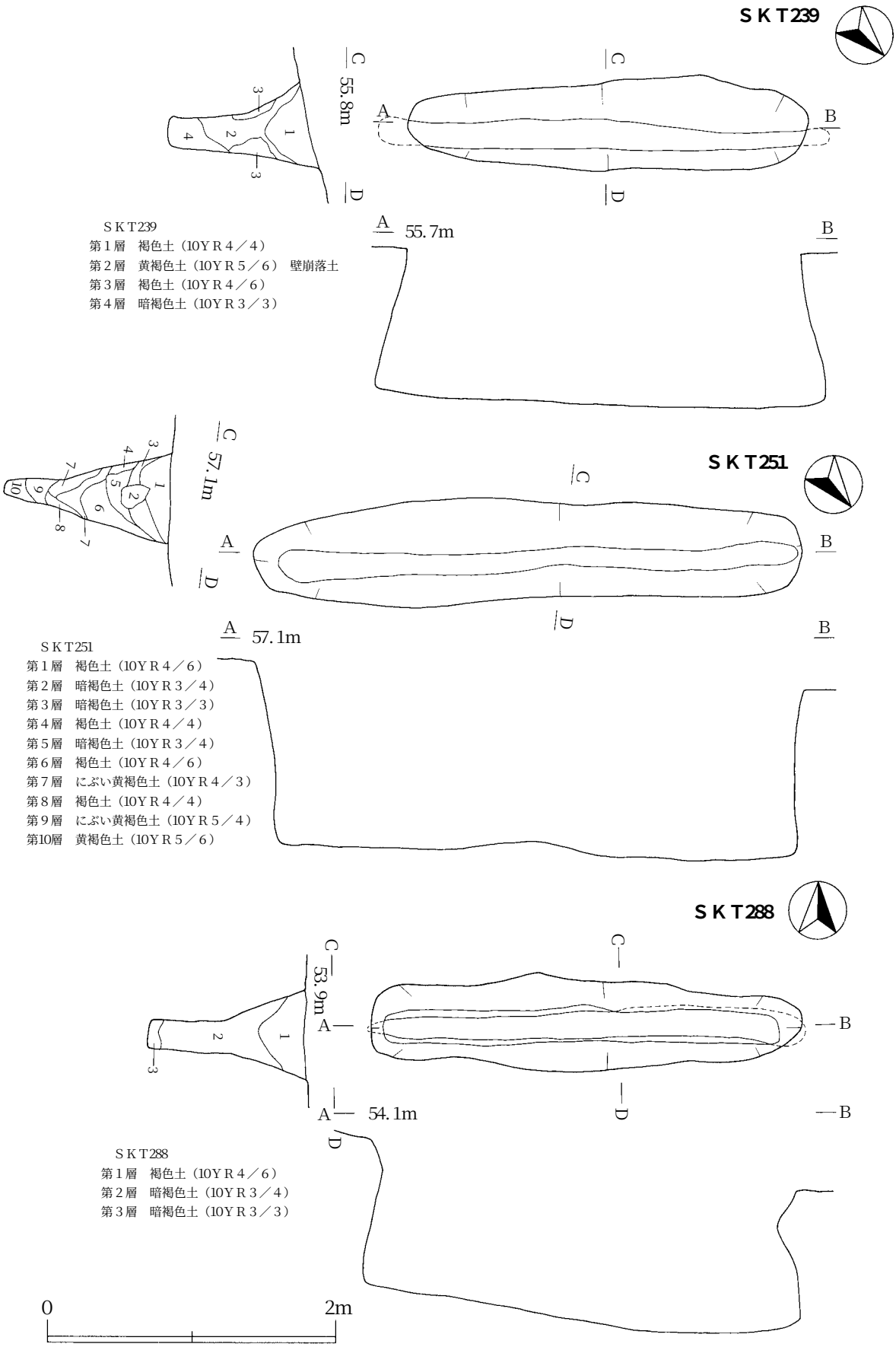
遺物は出土していない。

４　土坑

ＳＫ06土坑（第18図、図版17）

Ｂ区中央やや西寄りに位置し、暗褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.3mの円形で、深さ0.2m、底面形も直径0.8mの円形を呈する。底面は平坦で、東から西に向かって傾斜している。

埋土は１～３層に分けた。いずれもレンズ状に堆積しており、自然堆積により埋没したものと考えられる。



第17図　ＳＫＴ239・251・288陥し穴状土坑

ＳＫ08土坑（第18図）

Ａ区南東側の緩斜面に位置し、暗褐色土が不整形に広がる範囲として認められた。上面形は長径2.7m、短径2.4mの不整楕円形で、深さ0.6m、底面は長径0.9m、短径0.6mの楕円形を呈する。底面は大きく歪んでおり、北から南に向かって傾斜している。

埋土は１～７層に分けた。レンズ状に堆積しており、北東側からの自然堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は出土していない。

ＳＫ13土坑（第18図、図版18）

Ａ区東側の緩斜面に位置し、褐色土が略円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.5mの円形で、深さ0.2m、底面は直径1.1mの不整な円形を呈する。底面は平坦で、北から南に向かって傾斜している。

埋土は１～３層に分けた。北側斜面上位からの自然堆積により埋没したものと見られる。

遺物は出土していない。

ＳＫ14土坑（第18図）

Ｂ区中央に位置し、確認調査時のトレンチ内で黒褐色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.3mの円形で、深さ0.2m、底面も直径1.1mの円形を呈する。底面は平坦である。

埋土は１～４層に分けた。自然堆積による埋没と考えられる。

遺物は出土していない。

ＳＫ43土坑（第18図、図版19）

Ｂ区南側の緩斜面に位置し、地山土と暗褐色土が混じり合って方形に広がる範囲として認められた。上面形は長径1.3m、短径0.9mの隅丸方形で、深さ0.3m、底面は直径0.4mの円形を呈する。底面は鍋底状で、東から西に向かって傾斜している。

埋土は１層である。焼土・炭化物が全体的に混入しており、人為的な堆積である可能性が強い。東側にある２軒の竪穴住居跡からの流れ込みが考えられるが、住居に伴うものかどうかは断定できない。

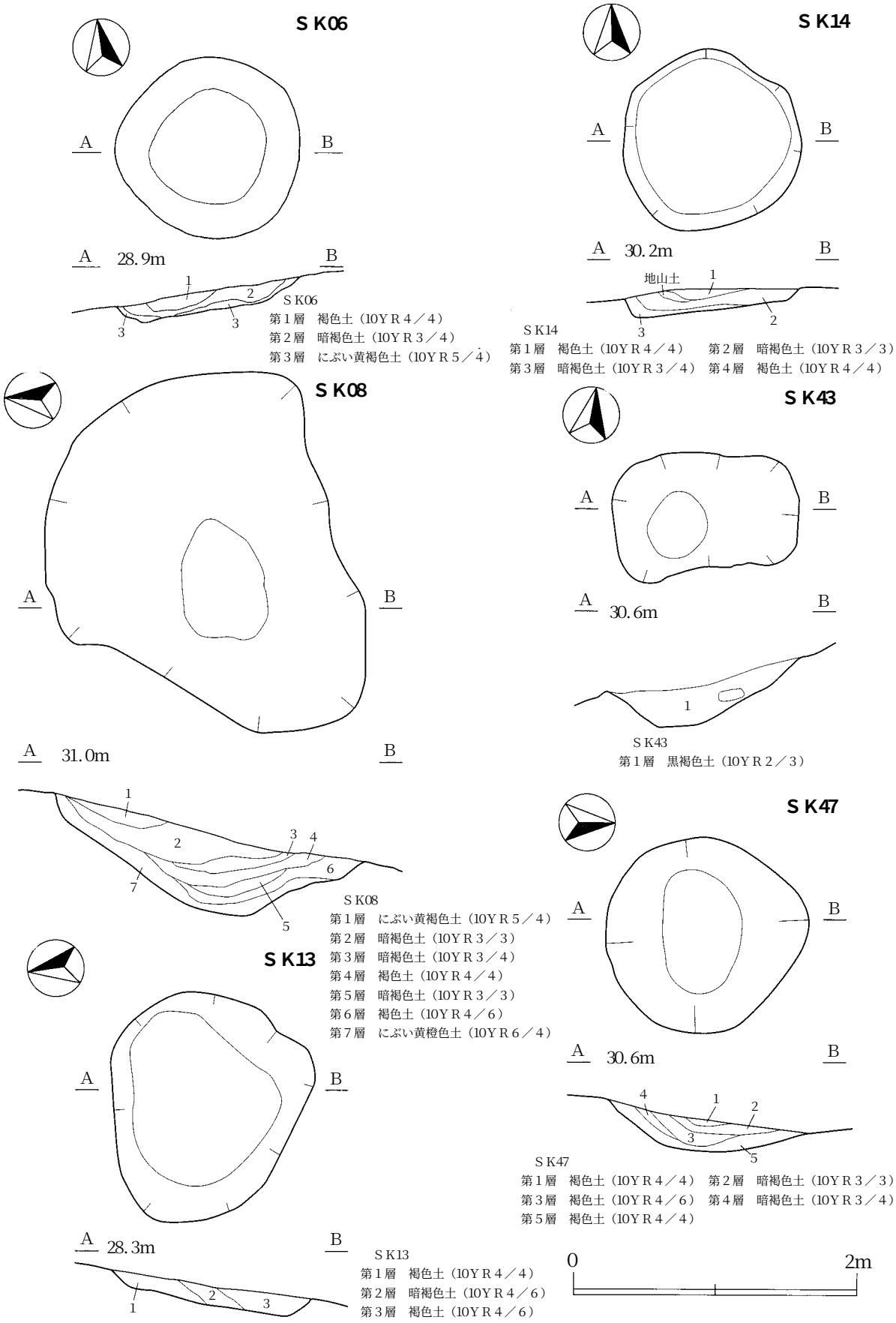
遺物は埋土中から、石鏃１点、石匙１点、他に摩滅した縄文土器片が出土している。

ＳＫ47土坑（第18図）

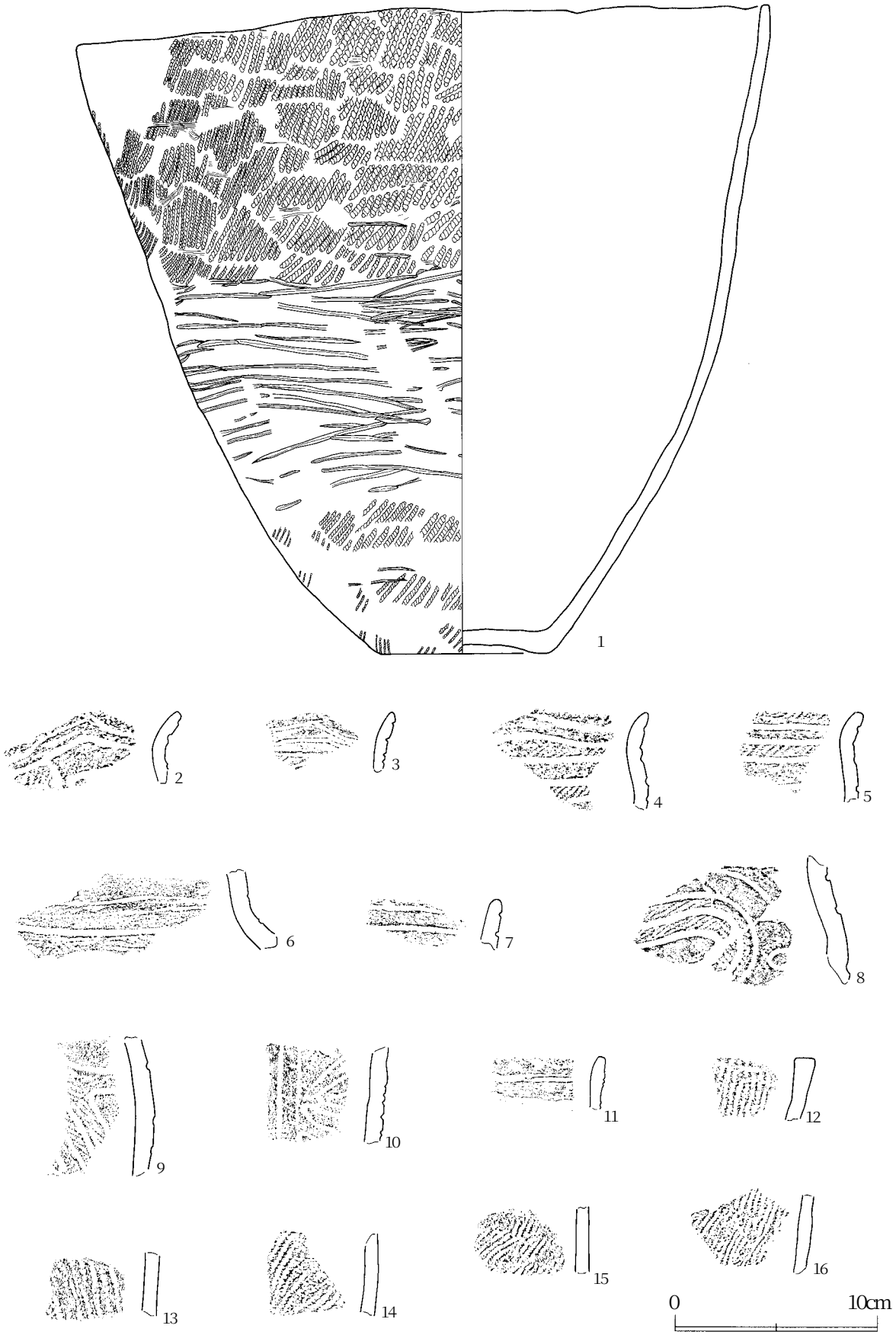
Ｂ区北側の緩斜面に位置し、黒色土が円形に広がる範囲として認められた。上面形は直径1.4mの円形で、深さ0.2m、底面は長径0.9m、短径0.6mの楕円形を呈する。底面はすり鉢状で、南から北に僅かに傾斜している。

埋土は１～５層に分けた。南から自然堆積により埋没したと見られる。

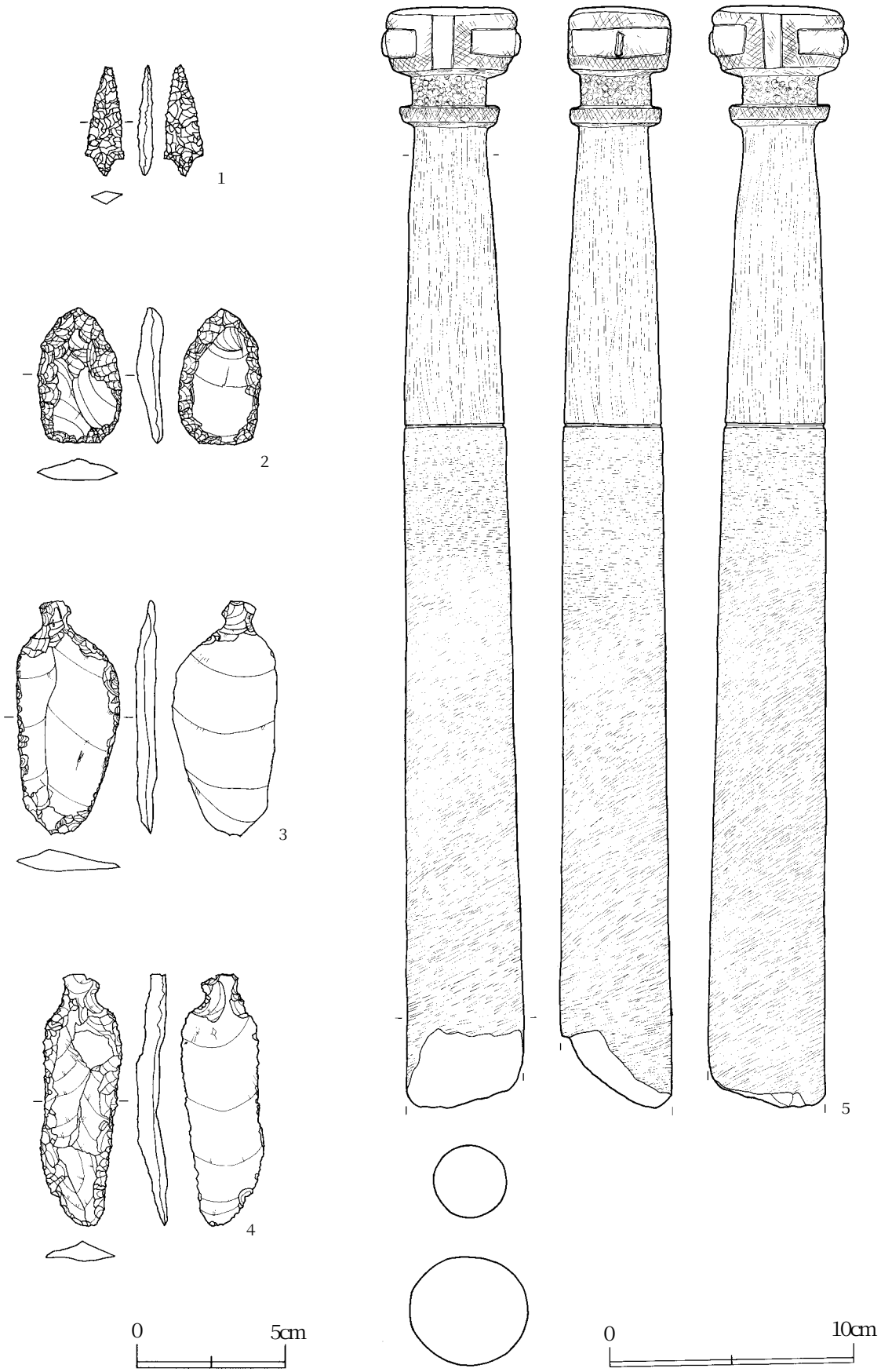
遺物は出土していない。



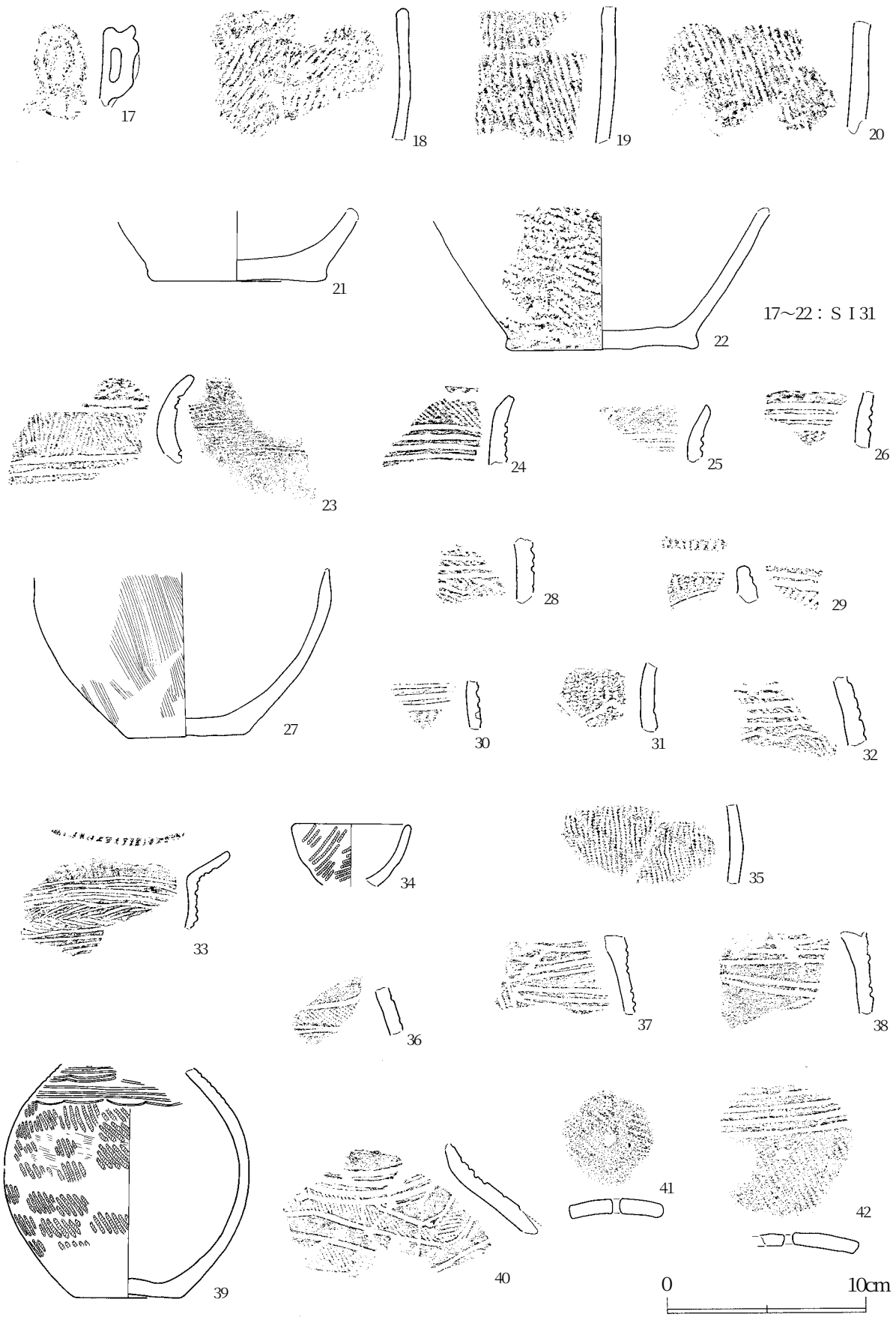
第18図　ＳＫ06・08・13・14・43・47土坑



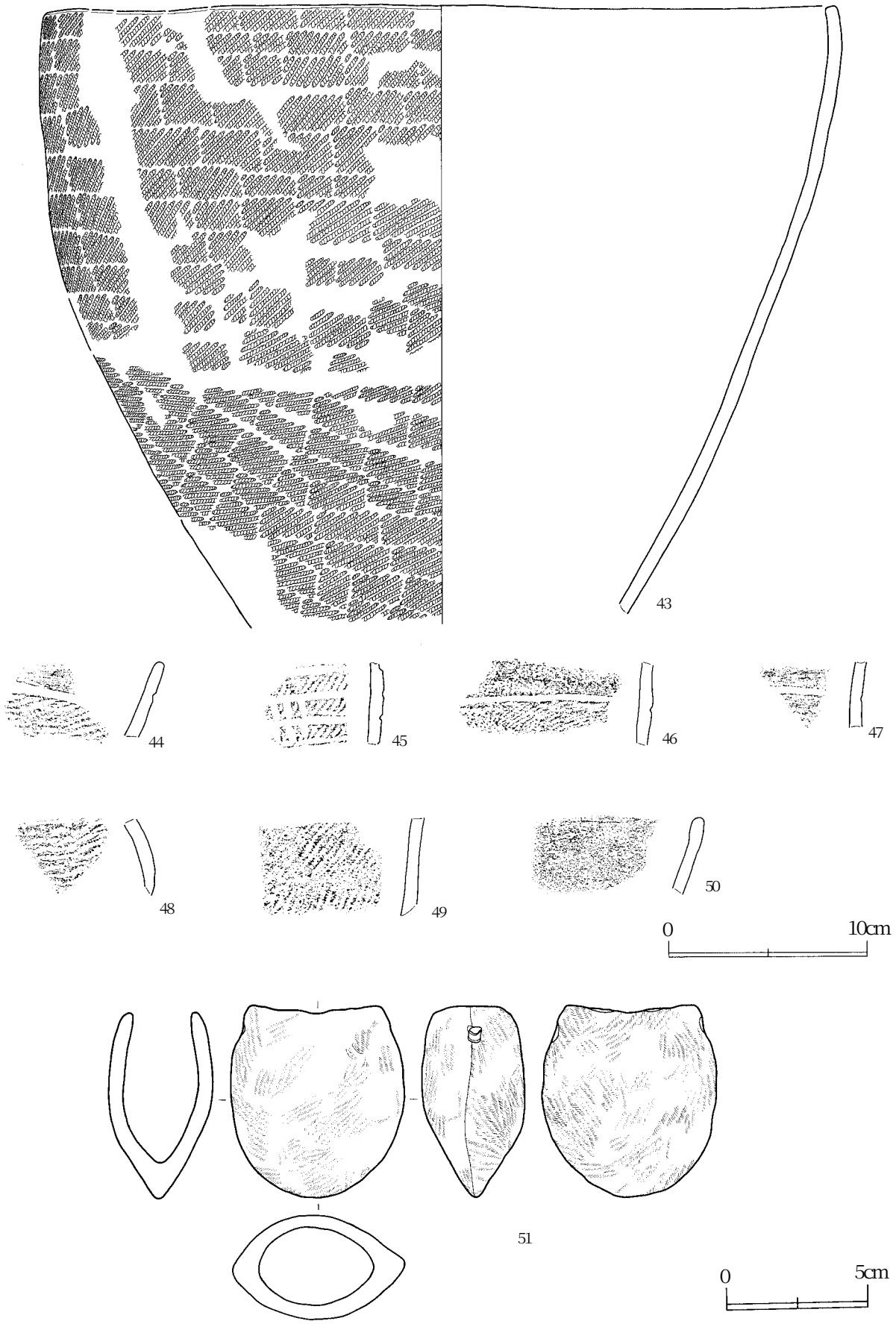
第19図　遺構内（ＳＩ29）出土遺物（１）



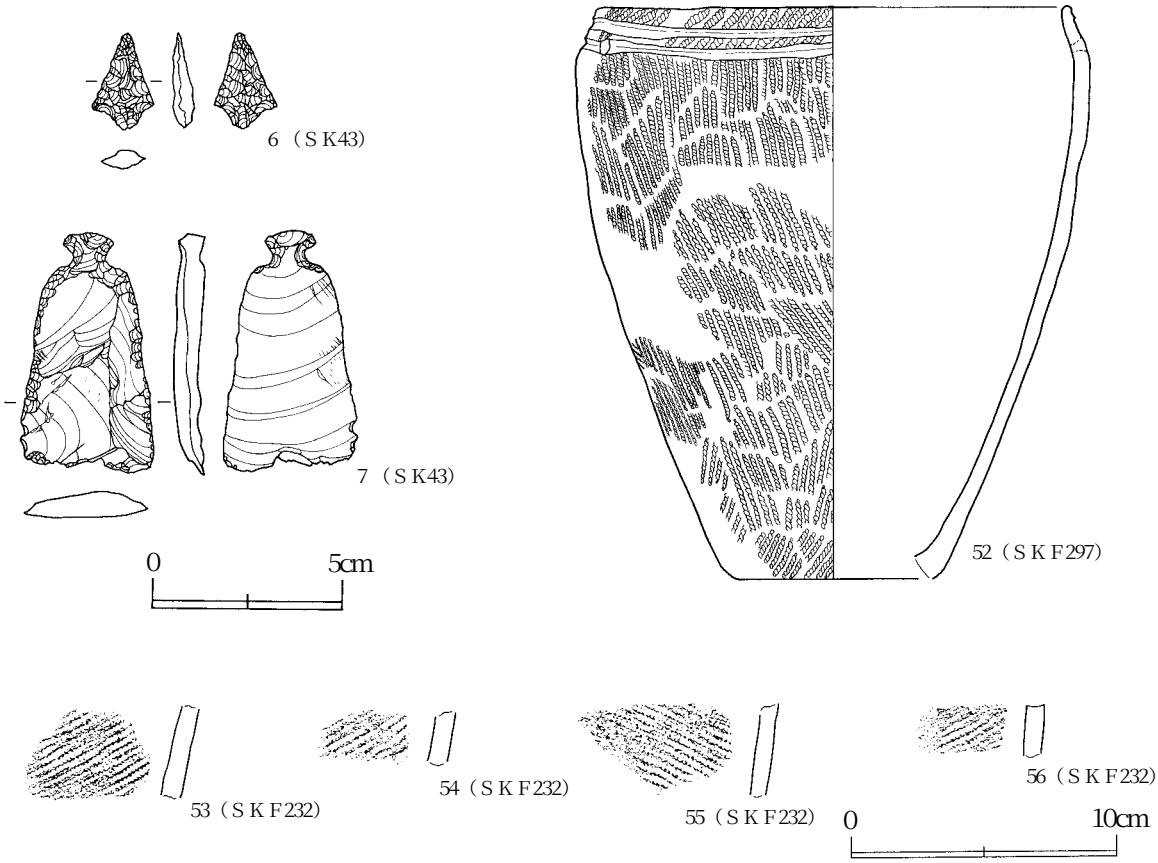
第20図　遺構内（ＳＩ29）出土遺物（２）



第21図　遺構内（ＳＩ31・291）出土遺物（４）



第22図　遺構内（ＳＩ436）出土遺物（４）



第23図　遺構内（土坑）出土遺物（５）

第２節　遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物には、旧石器時代の石器、縄文時代、弥生時代の土器・石器、縄文時代の土製品・石製品がある。これら遺物のうち、旧石器時代の石器はＨ区の中央部、縄文時代の遺物は各区から出土しているが、特にＡ・Ｂ・Ｋ・Ｈ・Ｊ区にはまとまりがある。弥生時代の遺物は同時代の住居跡（ＳＩ291）があるＩ区から出土している。遺物の数量は、旧石器時代の石器10点、縄文・弥生時代の土器が15,000点、石器は20,000点以上に及び、旧石器時代の石器を除く縄文・弥生時代の遺物の出土層位は基本層のＩ・Ⅱ層である。

１．旧石器（第25～27図）

旧石器は、Ｅ区の中央部の現地表面標高67mほどの平坦面からまとまって出土しており、出土層位は基本層のⅣ層である。ナイフ形石器８点と石刃２点があり、剥片や砕片は検出されなかった。

（１）ナイフ形石器（１～８）

１は柳葉形で、両極打面の石核から剥取された縦長剥片の左側縁の全体と右側縁の基部に歯潰しの二次調整が行われるほか、先端部の中央部にも細かな剥離痕がある。刃部は、右側縁の上半でやや湾曲しており、使用痕が認められる。２～８は素材剥片の大きさを変えることなく、基部に二次調整を施し、幅広い刃部を有している。基部の調整は、４・６・７では両側縁の中央付近まで及ぶが、他はわずかな調整を行うだけである。

（２）石刃（９・10）

２点とも同一石核によるものである。打面を広く残し、先端部の側縁に使用痕が認められる。

10点の旧石器は、１・２・４～６・８・９が半径15mほどの範囲から出土しているが、３・10はこれらまとまりから40mほど東側で検出されており、垂直分布は50㎝の間にまとまる。剥片や砕片が全く出土していないことから、遺跡内に搬入されたものと判断される。

２．土器

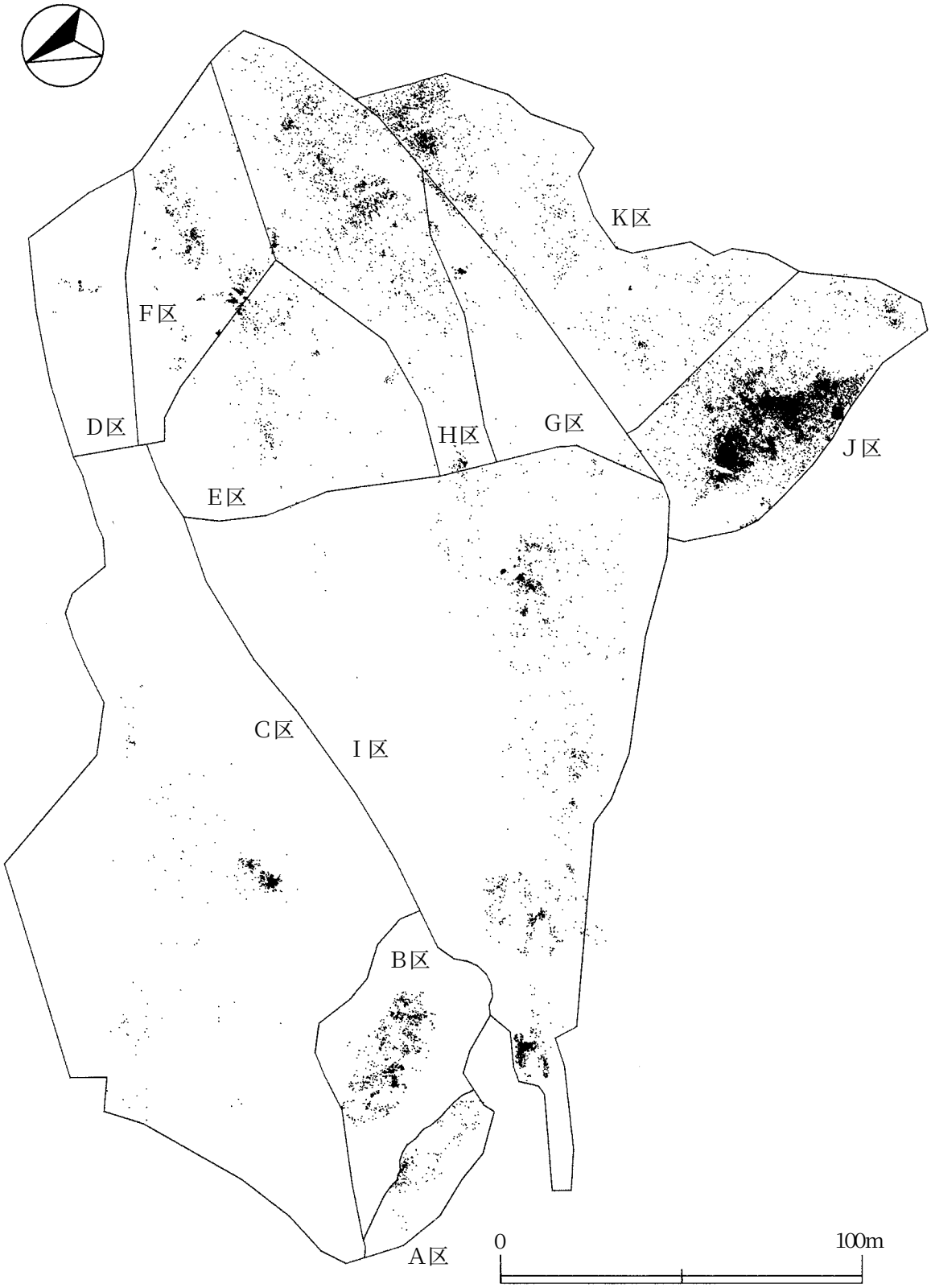
土器には縄文時代後期と弥生時代のものがある。ここでは縄文時代後期の土器をＩ群、弥生時代の土器をⅡ群とし、文様と器種からさらに細分した。

（１）縄文時代の土器（第28～31図）

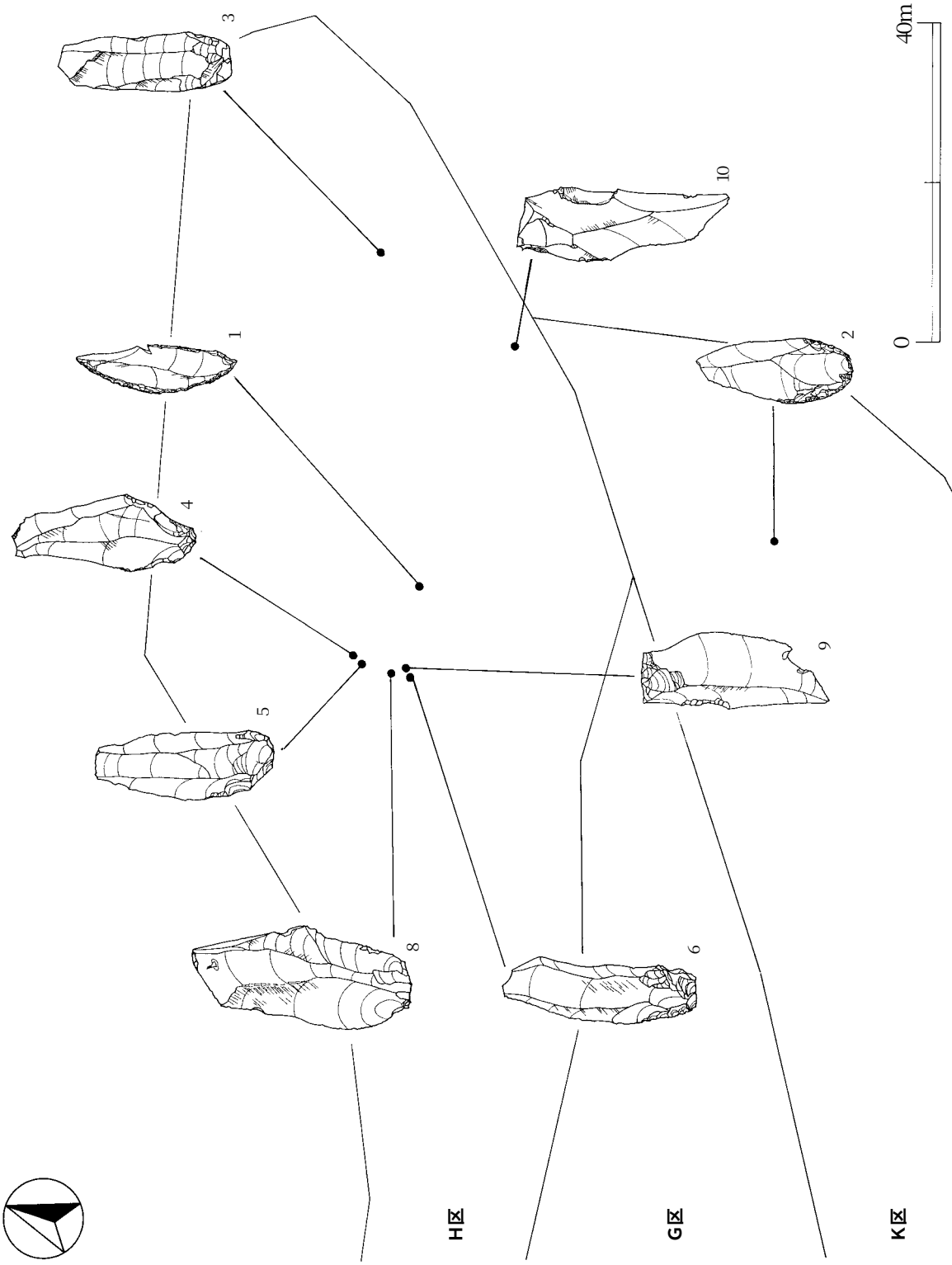
縄文時代の土器は後期前葉～後葉のもので、深鉢形土器あるいは鉢形土器が圧倒的多く、壺形土器、注口土器は少ない。

１類（１～15・21～23・30～55）：後期前葉の土器で、無文地に沈線文を描く土器や、平行あるいは曲線的な縄文帯が描かれるものである。

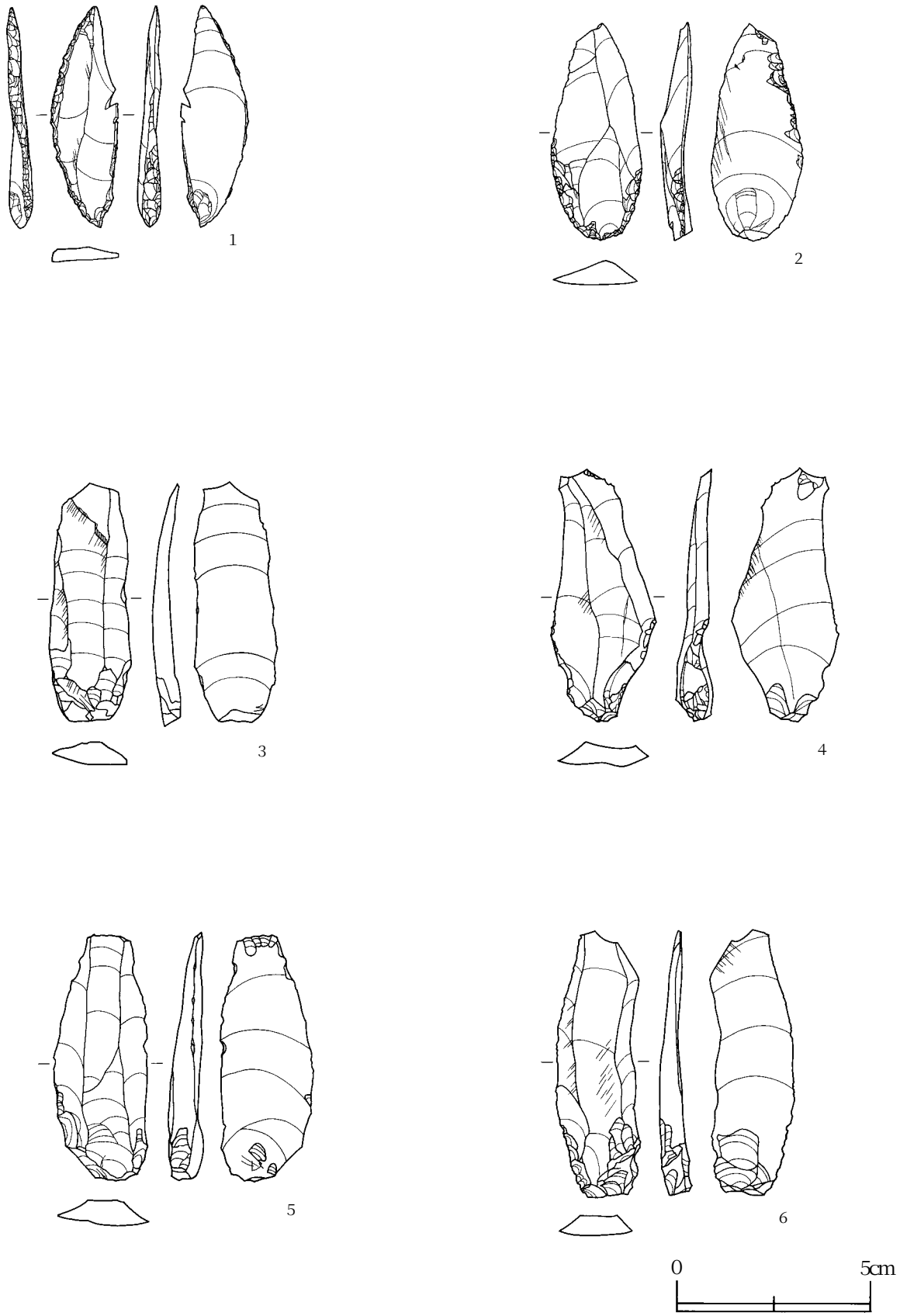
ａ類（１・６・46～51）：無文地に沈線で文様が施される土器である。１は大きく外反する口縁部から膨らみのある体部上半にいたる深鉢形土器で、横位の２条の平行沈線から３条の沈線が垂下する。７では平行沈線で区画された中に細長い楕円形の文様が描かれる。46～49の深鉢形土器の体部には、無文地に平行沈線で同心円文や渦巻き文が施されるが、47では直線的な平行沈線と同心円文が組み合わされる。50は無文地に櫛歯状の工具による多条の沈線が曲線的に描かれる。



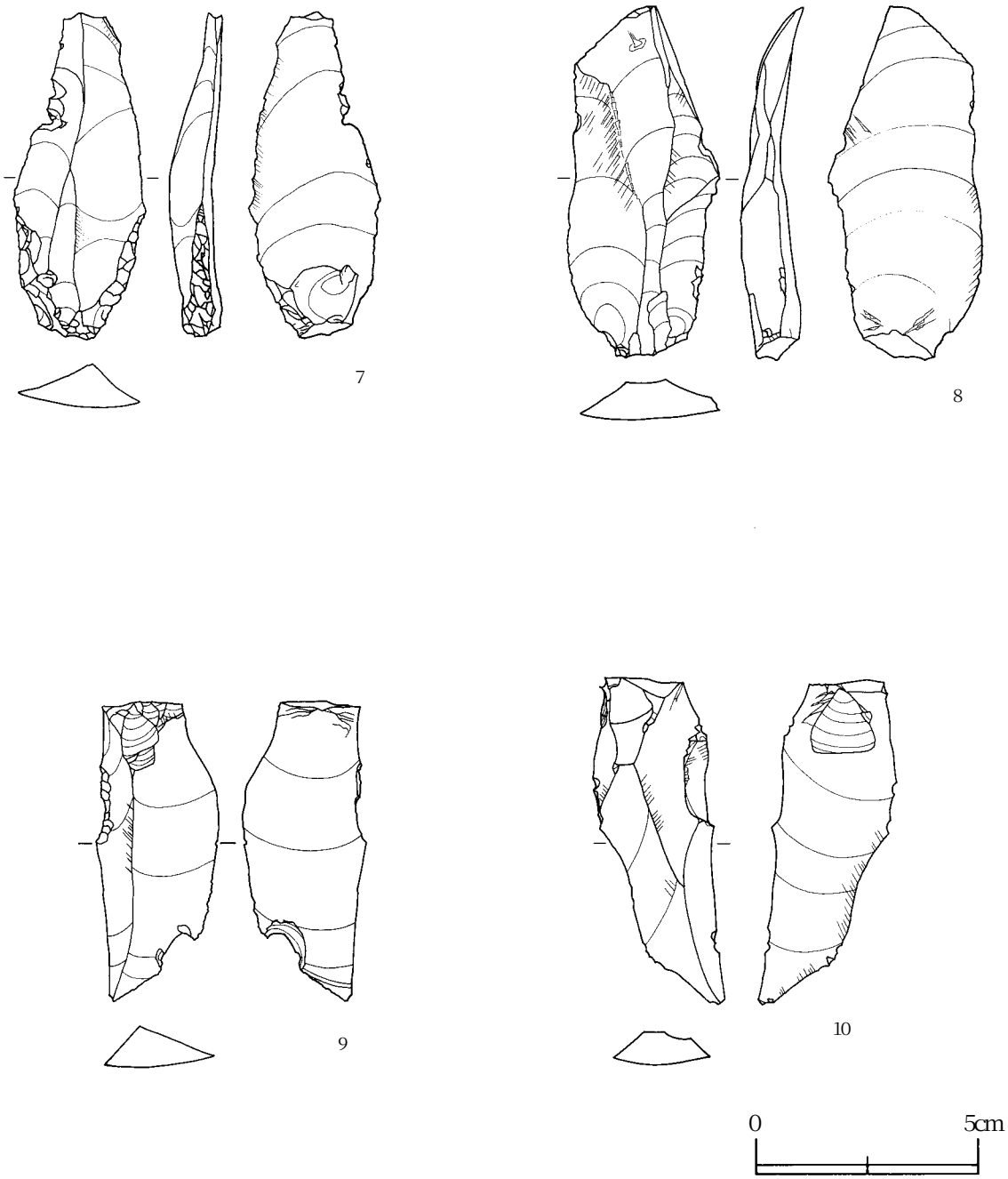
第24図　遺物出土分布図



第25図　旧石器出土分布図



第26図　遺構外出土遺物（１）



旧石器計測表

番号	取上番号	器　種	石質	長さ(㎜)	幅(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(g)
1	H－1226	ナイフ形石器	頁岩	57	17	6	3.9
2	H－1586	ナイフ形石器	頁岩	56	24	8	6.7
3	H－575	ナイフ形石器	頁岩	62	22	8	9.4
4	H－1015	ナイフ形石器	頁岩	65	28	10	9.9
5	H－883	ナイフ形石器	頁岩	64	24	10	12.5
6	H－1290	ナイフ形石器	頁岩	69	22	8	9.5
7	表採	ナイフ形石器	頁岩	74	30	12	18.6
8	H－1054	ナイフ形石器	頁岩	80	35	15	26.0
9	H－1072	石刃	頁岩	68	28	13	15.6
10	H－522	石刃	頁岩	74	30	12	15.6

第27図　遺構外出土遺物（２）

ｂ類（２～５・８～14・29～45）：沈線で囲まれた縄文帯で文様が描かれる土器である。深鉢形土器の口縁部上半には口縁に平行する縄文帯があり（４～14）、30～45の体部には曲線的な縄文帯が施されるが、30～33では「Ｘ」字状の縄文帯が、34～46では渦巻き状や楕円形の文様が縄文帯で表現される。縄文帯により区画される無文部は広く残され、34では無文部が沈線で矩形に画される。

２類（55～59）：後期中葉の土器で、深鉢形土器の口縁は波状を呈し、大きく外反する。55の体部上半には２～３条の平行する縄文帯を「Ｓ」字状の沈線で繋いでいる。57・58は深鉢形土器の体部で、矢羽状の沈線が施される。59は大形の壺形土器か注口土器の体部中央部と考えられる。

３類（60～64）：後期後葉の土器である。61は器面が磨かれた注口土器で、無文地に入り組み状の沈線で文様を描いていて、沈線内は他の面よりも肉厚的である。61･62の深鉢形土器の口唇には「Ｂ」字状の突起が付き、口縁上半には平行する縄文帯が施される。63には沈線による入り組み文が描かれ、64は口唇に小突起のある無文の壺形土器である。

３類（65～94）：粗製深鉢形土器の破片と底部破片である。口縁部が直立ないしはわずかに外反し、口唇が丁寧な面取りで平坦なものが多く、75・82のように口唇が薄くなり丸みのあるものは少ない。縄文はＬＲ縄文が多いが、ＲＬ縄文もあり、他に79・91では横位の条線が施される。92・93の底部外面にはスダレ状の圧痕が残っている。94は体部下半に最大径のある小形の壺形土器で、器面には凹凸があり、輪積みの痕跡が明瞭で外傾接合されている。

（２）縄文時代の土製品（第31図）

96は土器片を楕円形に整えたペンダントと考えられる。「Ｙ」字形の沈線文を意識したもので、上端は欠損しているが、孔があいている。

（３）弥生時代の土器（第31・32図）

弥生時代の土器には、甕・鉢形土器・壺形土器・蓋形土器などがあるが、甕の破片が圧倒的に多い。

１類（96～103）：変形工字文や刺突文の施される土器である。95・97は高杯形土器の体部破片で太い沈線で工字文が施されている。98は鉢形土器で「く」の字形に屈曲する口縁に平行沈線が引かれ、体部との境では収束する沈線上にコブ状の突起が貼付される。100・101は鉢形土器で、刻み列や円形の刺突列を沈線で画しており、102・103には粘土紐による隆帯が楕円形に付され、隆帯で囲まれた部分に円形の刺突を施している。

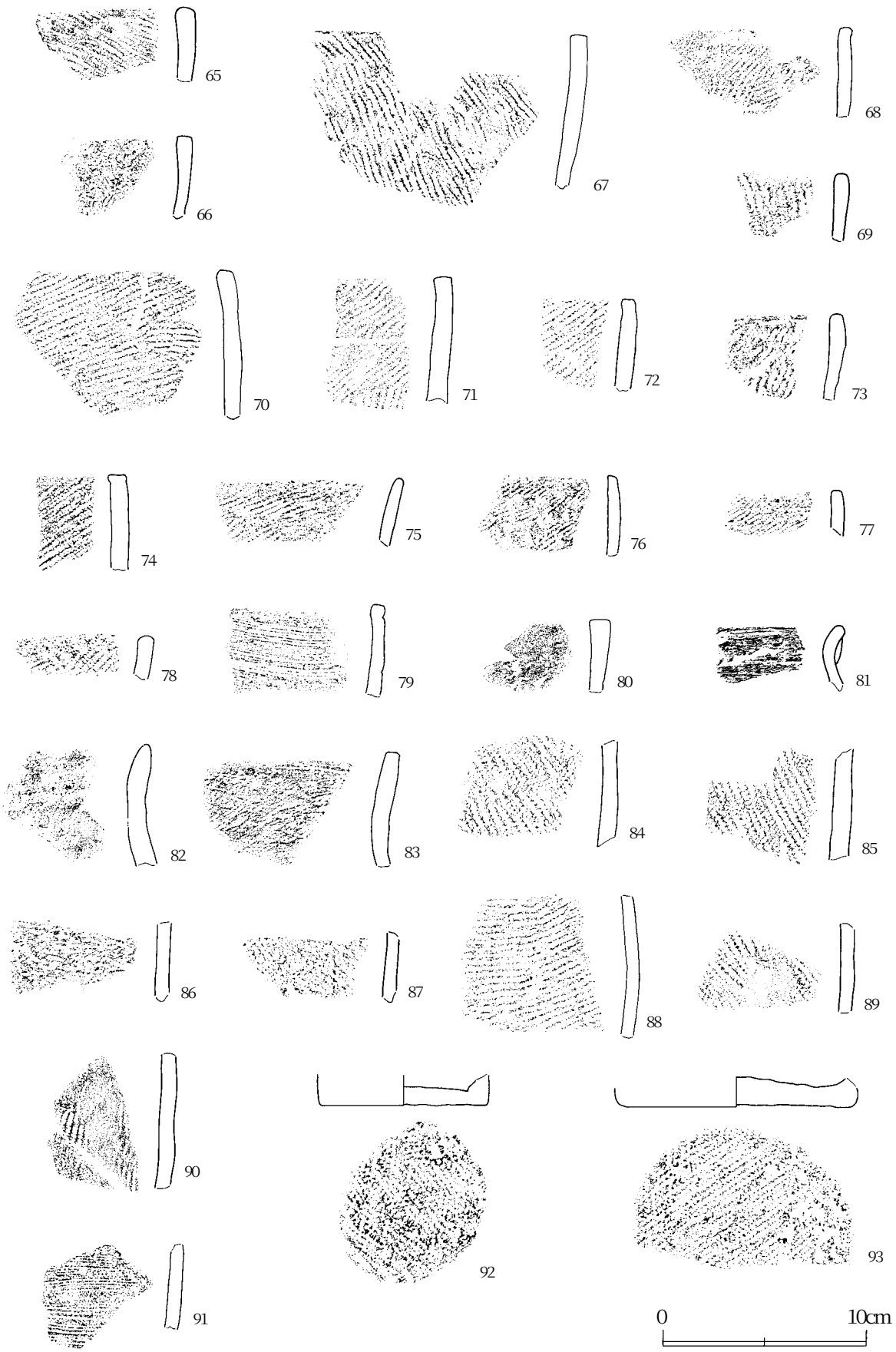
２類（104）：104は無文の壺形土器である。外面は丁寧なミガキが行われ、体部上半に数条の平行沈線が引かれ、その下に刺突列が一条器面を巡る。

３類（105～140・144）：口縁部に縄文や刷毛目を、体部上半に鋸歯文を施す土器である。116・117の壺形土器を除けば、他は甕と鉢形土器である。甕は外反する口縁部から膨らみのある体部上半に至る器形が多いが、115では口縁部から口唇が直角に外に突出し、122も口縁上半が大きく外反する。口縁部上端の縄文帯と下半の沈線で囲まれる口縁の屈曲部に、105では刷毛目が施され、106では無文となる。111～114の口縁部文様帯は、上半に縄文帯が巡り、その下に平行沈線が引かれるが、115・119～121では横位の平行沈線に斜行する沈線が施される。体部上半の鋸歯文は一条ないしはニ条で、地文の縄文上に直接描かれる。縄文はＬＲ縄文が多く用いられる。145の蓋形土器には、刷毛目→ＬＲ縄文の後に横位沈線が引かれる。

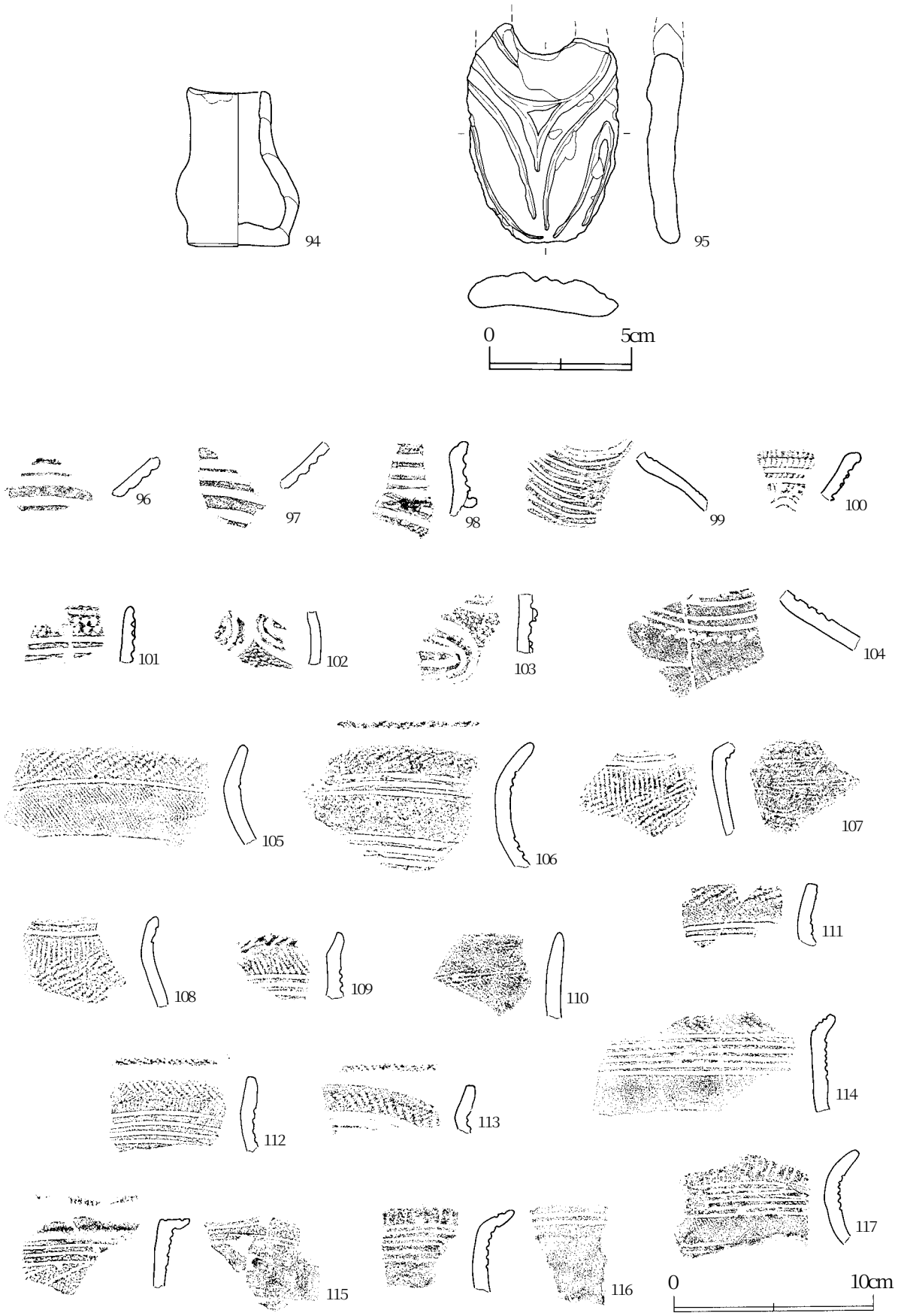
４類（141～143）：体部に斜行する沈線で、無文部と縄文部を区画する土器である。ＬＲ縄文原体

第28図　遺構外出土遺物（３）

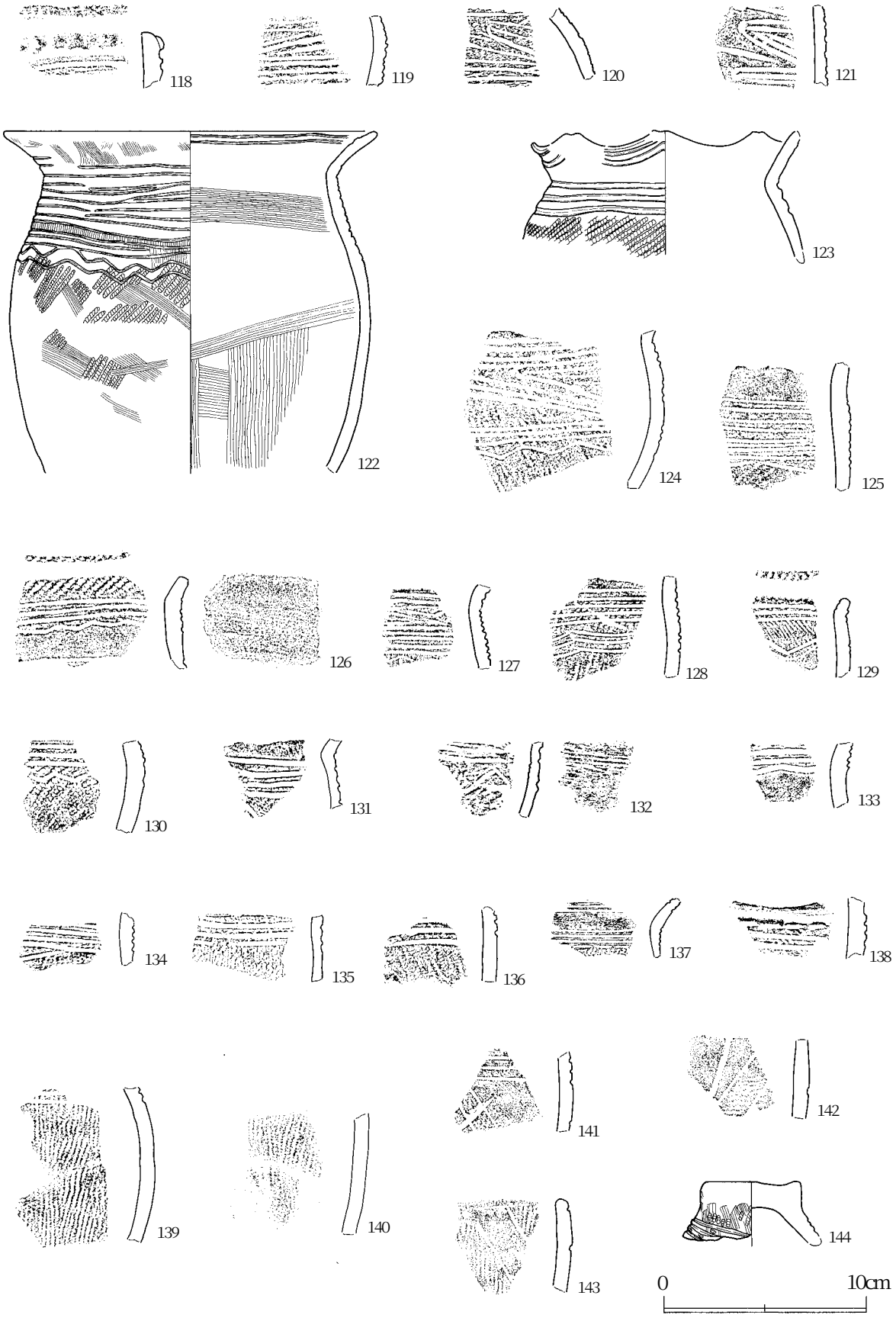
第29図　遺構外出土遺物（４）



第30図　遺構外出土遺物（５）



第31図　遺構外出土遺物（６）



第32図　遺構外出土遺物（７）

の縦位または斜位回転による縄文が付される。

３．石器

石器には、石鏃・石匙・石錐・掻器・石箆・磨製石斧・敲石・凹石・石皿・石錘があるが、時代別に分類はできないため一括して説明を行う

（１）石鏃（第33図）

１類（１～10）：無茎石鏃である。基部の形態から３類に分けられる。

ａ類（１～３）:尖頭器様で両面に調整を行うが、３の主要剥離面には先行剥離面が広く残されている。

ｂ類（４）：基部が直線的で、両面中央に先行剥離面をわずかに残し、基部には先端方向に押圧剥離が行われる。

ｃ類（５～10）：基部が内側に湾曲するもので、両面への二次調整は細かな押圧剥離が行われる。

２類（11～30）：有茎石族である。最大幅が鏃身下端にあり、11・12の茎部は明瞭でないが、他は鏃身と茎部が明瞭である。いずれも両面調整が行われるが、12・18・24・28・30では先行剥離面が残されている。

（２）石匙（第34～36図）

石匙は縦型と横型の２類に分けられる。

１類（32～38・42～50）：縦型の石匙で33～37は打面側につまみ部を設けただけで、調整を行わず先行剥離面が作る鋭利な両側縁を刃部としている。37のつまみ部にはアスファルトが明瞭に残っている。32・38・40・46は両面に先行剥離面を広く残し、32・45・46では主要剥離面にはつまみ部周辺以外には二次調整は行われない。49・50は背面全面に押圧剥離が行われ、主要剥離面には側縁にのみ２次調整を行っている。

２類（39・40・41・52～59）：横型の石匙である。素材となる縦長剥片の打面側を側縁とし、つまみ部を素材剥片の側縁部に設けている。二次調整は両面全面に及ぶことはなく、いずれも両面に先行剥離面を広く残している。

（３）石錐（第36図）：58は素材の先行剥離面を残さず両面に二次調整を行い棒状の錐を作り出していて、先端部は摩耗して丸くなっている。59・60は素材剥片の形を変えることなく剥片の一端に錐部を作出しており、両者とも先端部は摩耗し丸みを帯びる。

（４）掻器（第37・38図）：剥片の一端または側縁部に刃部を設けている。いずれも素材剥片の形を変えることなく、両面には広く先行剥離面を広く残し、刃部は急角度に作出されている。

１類（62・64～67）：剥片の打面とは反対側の一端または側縁に刃部があり、素材剥片の打面はそのまま残され、65～67の刃部は急角度になっている。

２類（61・63・68～79）：素材剥片の側縁に刃部を設けるもので、69・72・73・74・78では片側縁に刃部があり、他は両側縁に刃部が作られる。

（５）石箆（第34・39図）：素材剥片を短冊形にし、二次調整を広く行うものである。80・84は主要剥離面に先行剥離面を広く残すが、31・81・82・85は両面全面に二次調整を施し、先行剥離面は残さない。

（６）磨製石斧（第40・41図）：86以外は全て破損した状態で出土している。破損の状況はいずれも石斧の中央部から折損しており、使用時に折れたものと判断される。95・100・102では、折損後再利

用のための調整痕が認められる。

（７）敲石（第42～43図）：卵形をした圭質頁岩の転石の両端に敲打痕のあるものである。114では両端、両側面にも敲打痕が認められる。いずれも掌にちょうど収まる大きさである。

（８）凹石（第44～45図）：凝灰岩や安山岩の礫の両面ないしは側面を利用している。115は円礫の両面と側面も利用しているが、116～112では片面のみに凹部がある。

（９）石皿（第46図）：２点出土しているが、124は凝灰岩の転石の片面の平滑な面が認められ、125は安山岩の破砕礫の片面を利用しており、３面のくぼんだ摩滅面がある。

（10）石錘（第46図）：いずれも小形の扁平な礫の両側縁の中央部にわずかに抉りを入れたものである。126は安山岩、127は圭質頁岩である。

４．石製品（第46図）

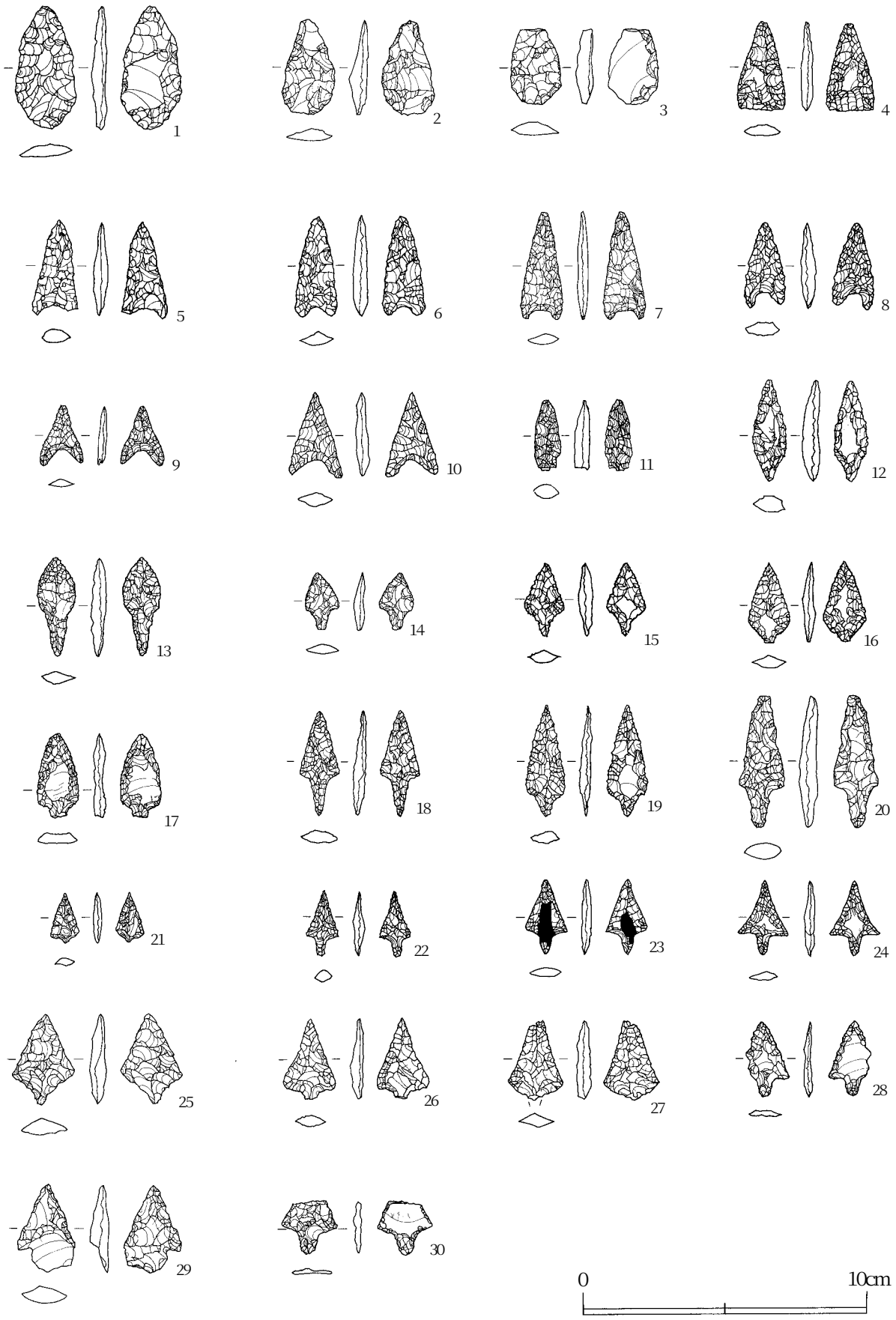
３点出土しており、いずれも凝灰岩である。129は細長い棒状の礫の上半に一条の線刻が巡っている。全体に粗い擦痕が認められ、両端には細かな敲打痕がある。128は扁平な礫の片面に放射状の線刻が施されている。片側面と裏面には敲打痕や擦痕がわずかに残っている。130は全面を研磨して底辺が緩く弧状を呈する三角形にした後に、両面の下半に「八」の字状の線刻を行うもので、岩偶の可能性もある。

【参考文献】

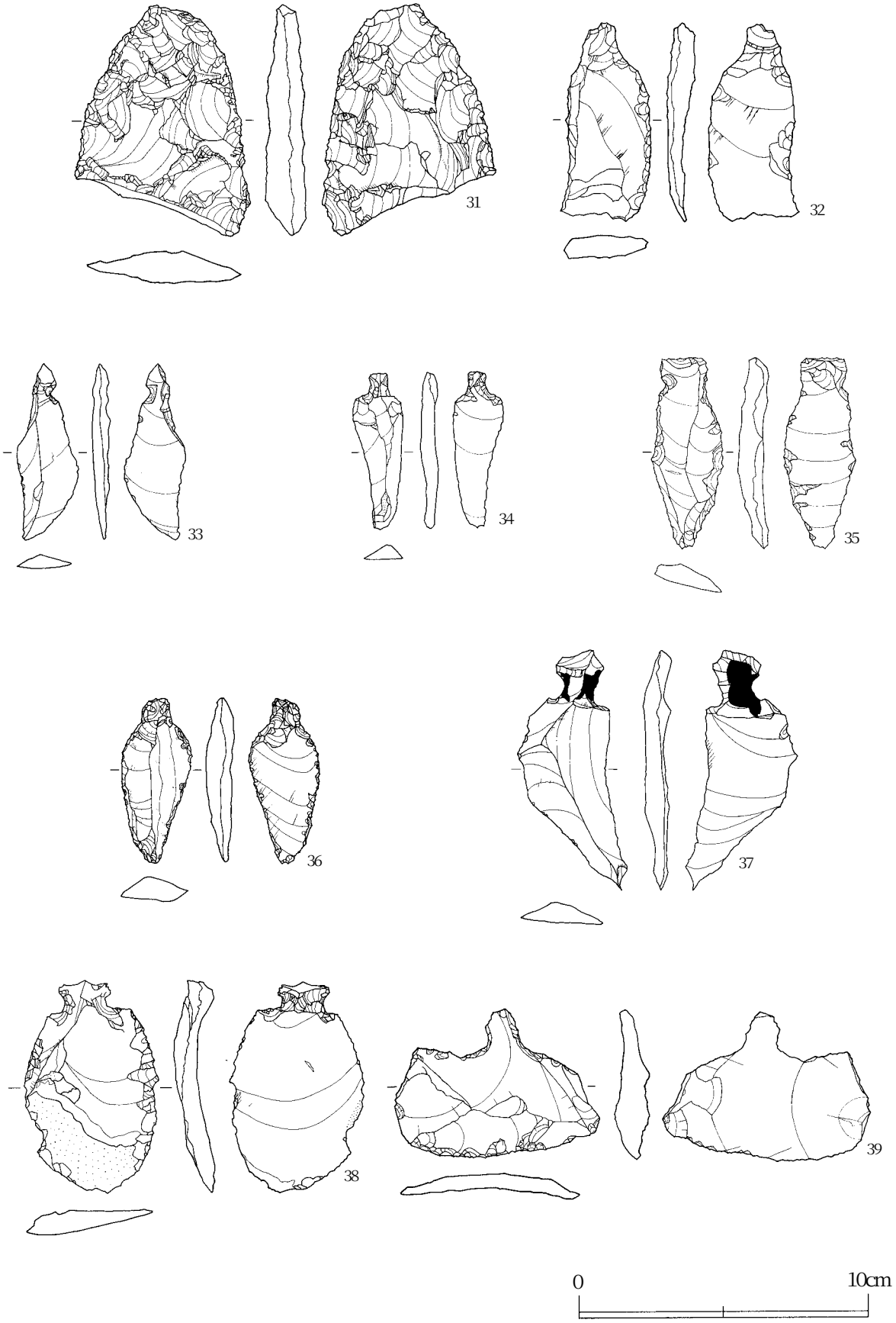
若美町教育委員会　『横長根Ａ遺跡－秋田県南秋田郡若美町横長根Ａ遺跡の調査報告－』　1984（昭和59）年

秋田県教育委員会　『八木遺跡発掘調査報告書－公害防除特別土地改良事業八木地区に係る埋蔵文化財発掘調査－』　秋田県文化財調査報告書第181集　1989（平成元）年

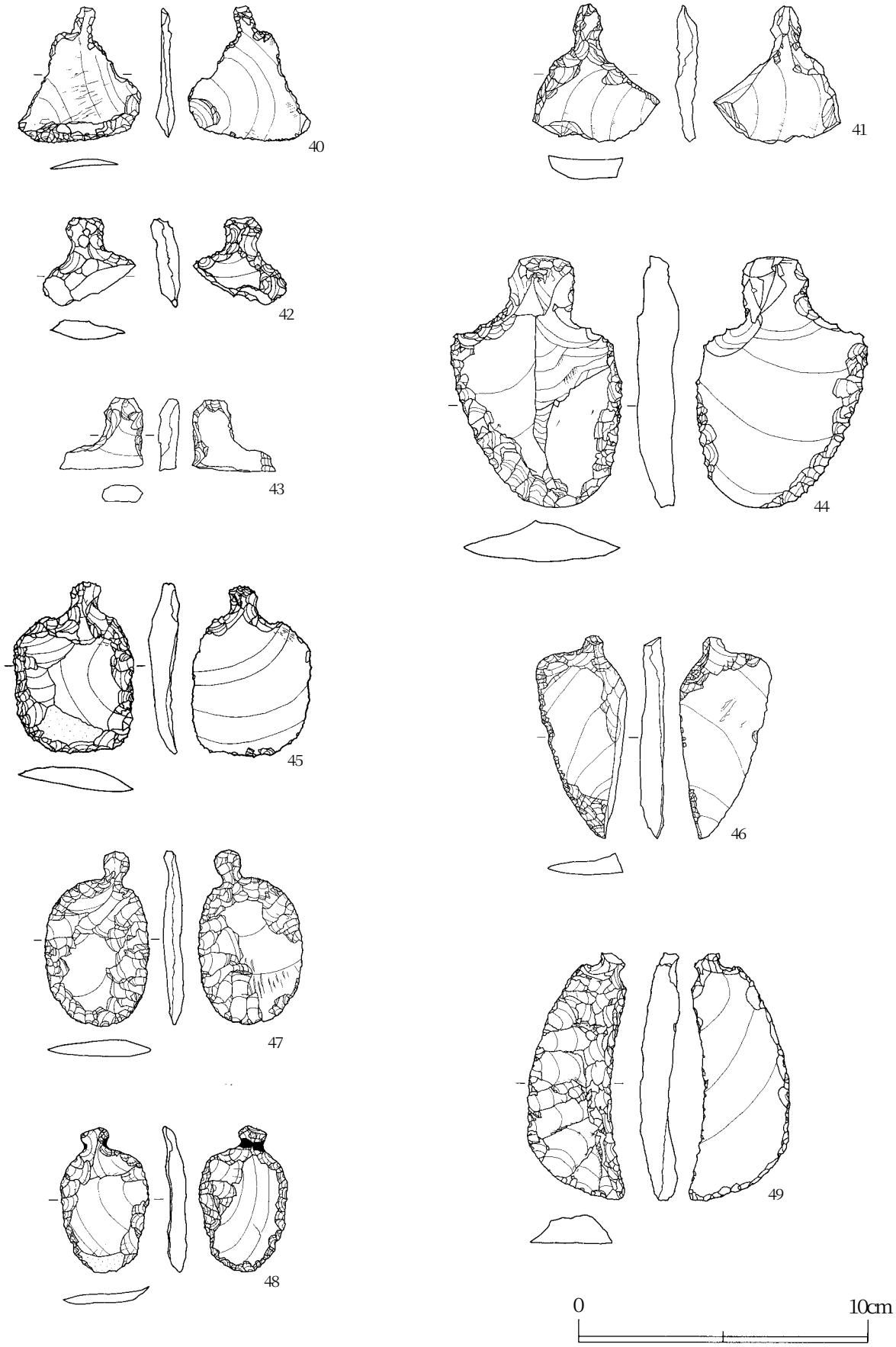
秋田県教育委員会　『虫内Ⅰ遺跡－東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ＸＸⅢ－』　秋田県文化財調査報告書第274集　1998（平成10）年



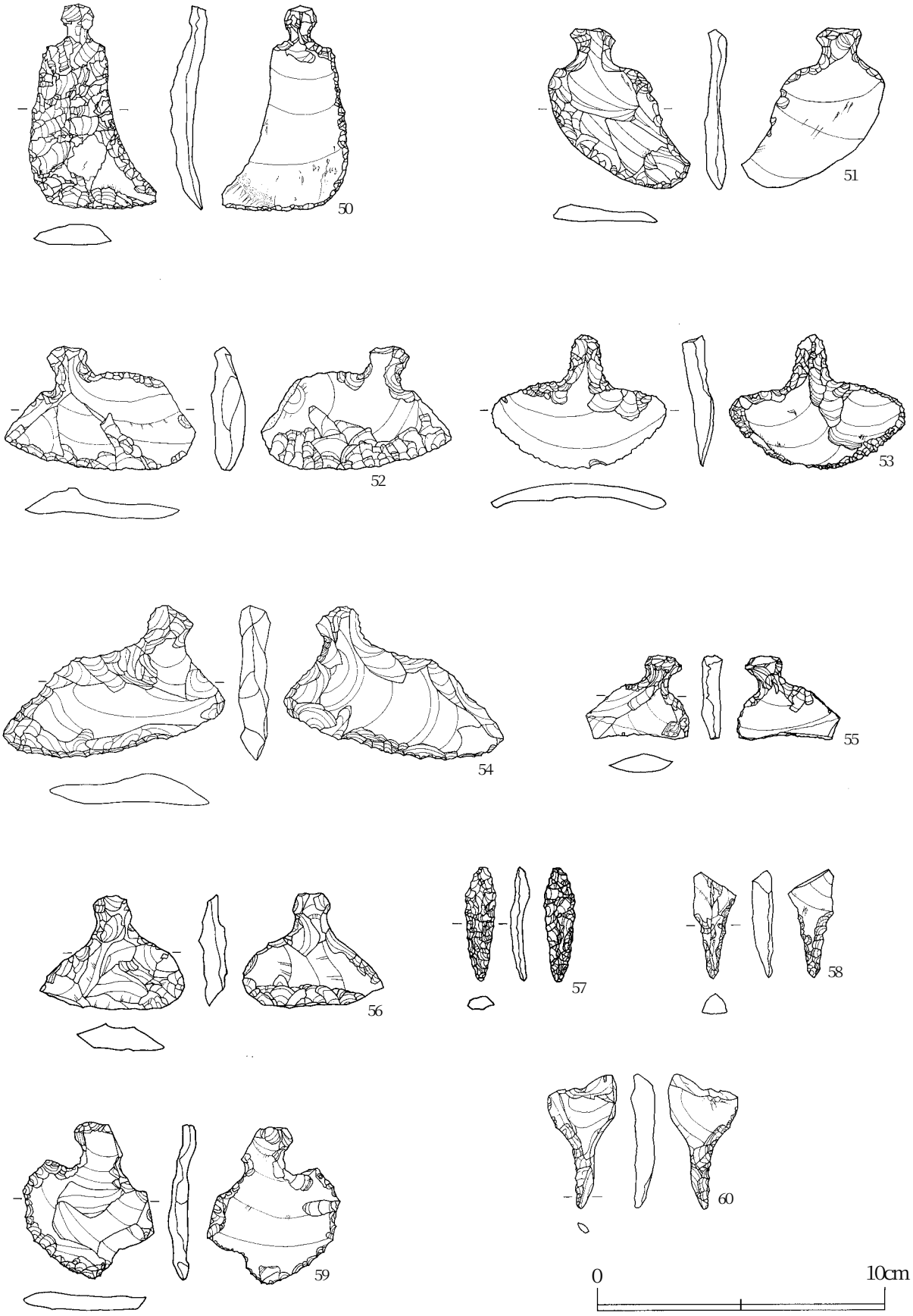
第33図　遺構外出土遺物（８）



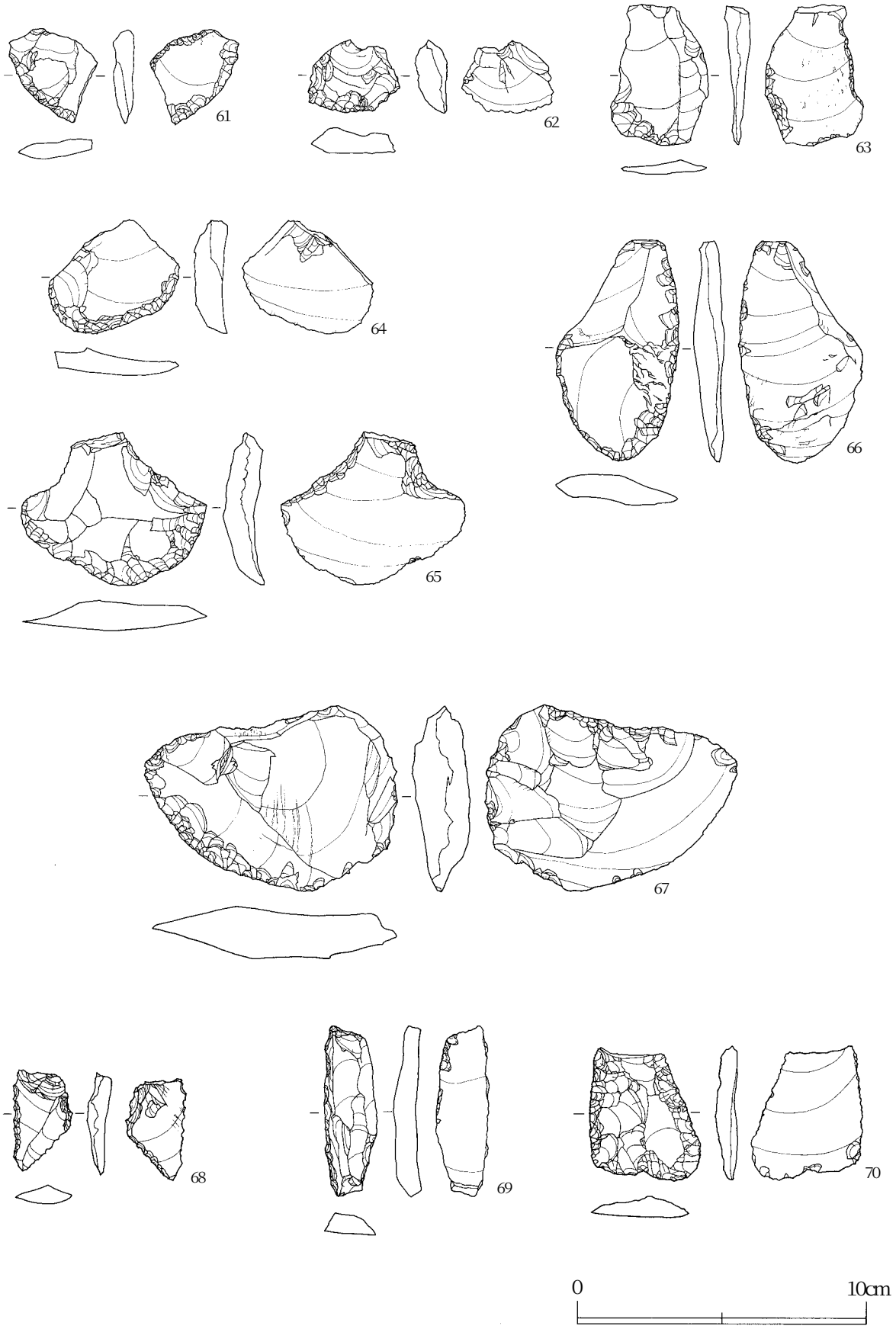
第34図　遺構外出土遺物（９）



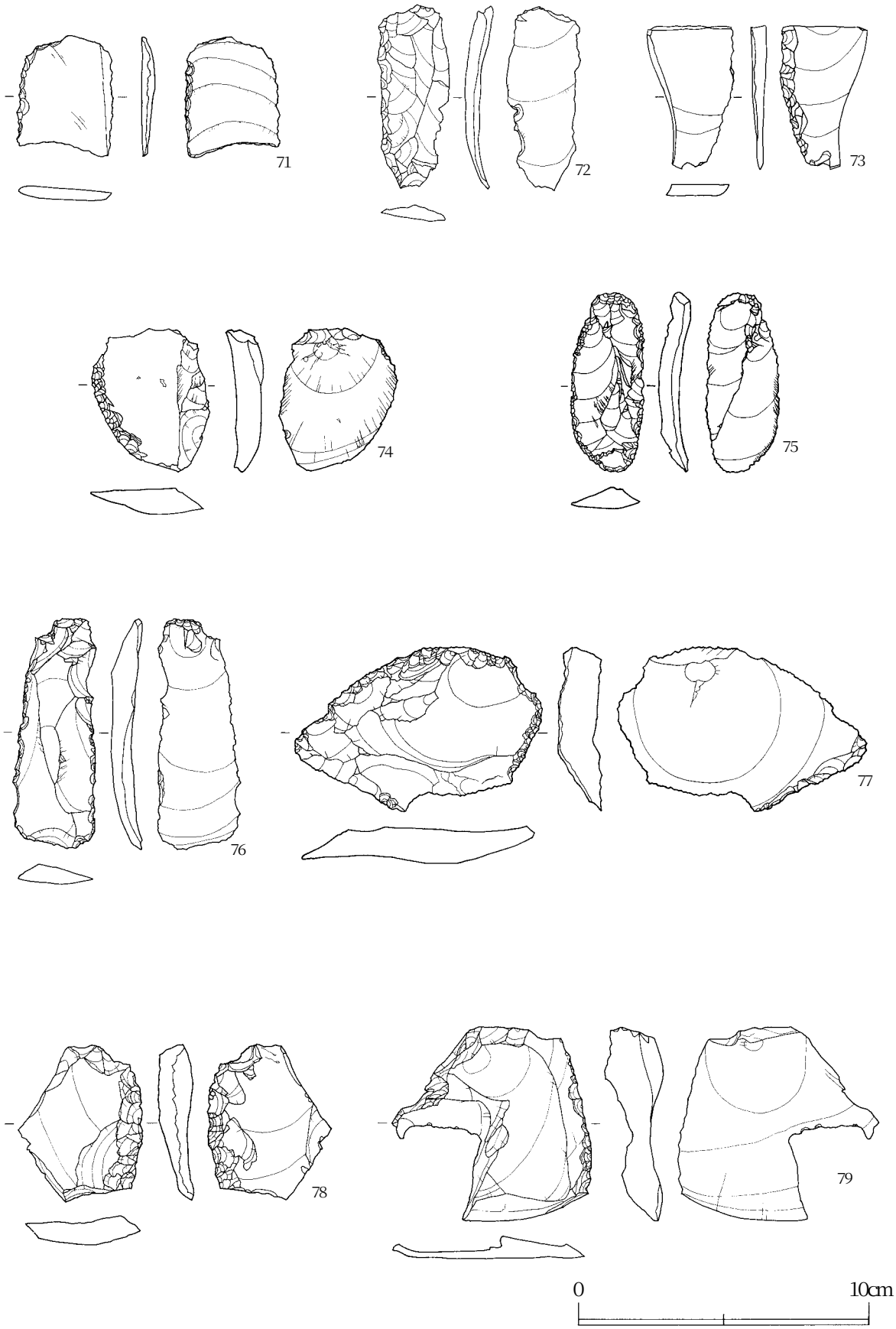
第35図　遺構外出土遺物（10）



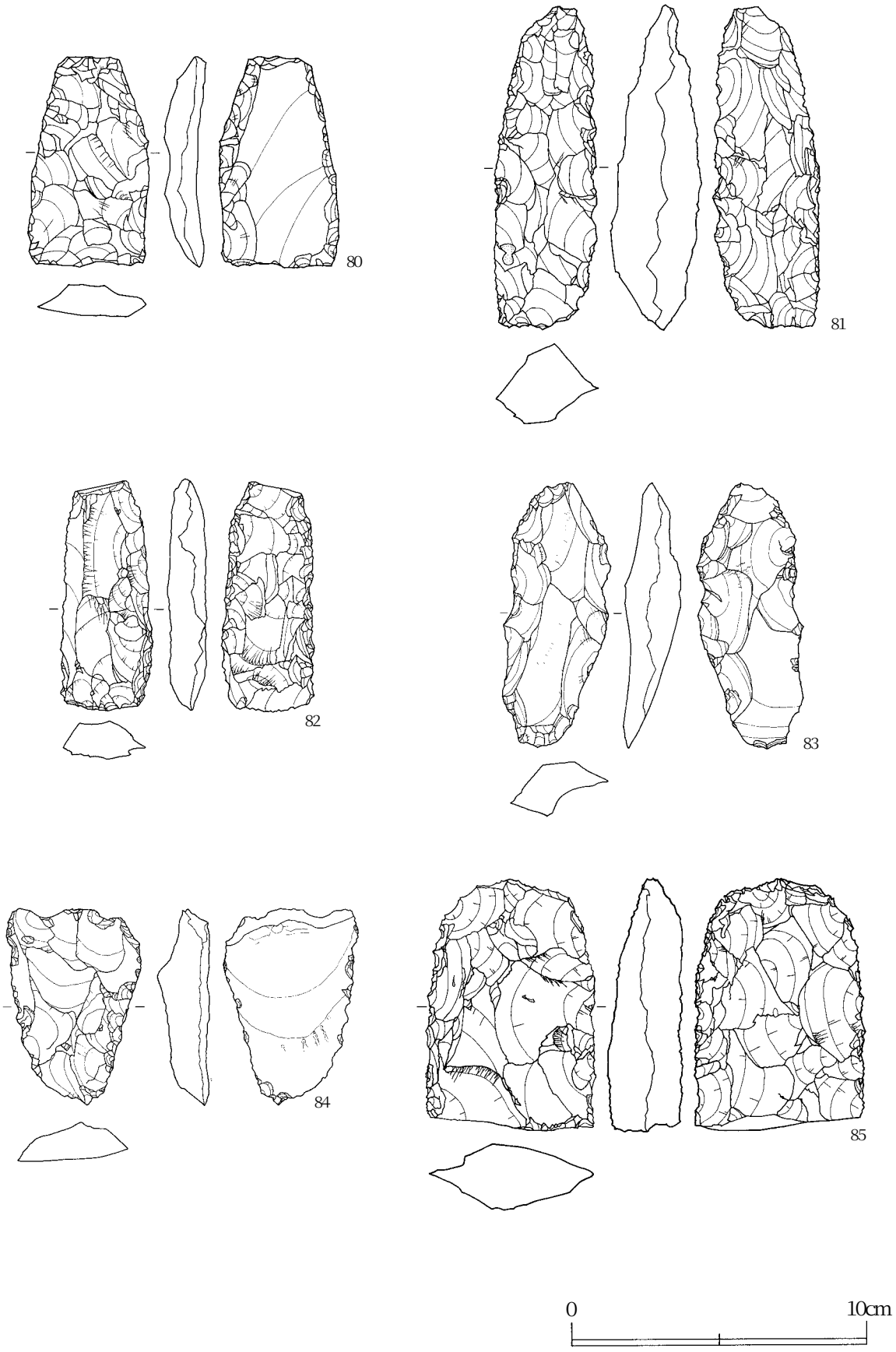
第36図　遺構外出土遺物（11）



第37図　遺構外出土遺物（12）

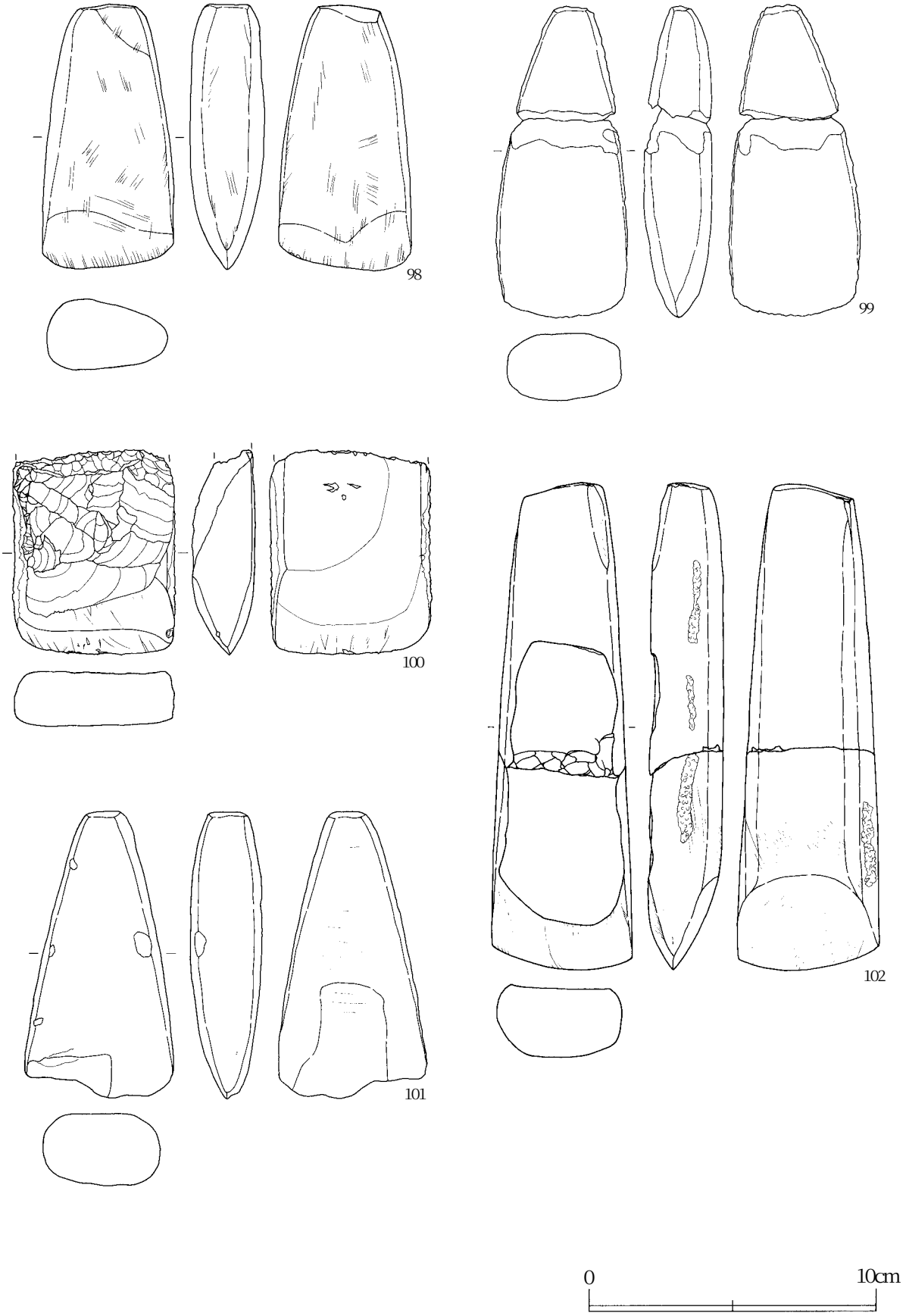


第38図　遺構外出土遺物（13）

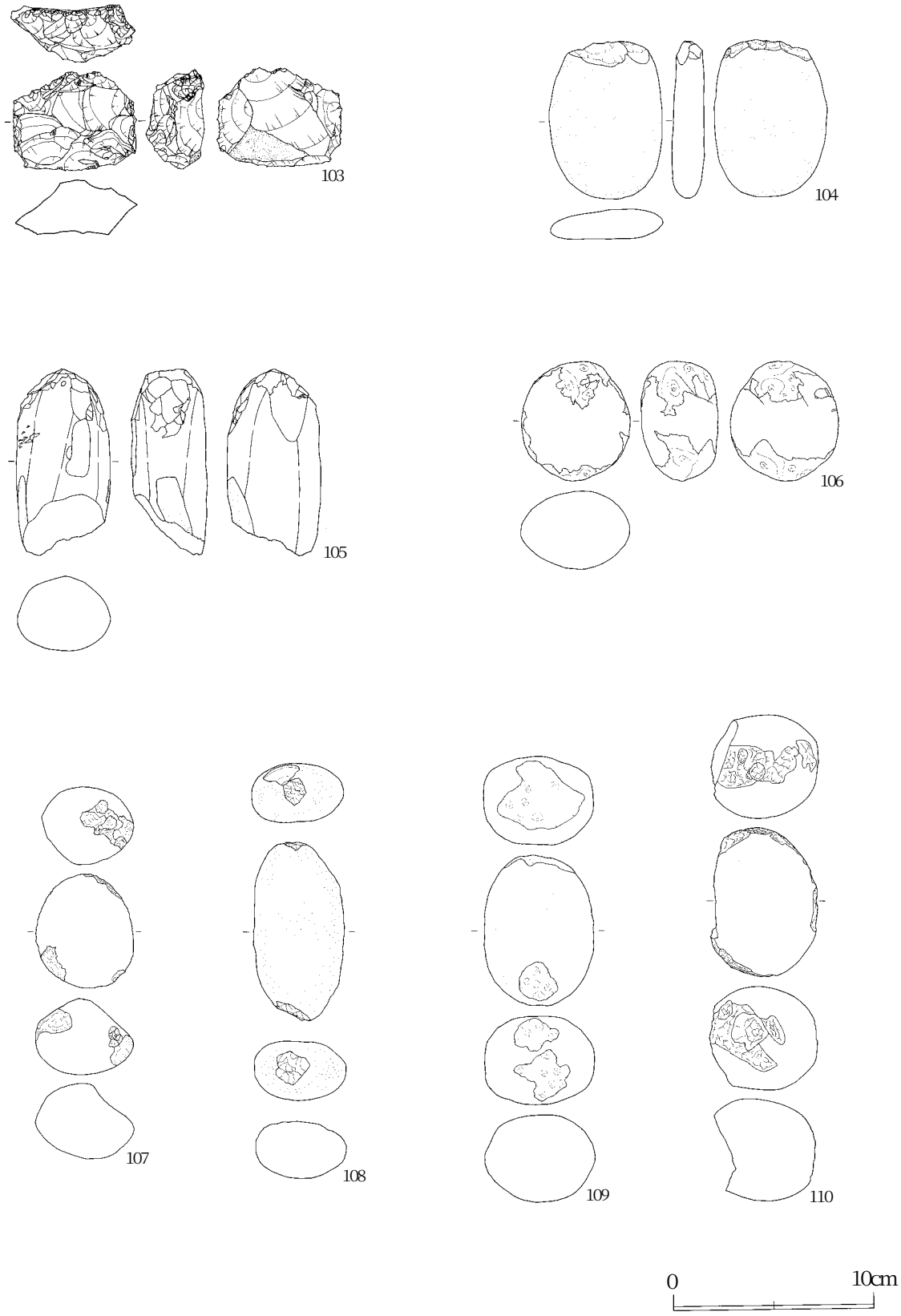


第39図　遺構外出土遺物（14）

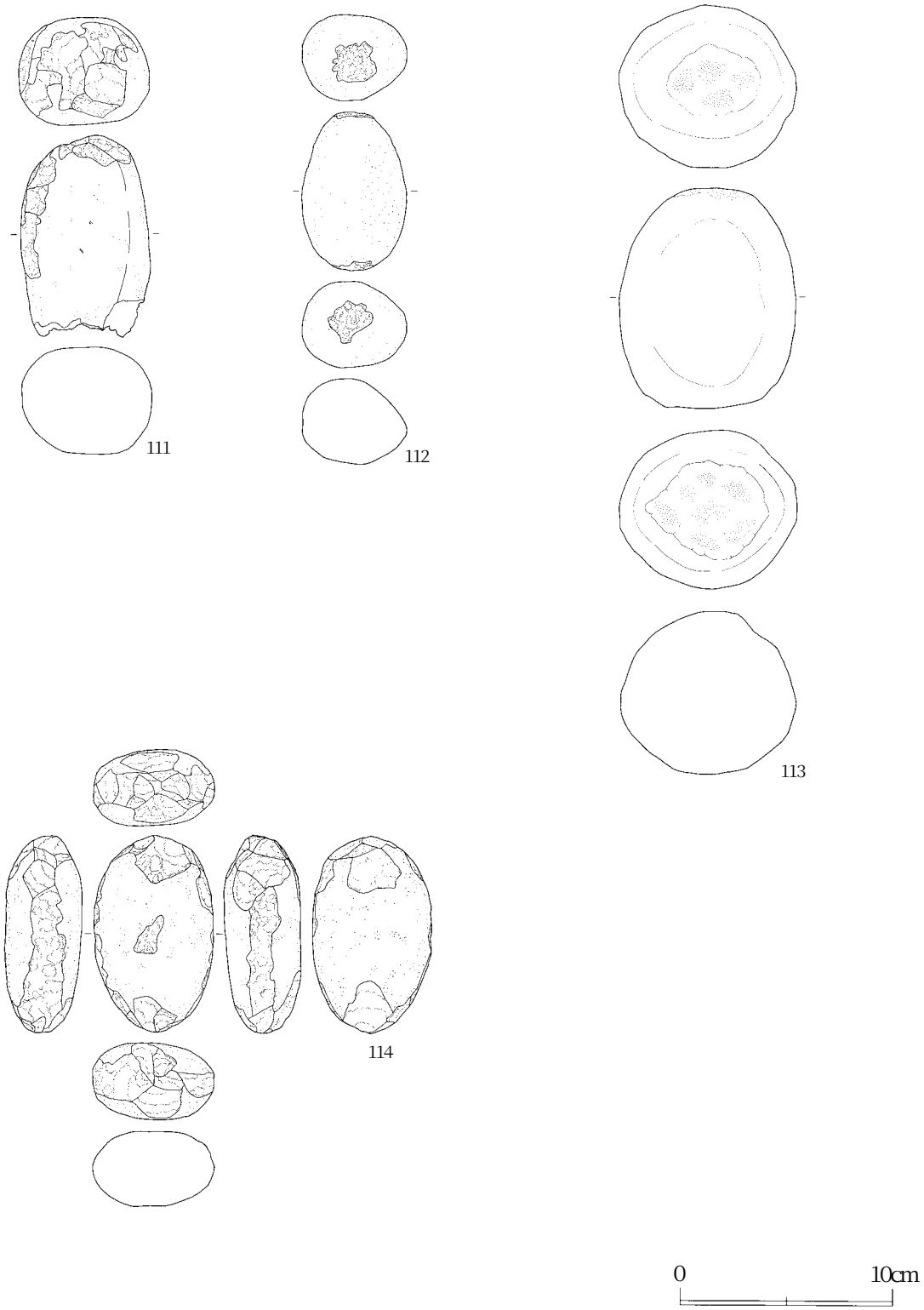
第40図　遺構外出土遺物（15）



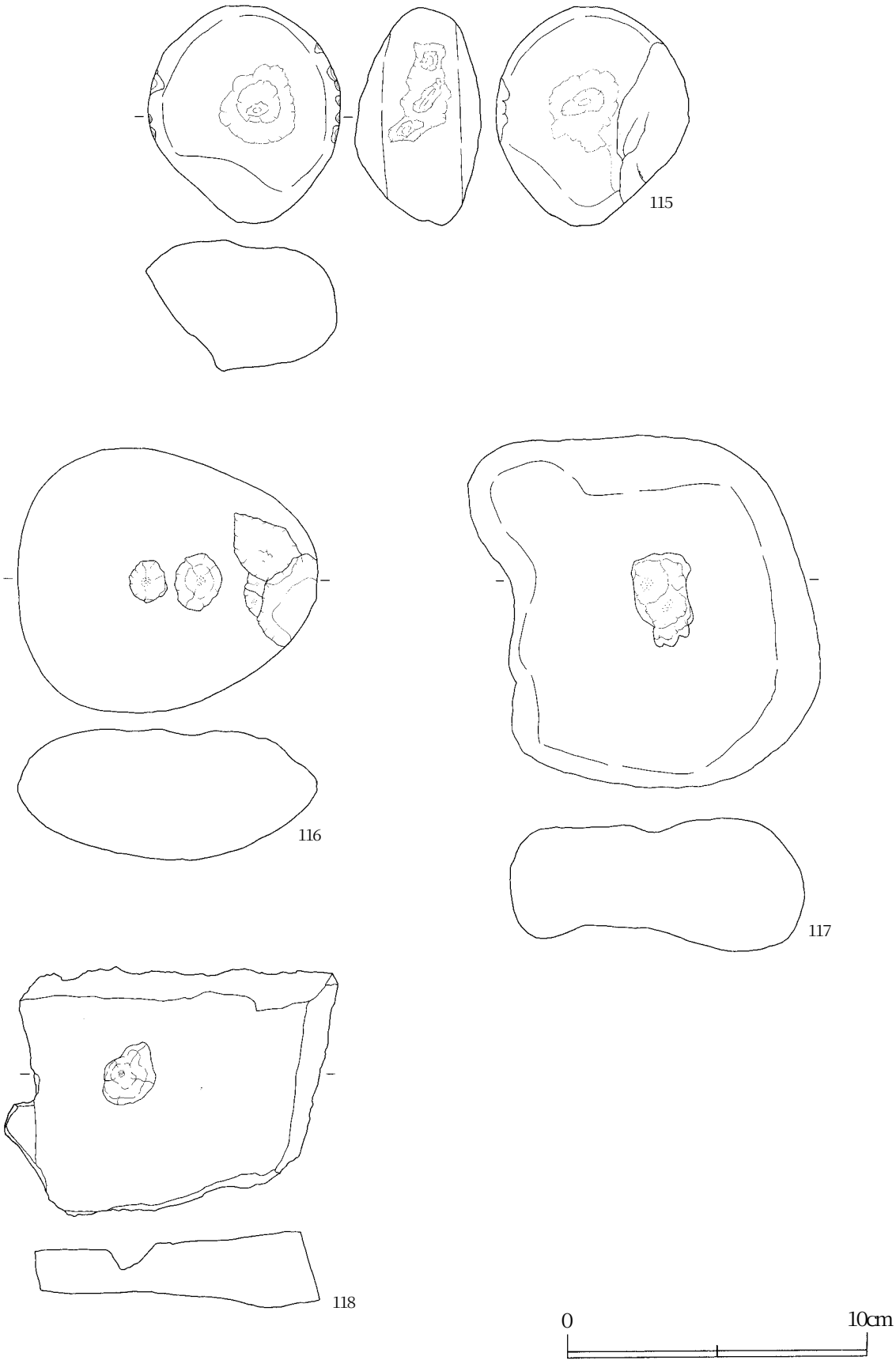
第41図　遺構外出土遺物（16）



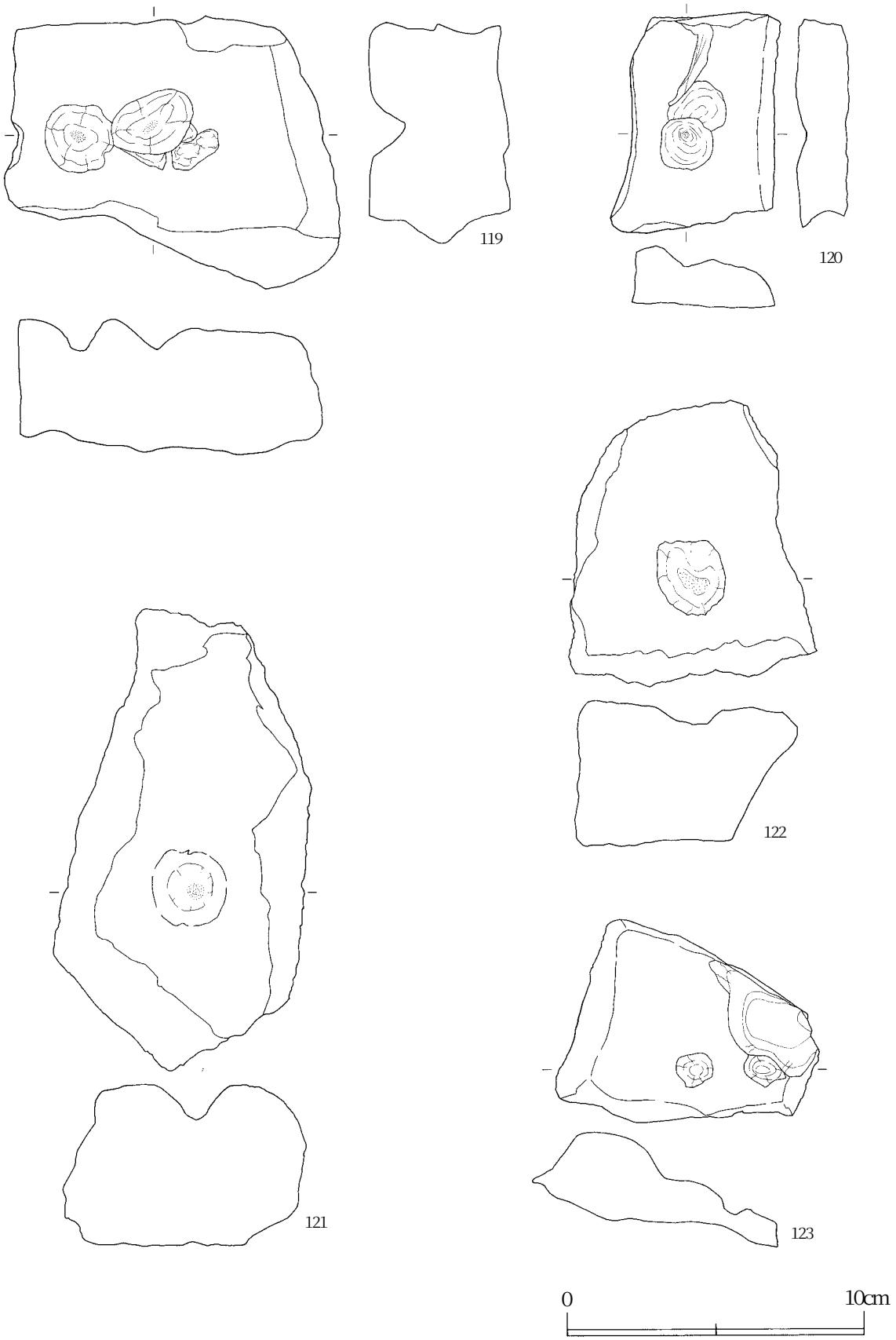
第42図　遺構外出土遺物（17）



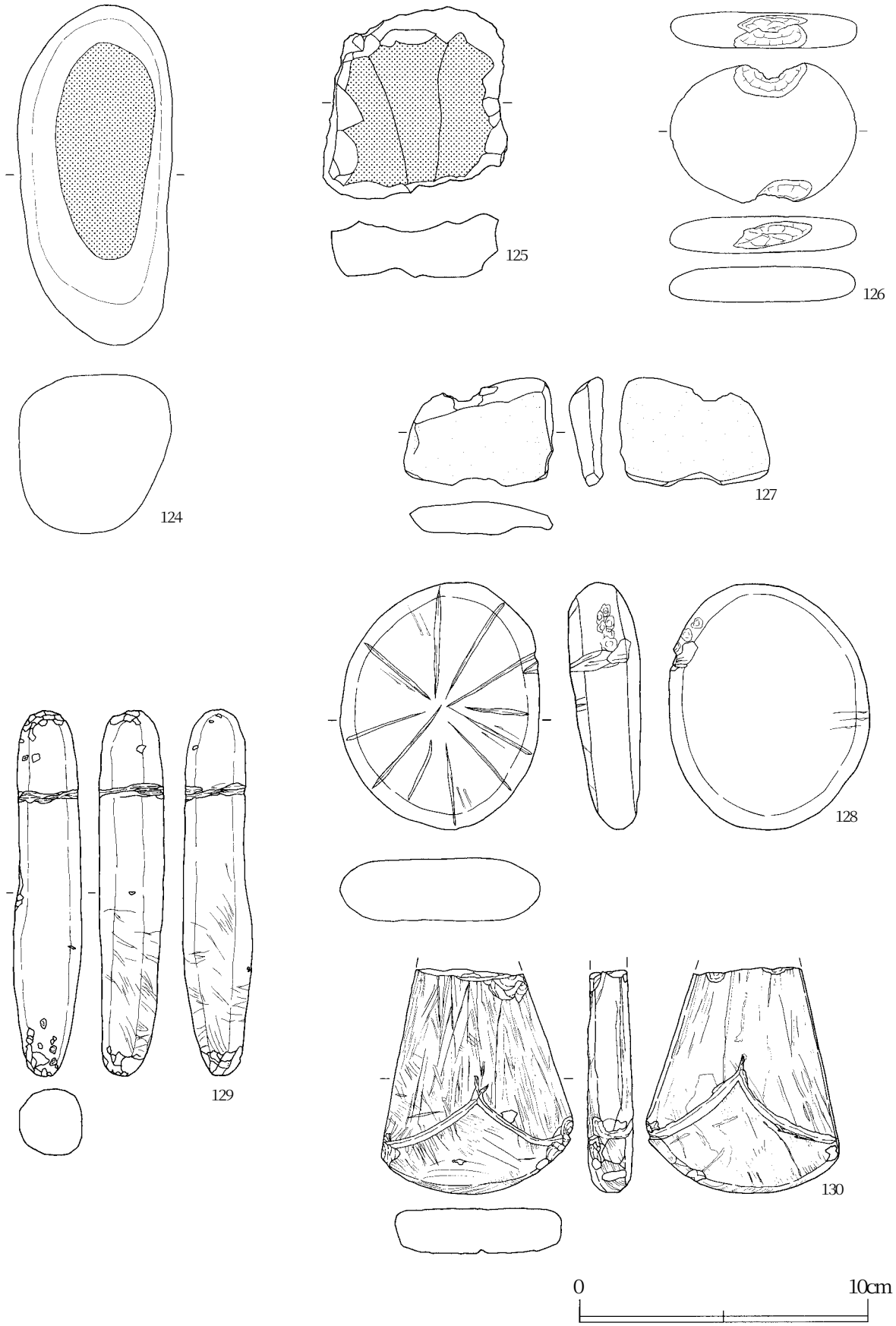
第43図　遺構外出土遺物（18）



第44図　遺構外出土遺物（19）



第45図　遺構外出土遺物（20）



第46図　遺構外出土遺物（21）

第５章　自然科学分析

第１節　堂の下遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

株式会社　古環境研究所

１．試料と方法

試　料	試料の種類	重量	前処理・調製	測定法
ＳＩ29	炭化物	２ｇ	酸／アルカリ／酸洗浄 石墨調製	ＡＭＳ法 （加速器質量分析法）

２．測定結果

試料名	^{14}Ｃ年代 （年ＢＰ）	δ^{13}Ｃ (‰)	補正^{14}Ｃ年代 （年ＢＰ）	暦年代	測定№ Beta-
ＳＩ29	3060±40	−26.5	3040±40	交点　ＢＣ 1300 ２σ　ＢＣ 1405 to 1190 １σ　ＢＣ 1380 to 1260	132100

（２σ：95% probability, １σ：68% probability）

１）^{14}Ｃ年代測定値

試料の^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比から、単純に現在（1950年ＡＤ）から何年前（ＢＰ）かを計算した値。^{14}Ｃの半減期は5,568年を用いた。

２）δ^{13}Ｃ測定値

試料の測定^{14}Ｃ/^{12}Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}Ｃ/^{12}Ｃ）。この値は標準物質（ＰＤＢ）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}Ｃ/^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動を補正することにより、暦年代（西暦）を算出した。補正には年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定値を使用した。この補正は10,000年ＢＰより古い試料には適用できない。

５）測定№

測定は、Beta Analytic Inc.（Florida, U.S.A）において行われた。Beta-は同社の測定№を意味する。

第２節　堂の下遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社　古環境研究所

１．試料

試料は、堂の下遺跡出土の炭化材である。記載は結果表に示す。

２．方法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。樹種同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３．結果

結果は表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

表１　堂の下遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試　料（遺構名／出土位置）	樹　種	（和名／学名）
ＳＩ29　炉直上	クリ	Castanea crenata Sieb. et Zucc.

クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40㎝ぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径２mに達する。耐朽性強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸ほだ木など広く用いられる。

４．所見

同定の結果、炭化材はクリであった。クリは温帯域のやや乾燥したところに生育し、冷温帯と暖温帯の中間域や比較的温暖であるが冬期の気温の低いところで純林を形成する。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

第３節　堂の下遺跡のテフラ科学分析

パリノ・サーベイ株式会社

秋田県山本郡琴丘町に所在する堂の下遺跡は、標高30～68mの丘陵上に立地する。発掘調査により、縄文・弥生時代の土器・石器や、多量の鉄滓が出土した。また、製鉄炉、炭窯などの製鉄関連遺構が検出されている。今回の分析調査では、周辺土壌のテフラ分析により、遺跡の年代資料を得る。

１．試料

試料は、土壌３点（試料番号１～３）である。土壌についてはテフラ分析を実施する。試料の詳細を表１に示す。

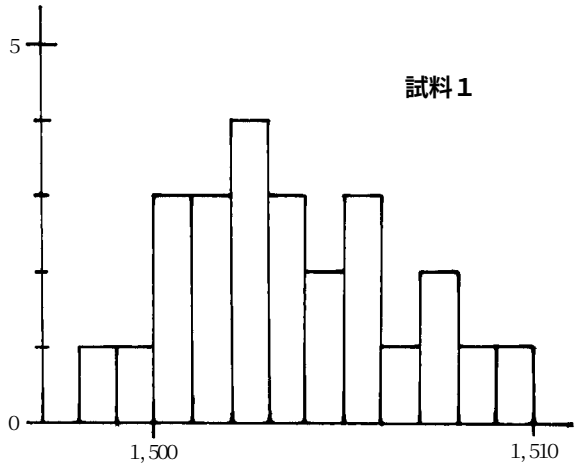
２．分析方法

試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象として観察し、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。形態分類による同定が困難な場合には、火山ガラスの屈折率を測定する。屈折率測定には、温度変化型屈折率測定装置"ＭＡＩＯＴ"（古澤，1995）を用いて、30片程度を目標として計測する。

３．結果

テフラ分析の結果、スコリアおよび軽石は試料中に認められず、火山ガラスのみ認められた。火山ガラスは、試料番号１に微量、試料番号２・３にきわめて微量含まれている。火山ガラスは、試料番号１・２・３のいずれにも、無色透明の軽石型およびバブル型が認められる。試料番号１に含まれる火山ガラスの屈折率を測定したところ、第47図に示す結果が得られた。火山ガラスの屈折率は、1.4987－1.5090であり、1.502付近に若干のピークが認められるが、全体的に拡散しており広範囲に認められる。

No.	採取地	種別
1	坪掘Ｆ　６層	土壌
2	坪掘Ｆ　７層	土壌
3	坪掘Ｆ　８層	土壌



第47図　テフラ分析試料一覧と火山ガラス屈折率

４．考察

試料番号１に認められた火山ガラスは、その形態と屈折率、遺跡の地理的位置、試料が採取された層位を考慮すると、十和田八戸テフラ（To-HP：Hayakawa，1985）および姶良Ｔｎ火山灰（ＡＴ；町田・新井，1976）に由来すると考えられる。町田・新井（1992）ではTo-HPの分布は給源である十和田カルデラよりも東方に限られているが、黒木（1995）によれば、十和田カルデラの西方に位置する岩木山の北麓、東麓、南麓にも層厚30㎝のTo-HPが認められている。To-HPは、約1.2～1.3万年前に噴出したとされ、火山ガラスの屈折率は1.502－1.509とされている（町田・新井，1992）。ＡＴは南九州の姶良カルデラより約2.2－2.5万年前に噴出した広域テフラであり、屈折率は1.498－1.501とされている（町田・新井，1992）。試料番号12が採取された６層には、下位層よりも火山ガラスが多く含まれている。試料番号１に認められた火山ガラスの屈折率を考慮すれば、試料番号１に含まれる火山ガラスの多くはTo-HPに由来すると考えられる。したがって、６層が堆積したのはTo-HPが降灰した約1.2～1.3万年前頃であると考えられる。また、試料番号２・３（７層および８層）に認められた火山ガラスはごく僅かであったが、これらは主にＡＴに由来するものであると考えられる。

引用文献

古澤　明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，p.123－133.

Hayakawa，Y.（1985）Pyroclastic giology of Towada volcano. Bulletin of the Earthquake Researach Institute，University of Tokyo，60，p.507－592.

東村武信（1990）改訂　考古学と物理化学．212p.，学生社.

窪田蔵郎（1987）改訂　鉄の考古学．308p.，雄山閣.

黒木貴一（1995）岩木山北麓の火山麓扇状地．季刊地理学，47，p.285－301.

Takahashi Tsutomu（1997）The iron－making and utilization of forest resouces in ancient time. REKIHAKU INTERNATIONAL SYMPOSIUM　Terrestrial Environmental Changes and Natural　Disasters during the Last 10，000 Years（Abstracts），p.171－172，National Museum of Japanese History.

町田　洋・新井房夫（1992）「火山灰アトラス」．276p.，東京大学出版会.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562－569.

第６章　まとめ

今回の調査で出土した遺物は旧石器時代の石器、縄文時代、弥生時代の土器・石器で、遺構では縄文時代の竪穴住居跡・土坑・陥し穴状土坑、弥生時代の竪穴住居跡を検出した。

旧石器では８点のナイフ形石器と２点の石刃が出土している。柳葉状のナイフ形石器は（１）は、片側縁に二次調整を行ういわゆる茂呂形ナイフで、他のナイフ形石器とともにおよそ２万年前と位置付けられる。また、剥片や細片が出土していないことから、石器制作跡ではなくキャンプサイト的な性格を有していたものと考えられる。こうした石器だけが出土した例としては、堂の下遺跡から北西３㎞の狐森遺跡からは３点の掻器だけが出土しており、また能代市館下遺跡でも杉久保形のナイフ形石器２点のみが出土している。秋田県内における旧石器時代の遺跡では、家の下遺跡などのように石器や剥片が１万点以上をも出土する遺跡も多く、遺跡から出土する石器の数量、石器組成などの違いは遺跡個々の性格を反映していると考えられる。

縄文時代には３軒の竪穴住居跡がある。出土土器から後期前葉の門前式期と判断される竪穴住跡（ＳＩ31）があり、隣接してＳＩ29が存在する。両住居とも遺跡内を東から西に流れる沢の狭小な下流低地にあり、居住に適した場所とは言い難い。ＳＩ29は、出土遺物から後期前葉の十腰内Ｉ式期と考えられる住居である。住居東壁近くから出土した石棒は、木根の影響を受けて本来の位置を留めてはいなかったが、全体に精緻な加工を行い、特に頭部に非常に細かな彫刻を施したものである。住居内の東壁近くに祀られていた可能性もあり、立地場所をも考慮すると、ＳＩ29は特殊な竪穴住居であったことも考えられる。ＳＩ29と同時期の住居が、ＳＩ436である。丘陵の西側先端部に立地し、最も遺物が多く出土したＪ区の遺物集中域で確認され、覆土中からではあるがポシェットに似た小形土器が出土している。既述のとおり、調査では丘陵平坦部に数カ所の遺物の集中する場所が認められ、これらは出土した土器から、縄文時代後期前葉から後葉にかけての捨て場の可能性があり、さらに最も多く出土したのは後期前葉から中葉にかけての土器である。これらのことから、堂の下遺跡の縄文時代後期前葉には、特殊な住居と考えられるＳＩ29やＳＩ436の時期に、丘陵平坦部には捨て場が形成されたものと考えられ、調査区周辺に当概期の集落の存在が予想できる。

弥生時代の竪穴住居ＳＩ291は、丘陵西端の馬背状の尾根部分に立地している。周辺から出土した土器には弥生時代全般の土器があるが、出土土器からは、弥生時代前半の竪穴住居と判断される。

堂の下遺跡の調査では、遺物量・遺構数とも決して多くはないが、旧石器時代には狩猟の場、縄文時代後期には祭祀を行った可能性のある特殊な竪穴住居のある居住域、弥生時代前半には小さいながらも居住域として、各時代の遺跡の性格を推測できる資料を得られることになった。特に、ＳＩ29の調査結果は、縄文時代後期前葉の祭祀形態を考える上で新たな情報を提示することになったといえる。

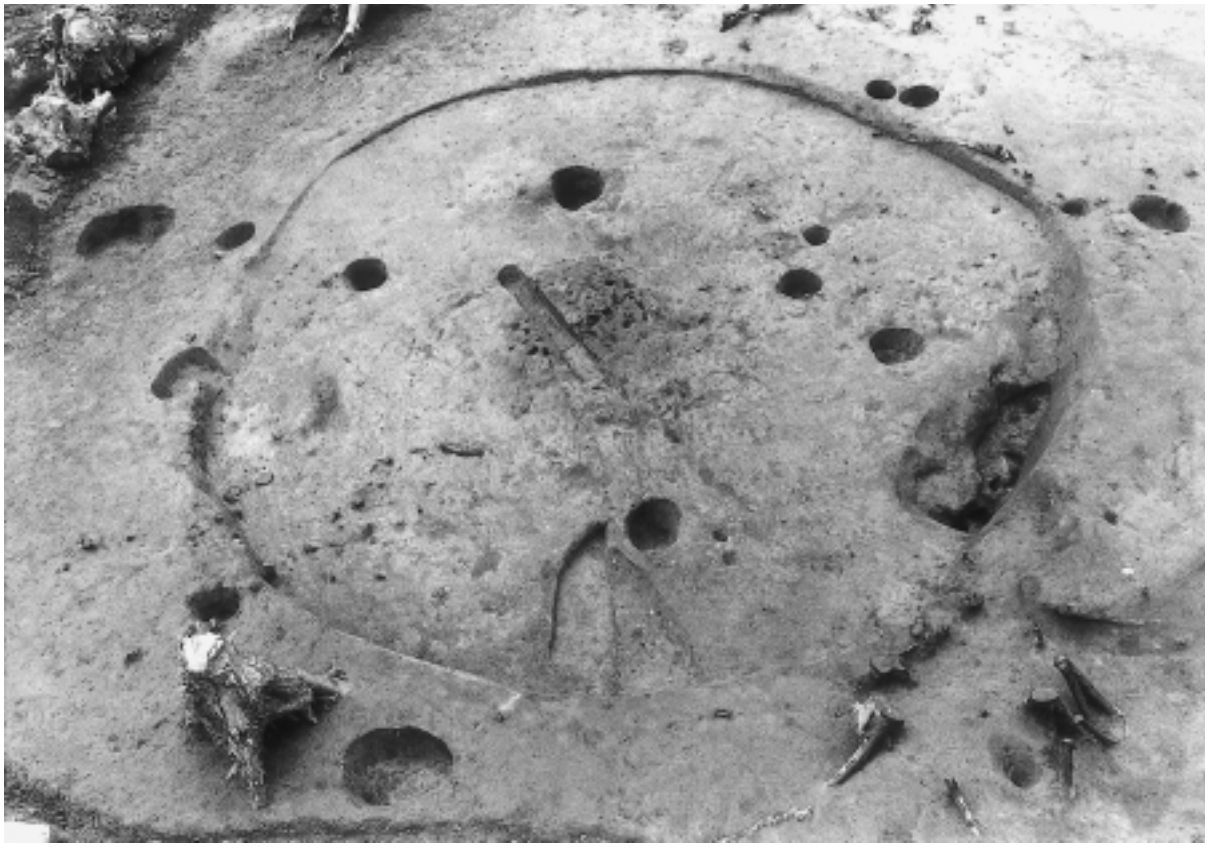
参考文献

秋田県教育委員会 『家の下遺跡（２） 旧石器時代編－県営ほ場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第275集　1998（平成10）年

秋田県教育委員会 『狐森遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ－』 秋田県文化財調査報告書第345集　2002（平成14）年

1　Ａ区近景（北から）

2　Ｊ区近景（東から）

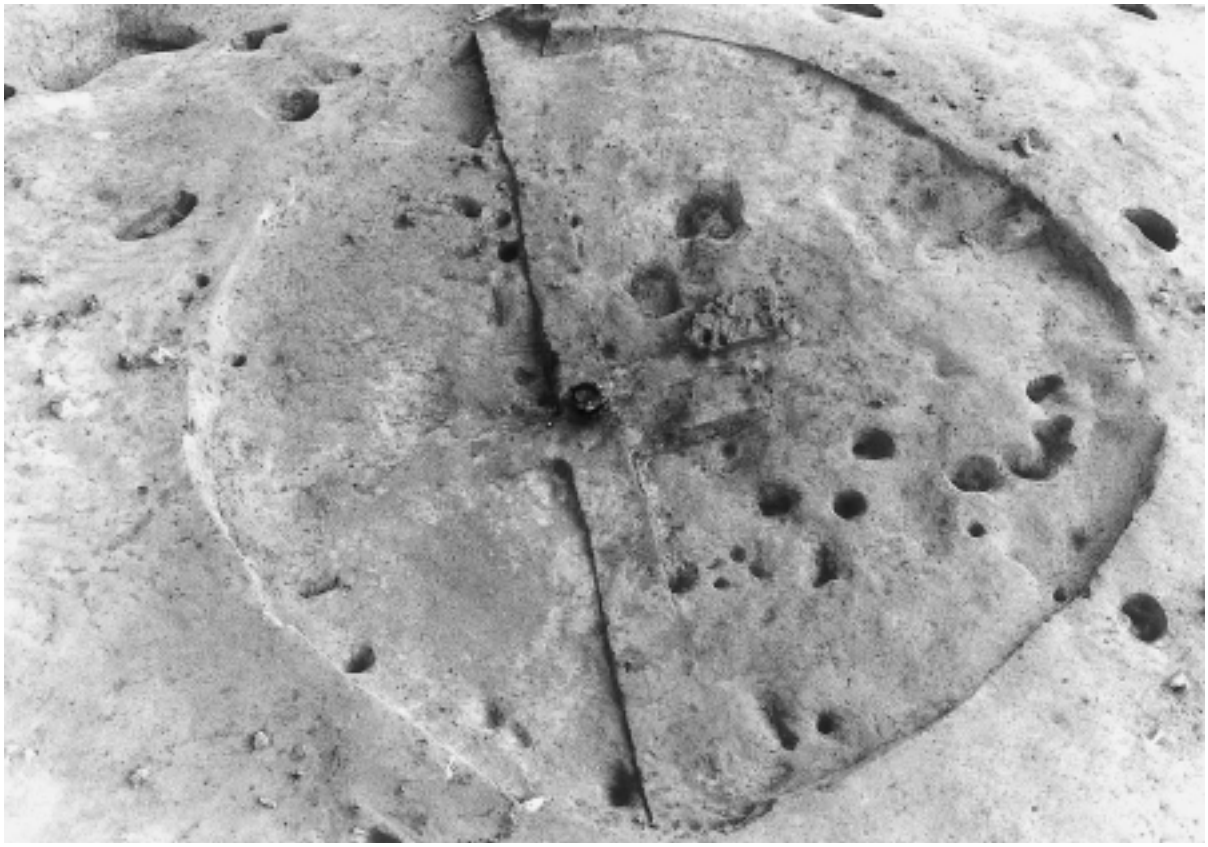


1　ＳＩ29竪穴住居跡完掘状況（西から）

2　ＳＩ29竪穴住居跡石棒出土状況（１）（南西から）

1　ＳＩ29竪穴住居跡石棒出土状況（２）（北から）

2　ＳＩ31竪穴住居跡検出状況（西から）



1　ＳＩ31竪穴住居跡完掘状況（西から）

2　ＳＩ291竪穴住居跡完掘状況（西から）

1　ＳＩ291竪穴住居跡遺物出土状況（東から）

2　ＳＩ436竪穴住居跡検出状況（北東から）

1　ＳＩ436竪穴住居跡完掘状況（北東から）

2　ＳＩ436竪穴住居跡断面（１）（南から）

1　ＳＩ436竪穴住居跡断面（２）（東から）

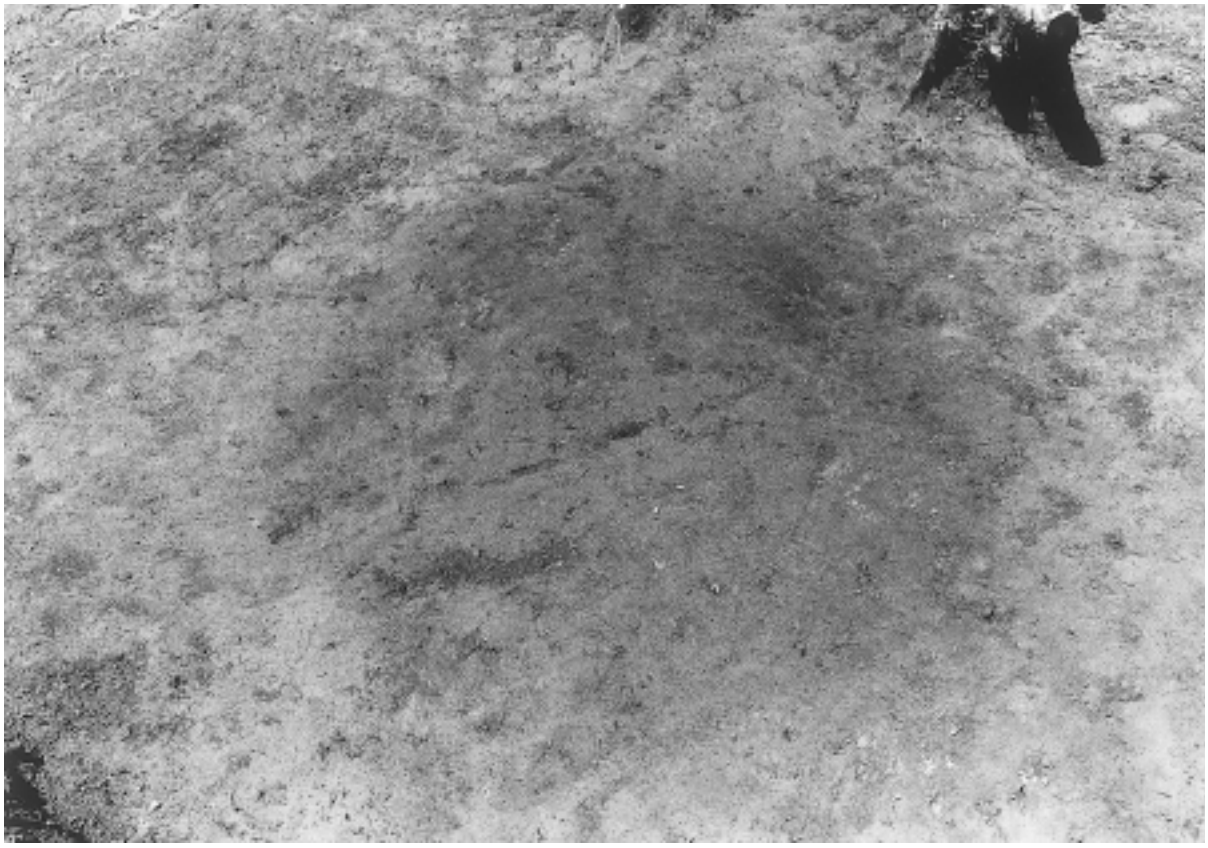
2　ＳＩ436竪穴住居跡遺物出土状況

1　ＳＫＦ232フラスコ状土坑土層（北西から）

2　ＳＫＦ232フラスコ状土坑完掘状況（北西から）

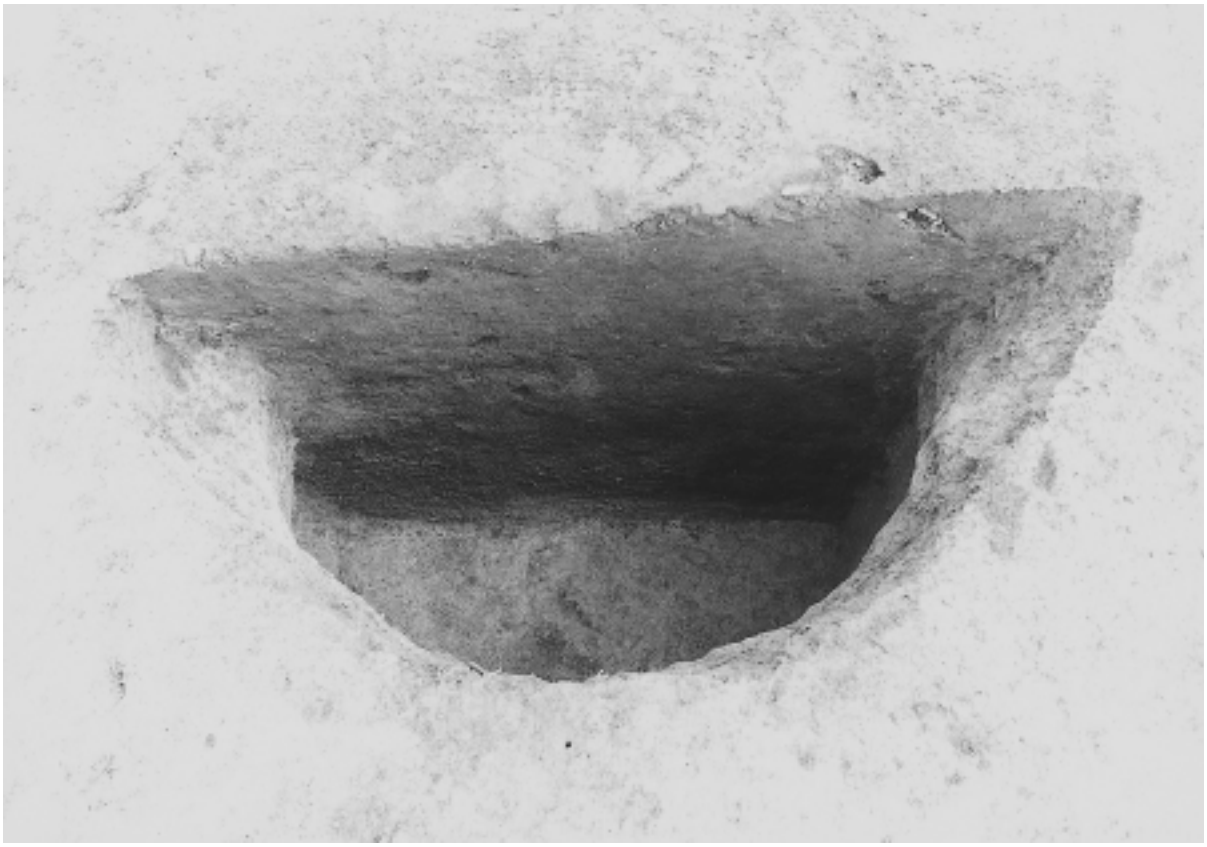
1　ＳＫＦ234フラスコ状土坑土層（北西から）

2　ＳＫＦ234フラスコ状土坑完掘状況（北西から）



1　ＳＫＦ236フラスコ状土坑検出状況（北西から）

2　ＳＫＦ236フラスコ状土坑完掘状況（北西から）



1　ＳＫＦ244フラスコ状土坑土層（北東から）

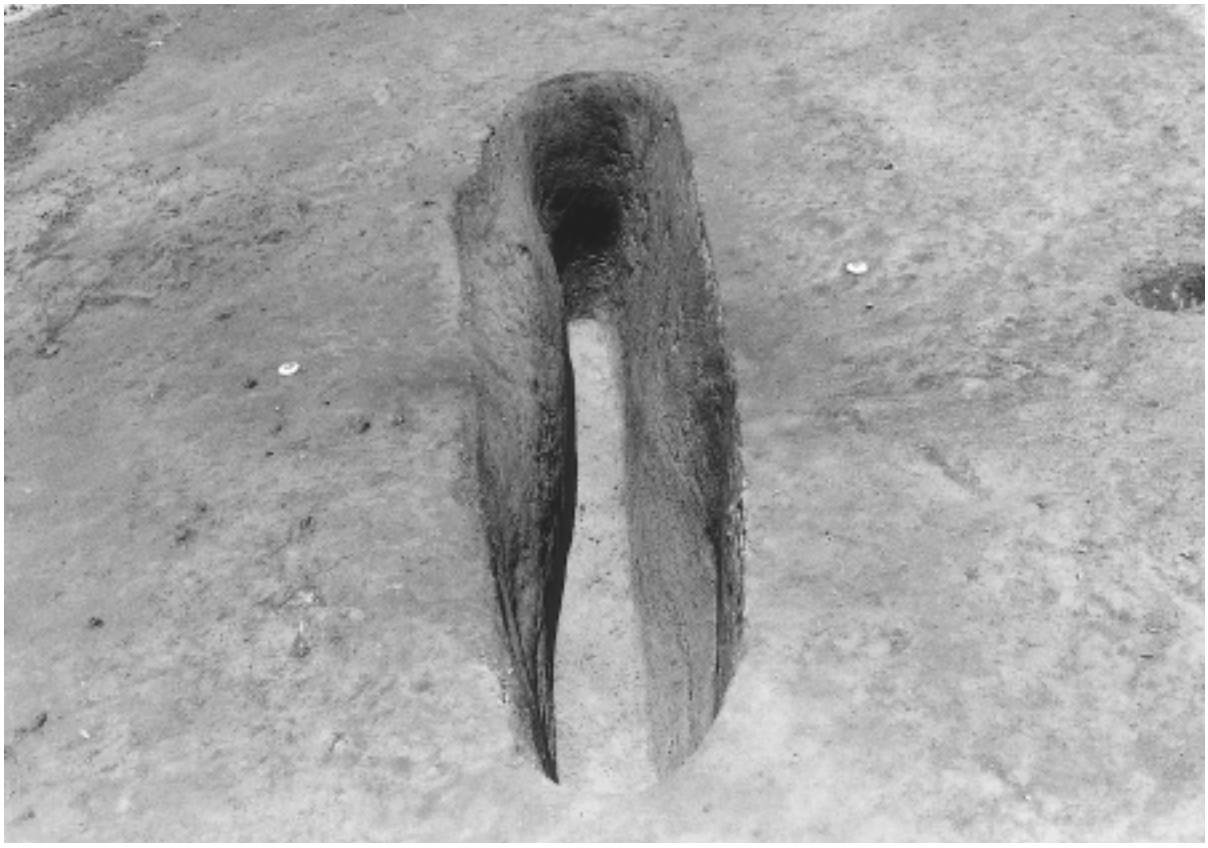
2　ＳＫＦ244フラスコ状土坑完掘状況（北東から）

1　ＳＫＦ297フラスコ状土坑土層（北西から）

2　ＳＫＦ297フラスコ状土坑完掘状況（北西から）

1　ＳＫＦ317フラスコ状土坑土層（南東から）

2　ＳＫＦ317フラスコ状土坑完掘状況（南東から）

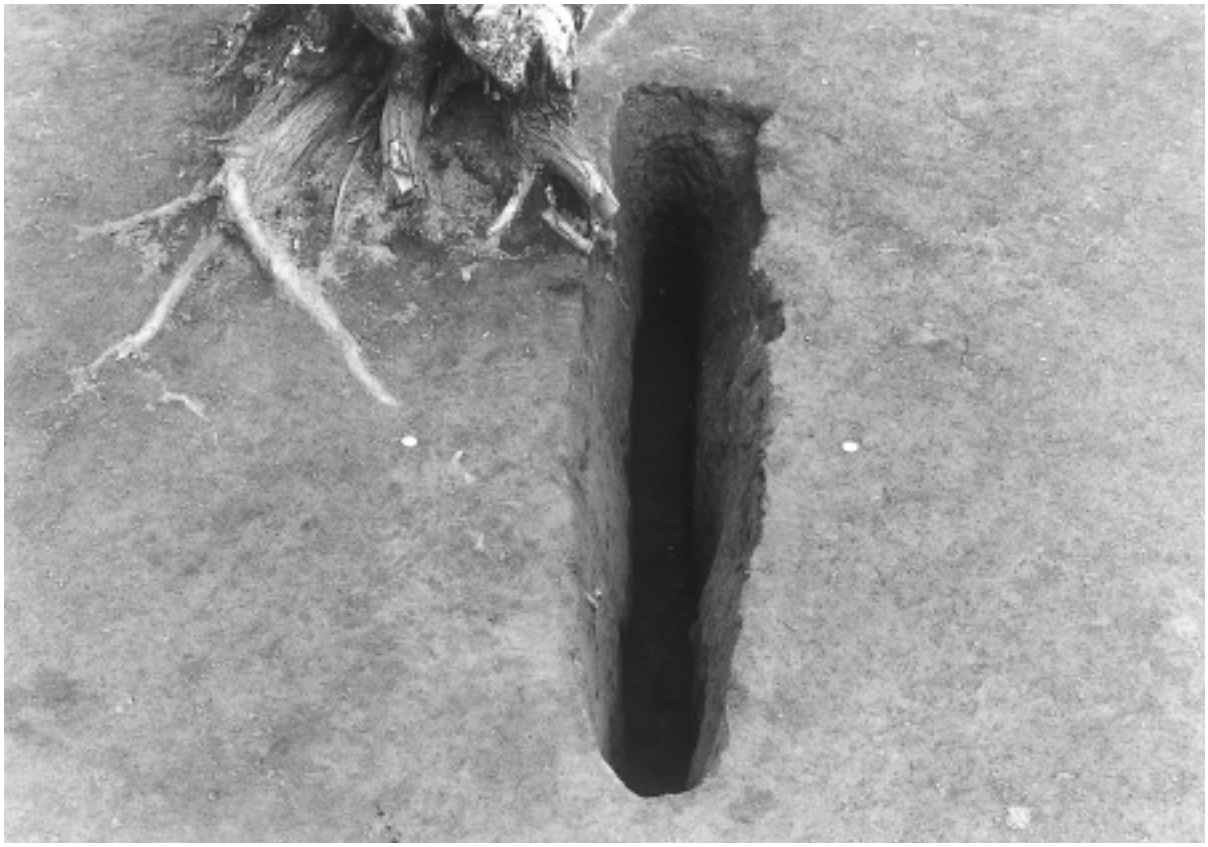


1　　ＳＫＴ239陥し穴状土坑完掘状況（南東から）

2　ＳＫＴ239陥し穴状土坑土層（北西から）

1　ＳＫＴ251陥し穴状土坑完掘状況（北東から）

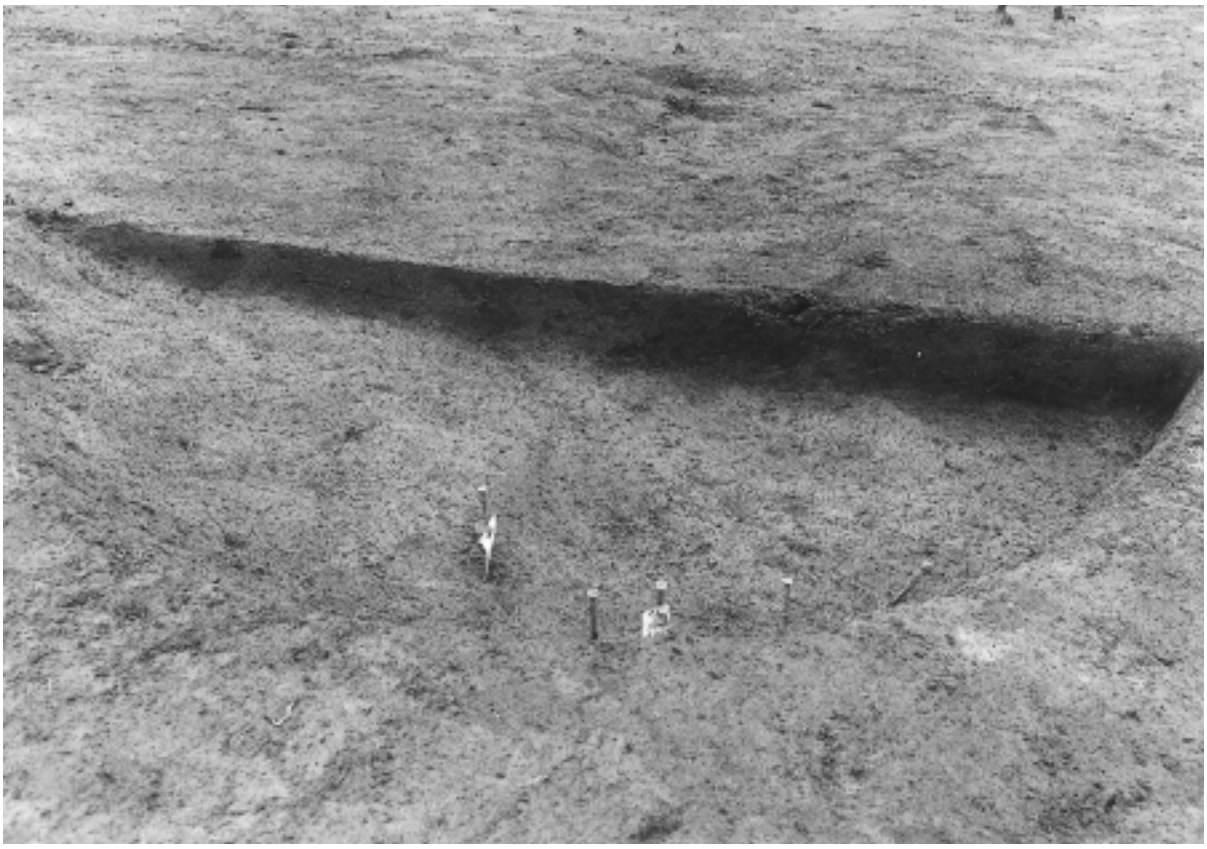
2　ＳＫＴ251陥し穴状土坑土層（南東から）



1　ＳＫＴ288陥し穴状土坑完掘状況（西から）

2　ＳＫＴ288陥し穴状土坑土層（西から）

1　ＳＫ06完掘状況（南西から）

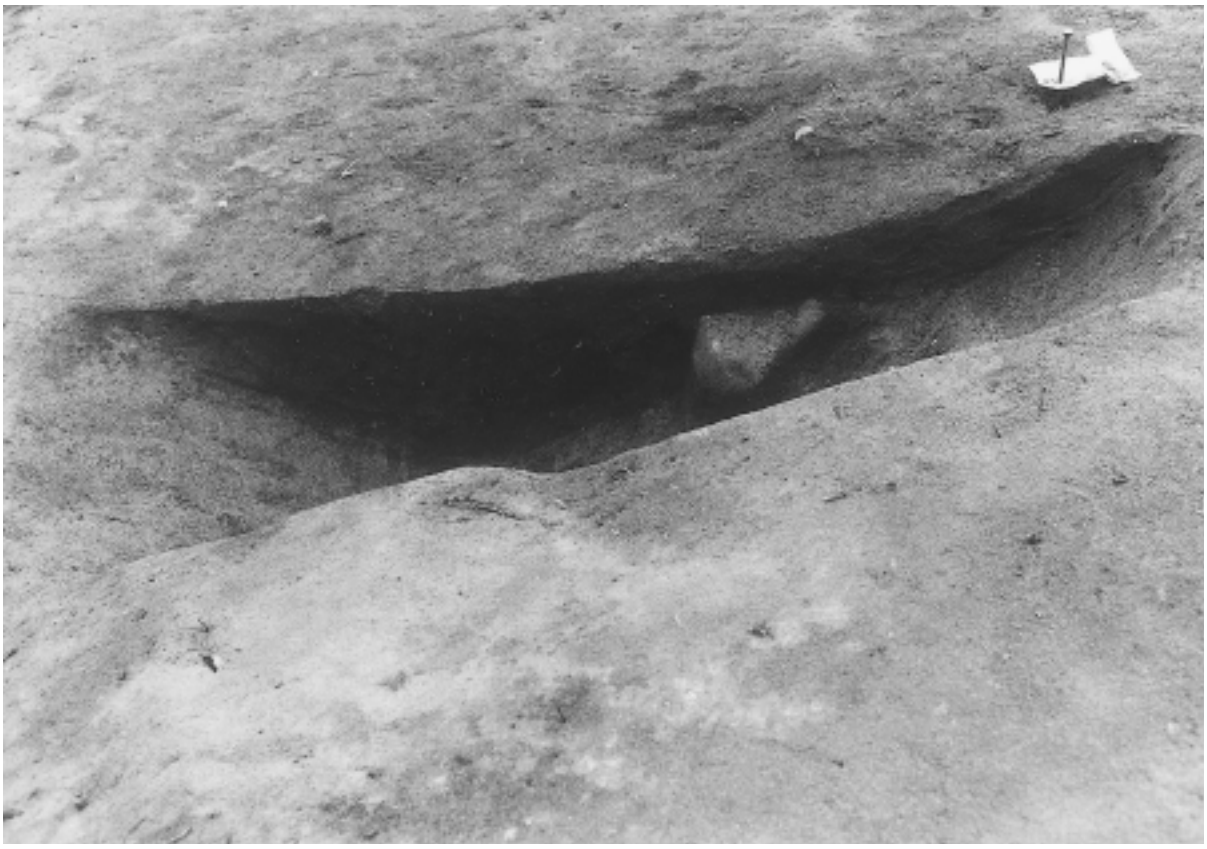


2　ＳＫ06土層（北東から）

1　ＳＫ13完掘状況（西から）

2　ＳＫ13土層（東から）

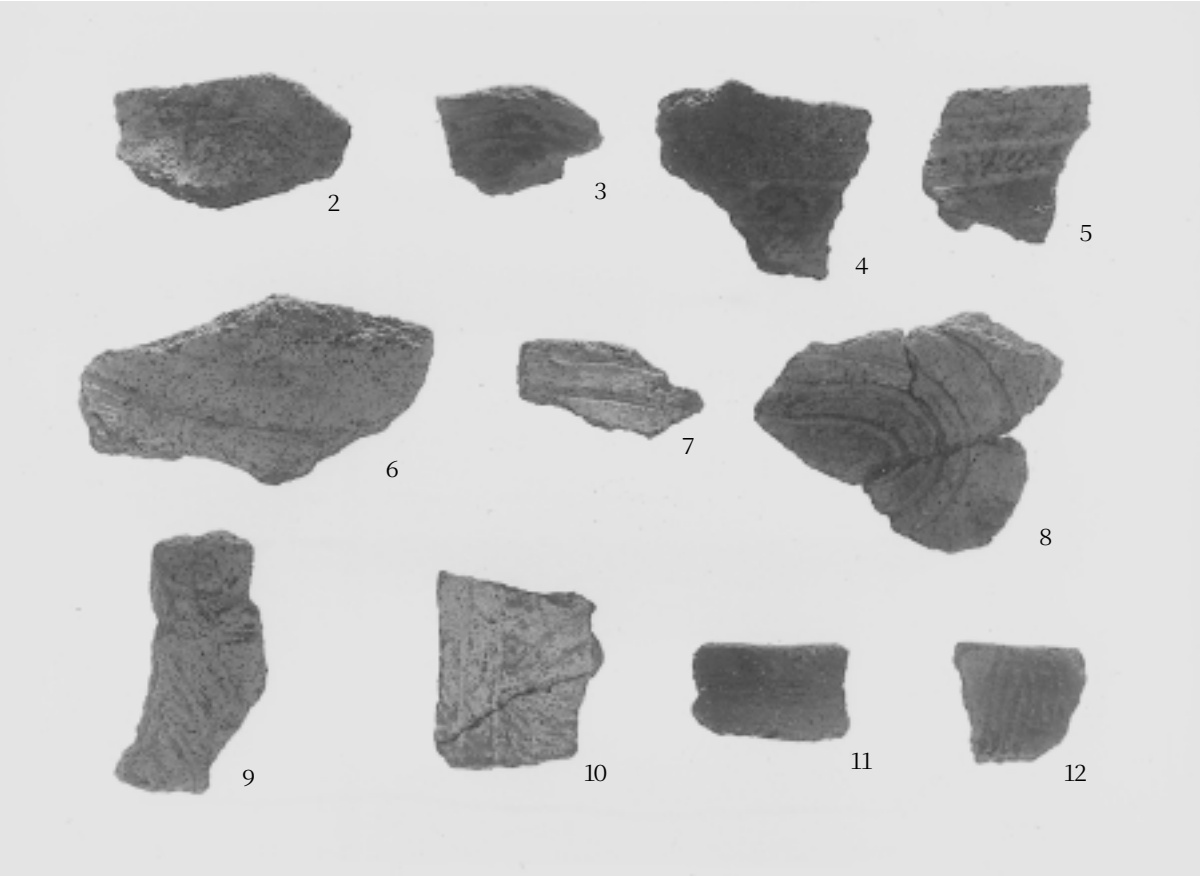
1　ＳＫ43完掘状況（南から）



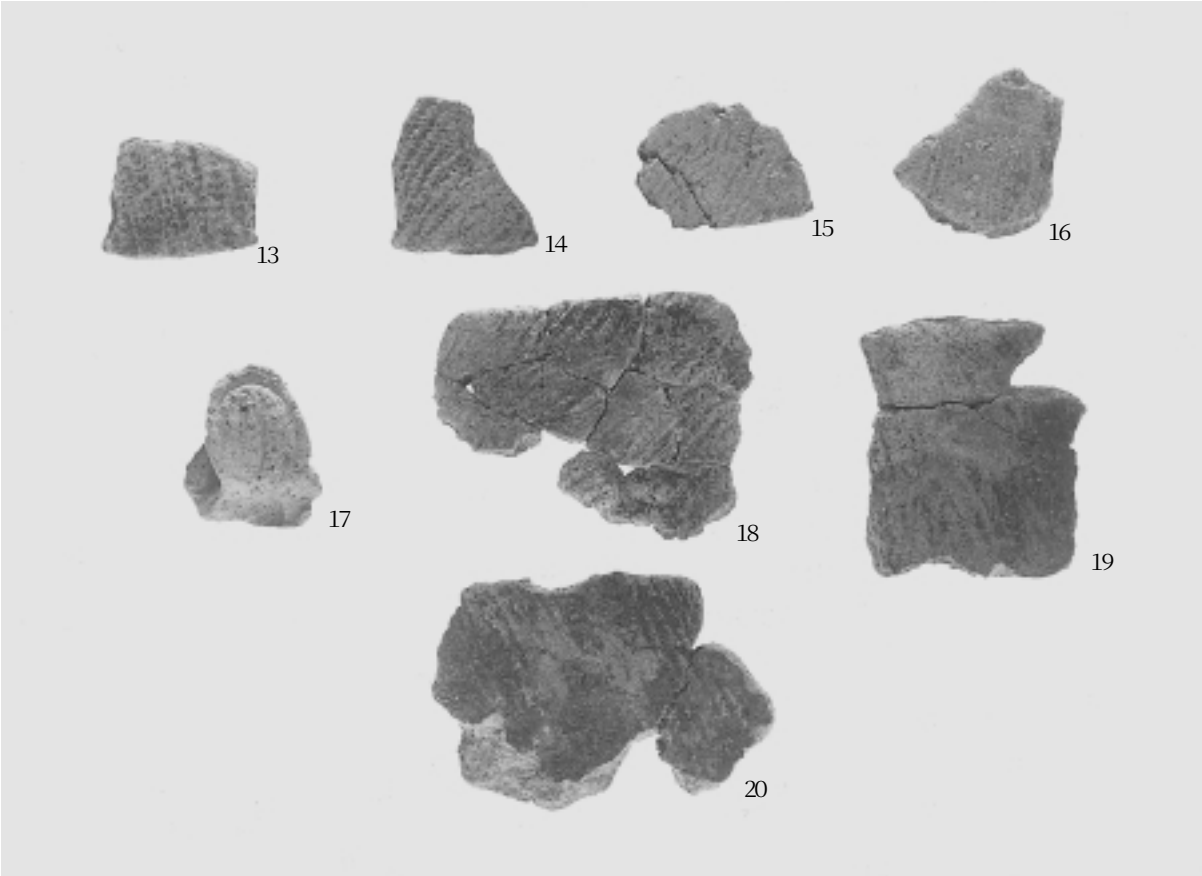
2　ＳＫ43土層（南から）

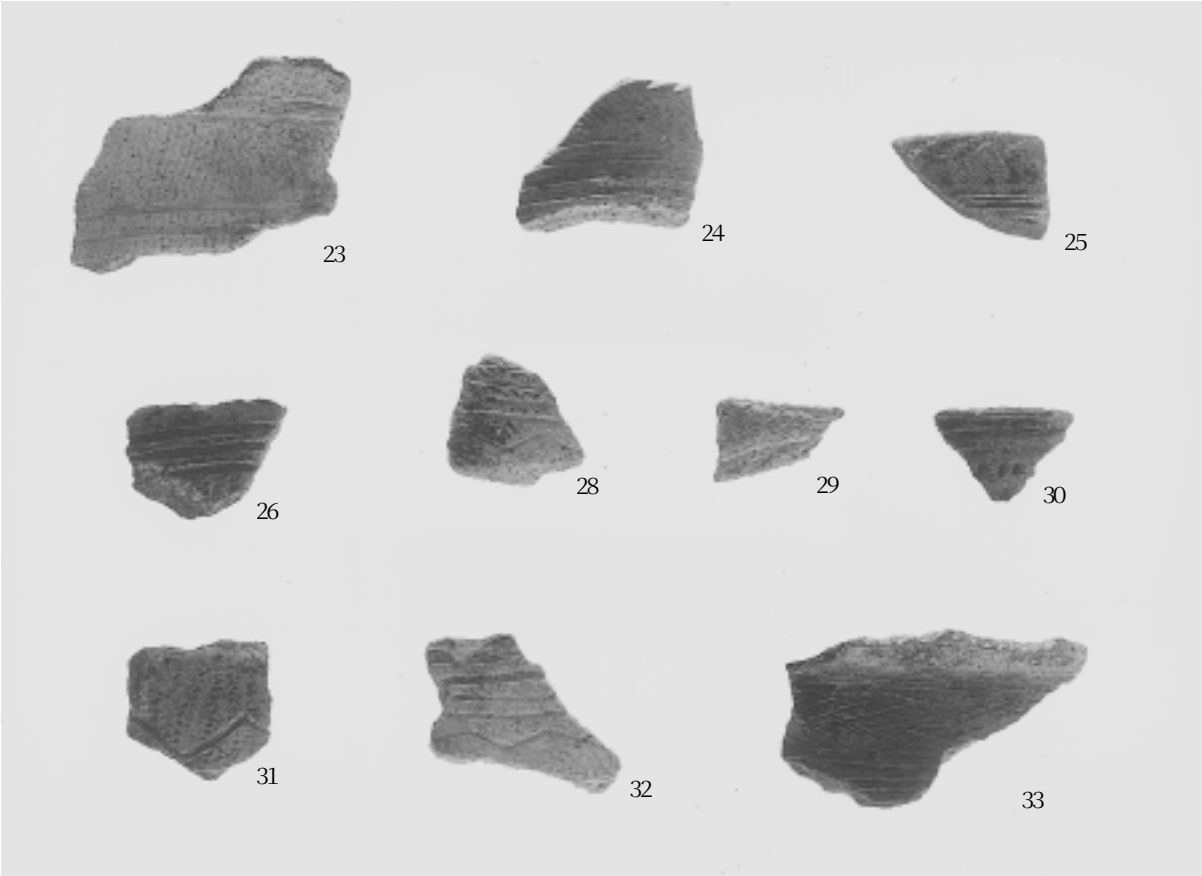
1　Ｊ区遺物出土状況（１）（西から）

2　Ｊ区遺物出土状況（２）（北東から）

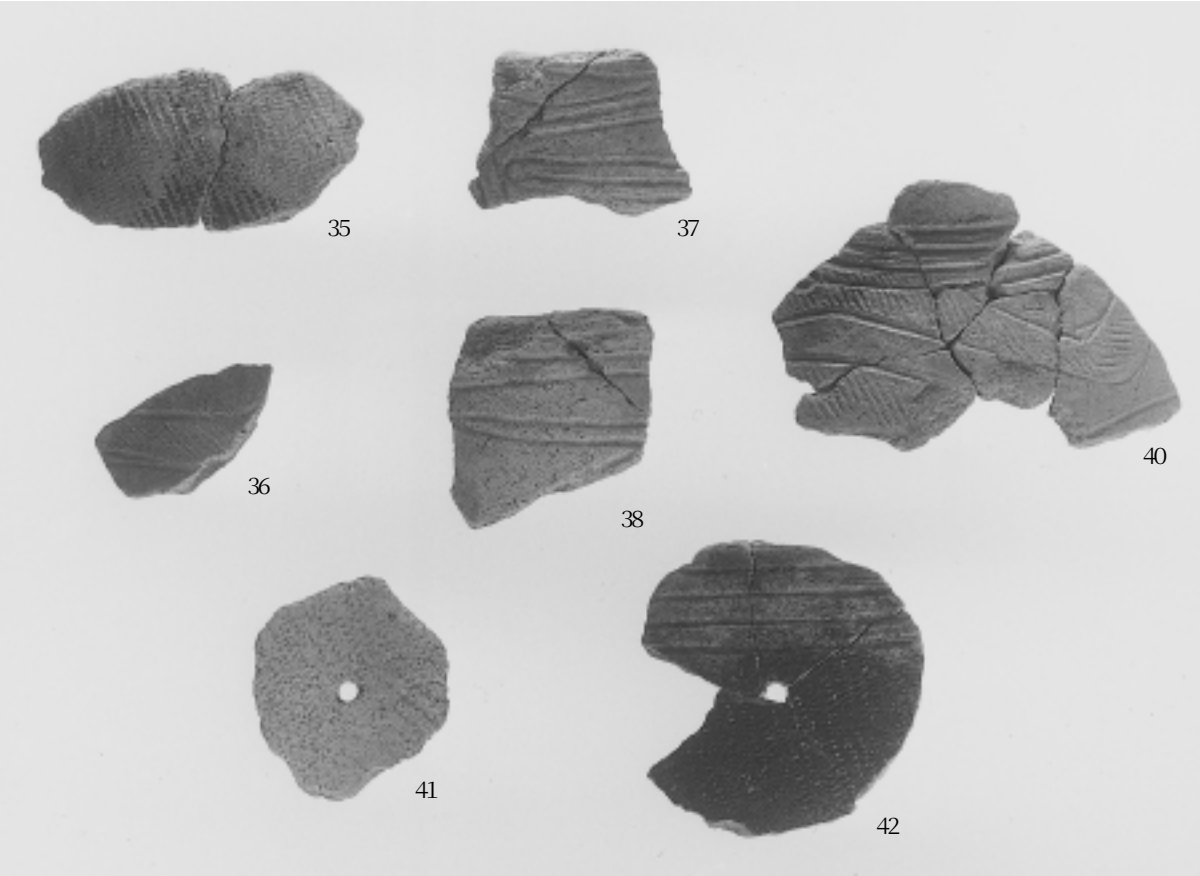


遺構内出土遺物（1）

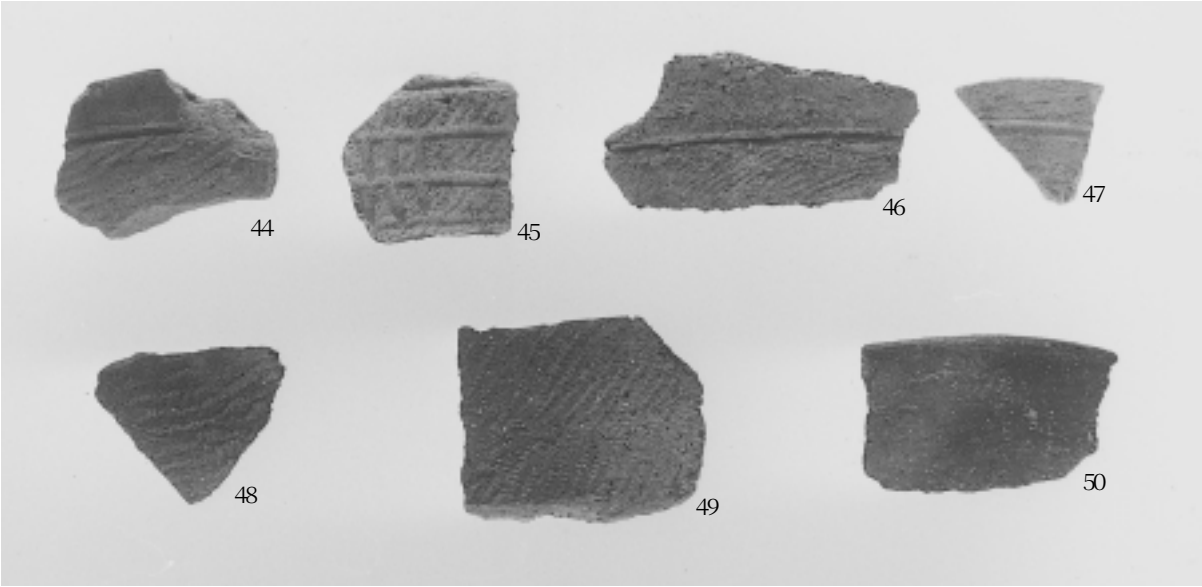




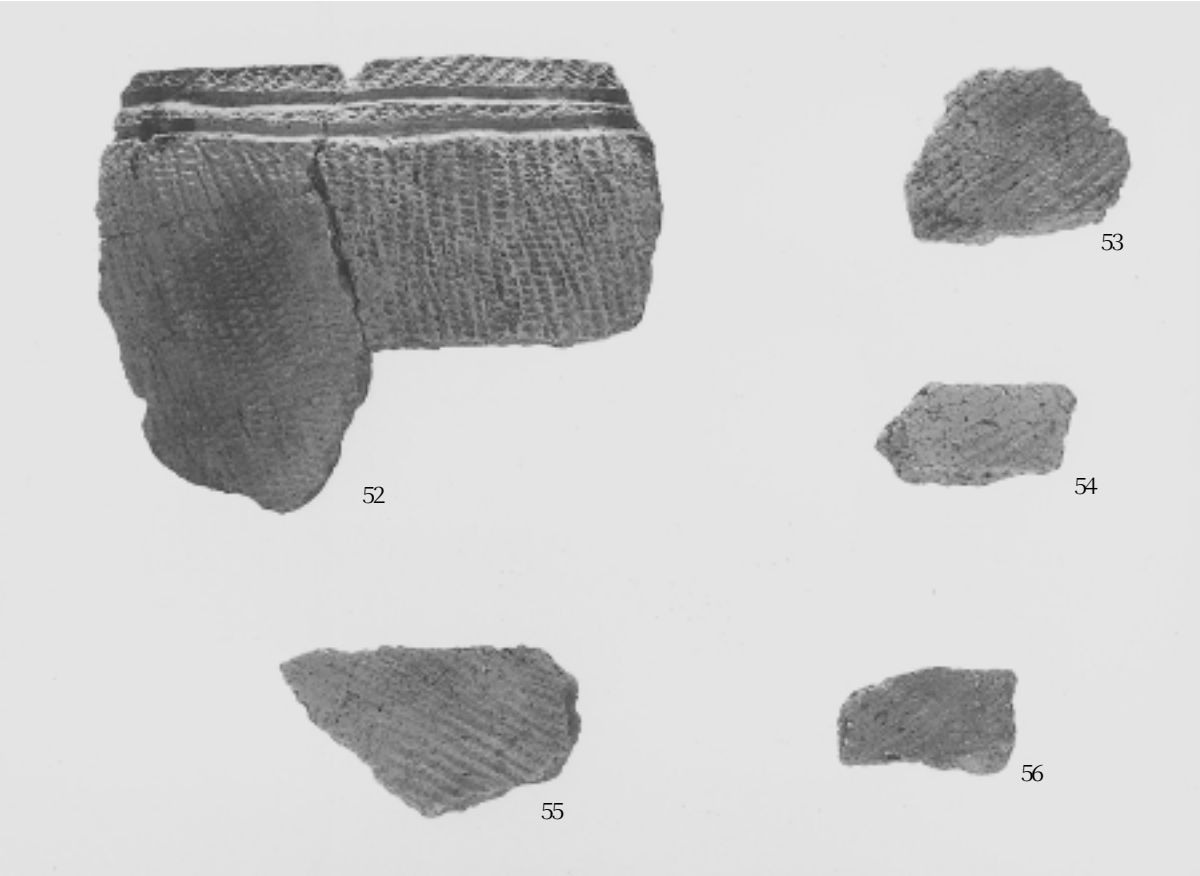
遺構内出土遺物（２）



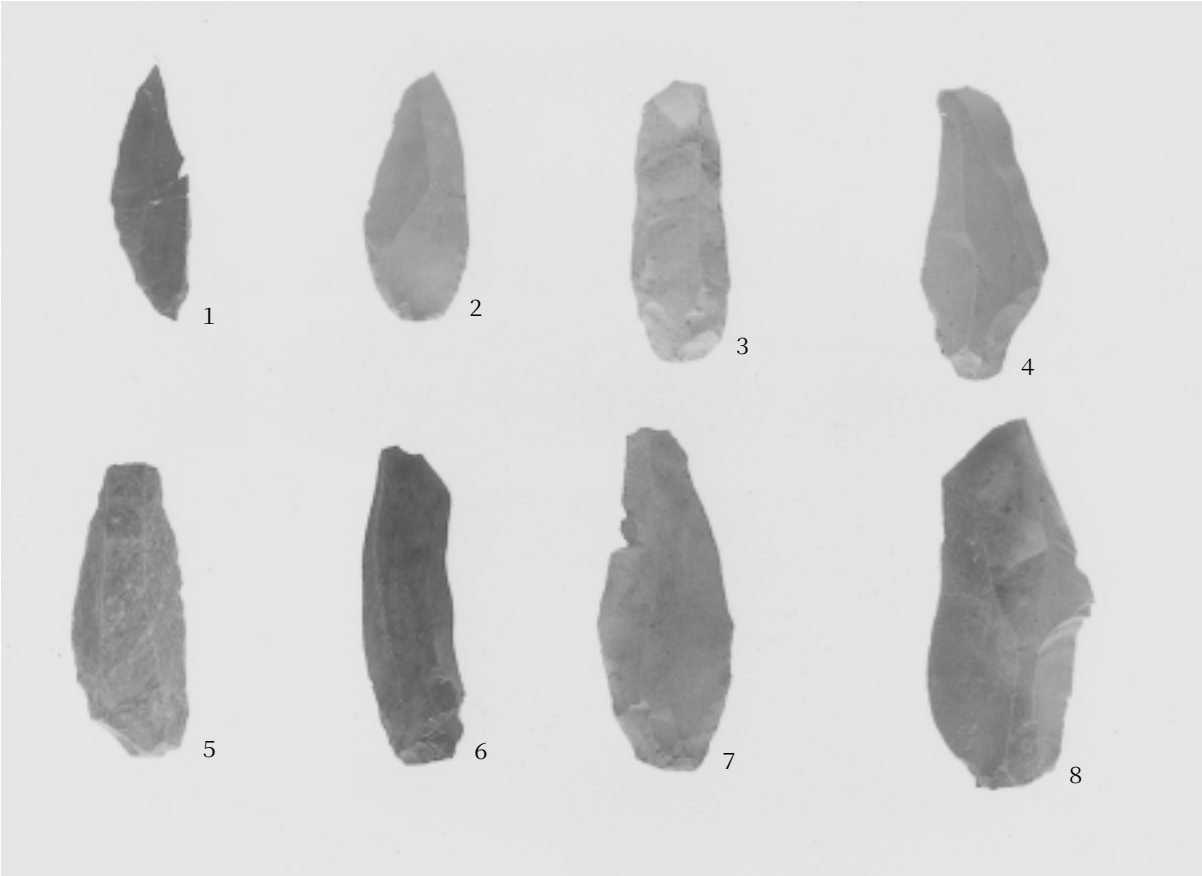
遺構内出土遺物（３）



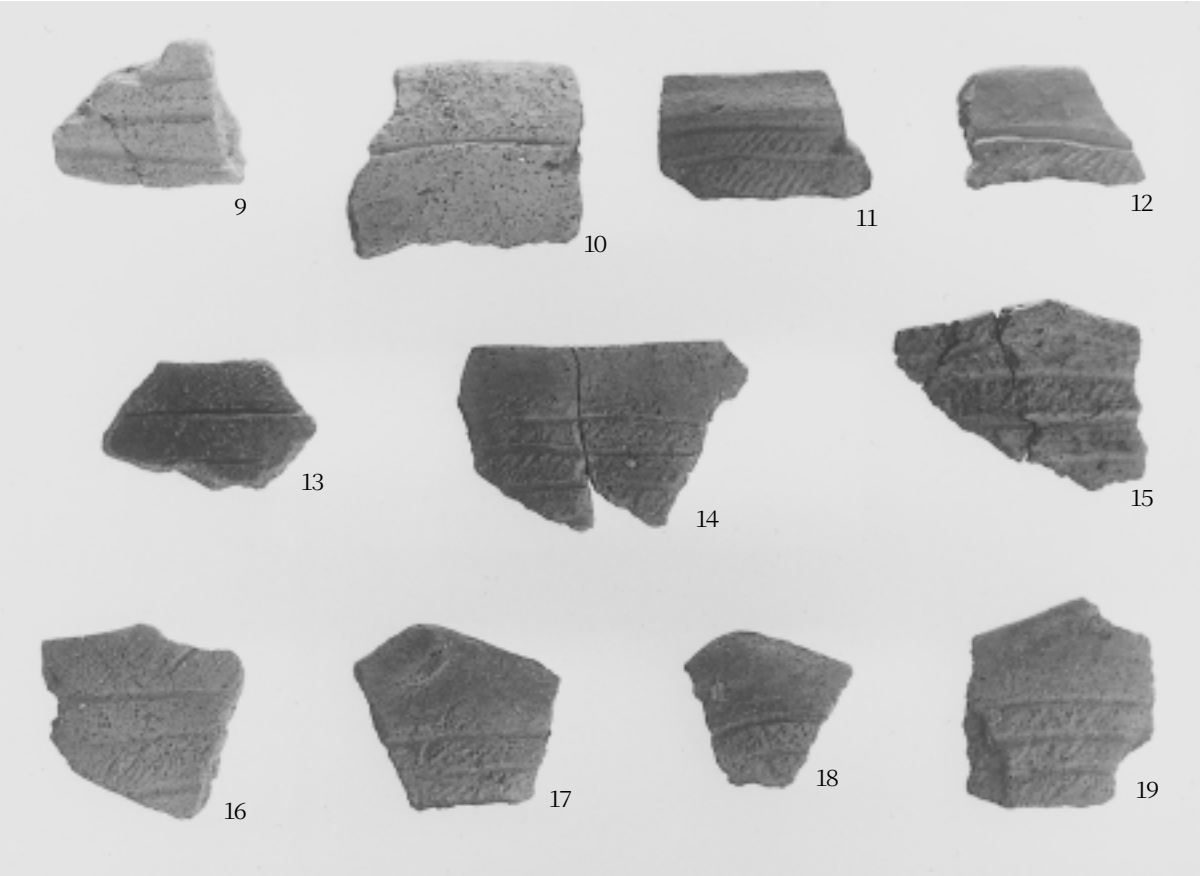
遺構内出土遺物（４）

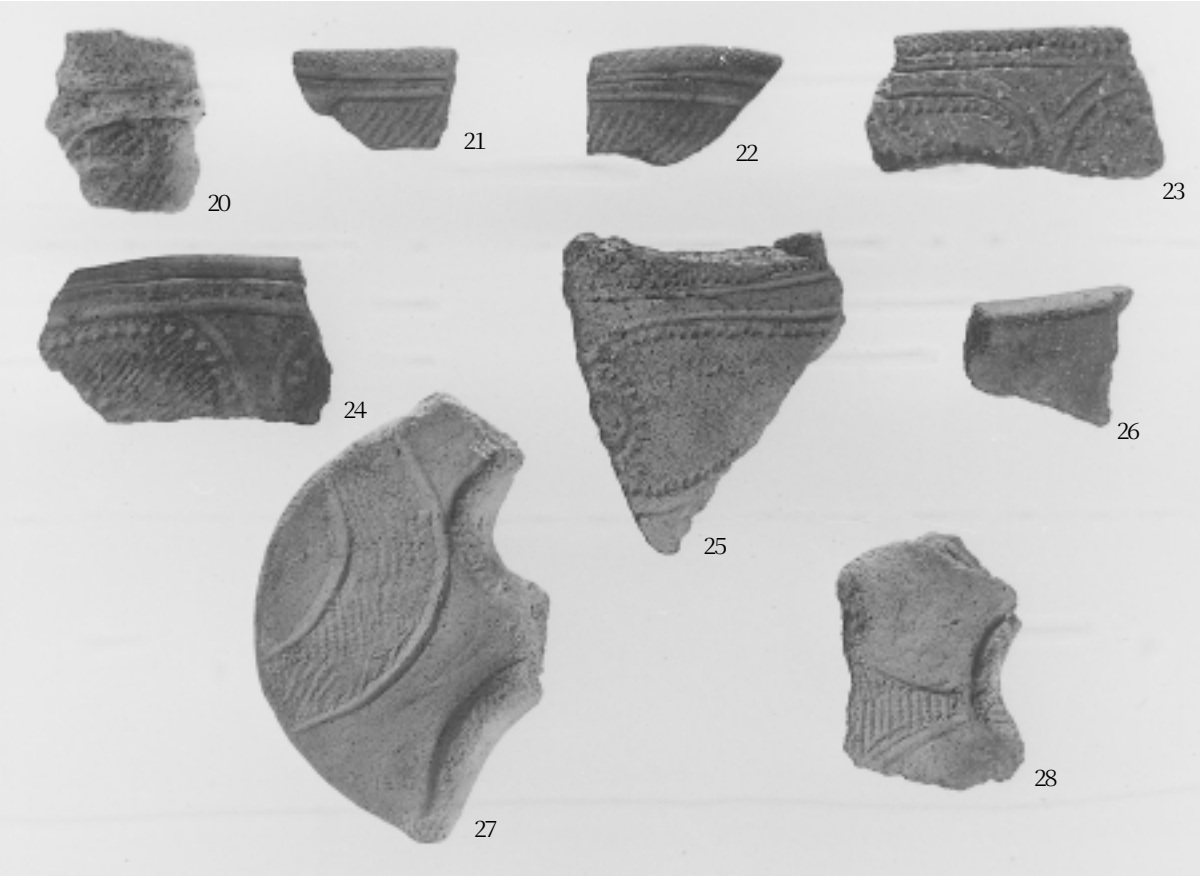


遺構内出土遺物（５）

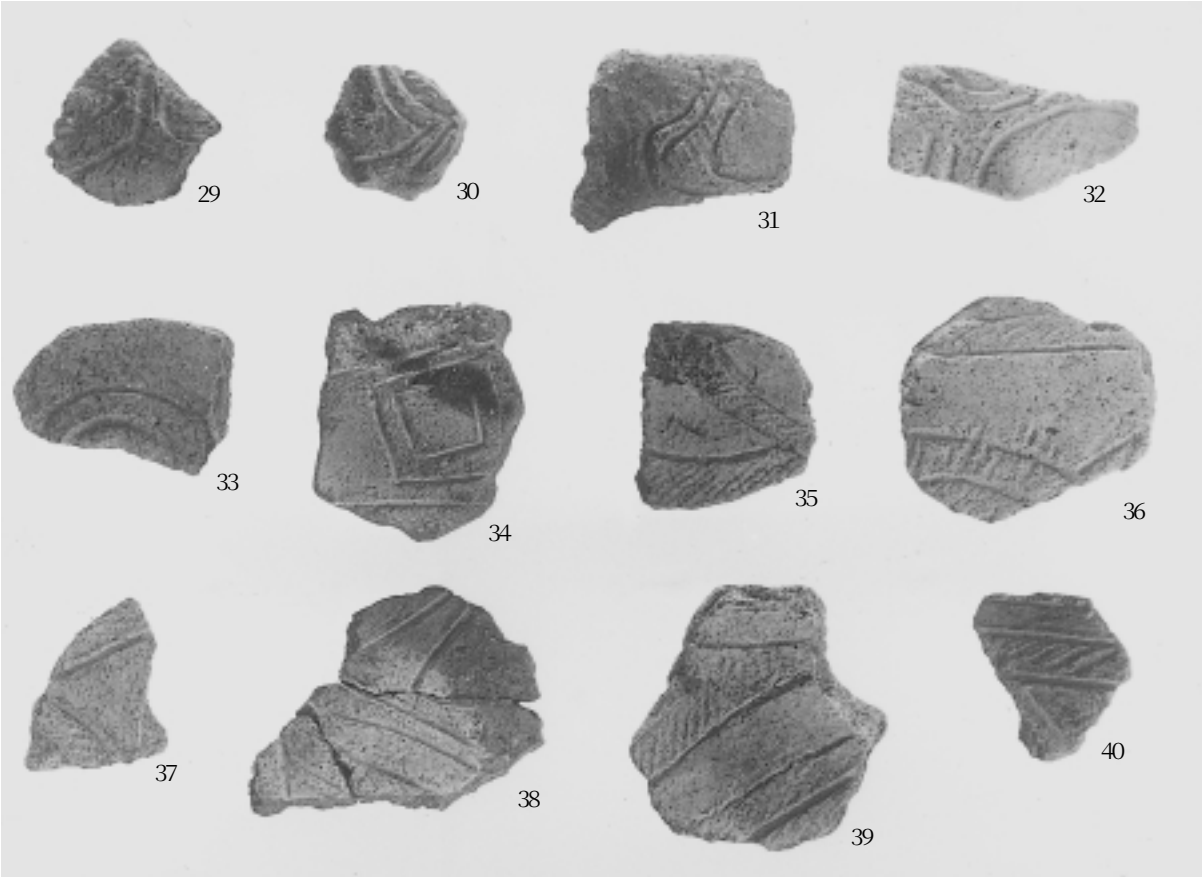


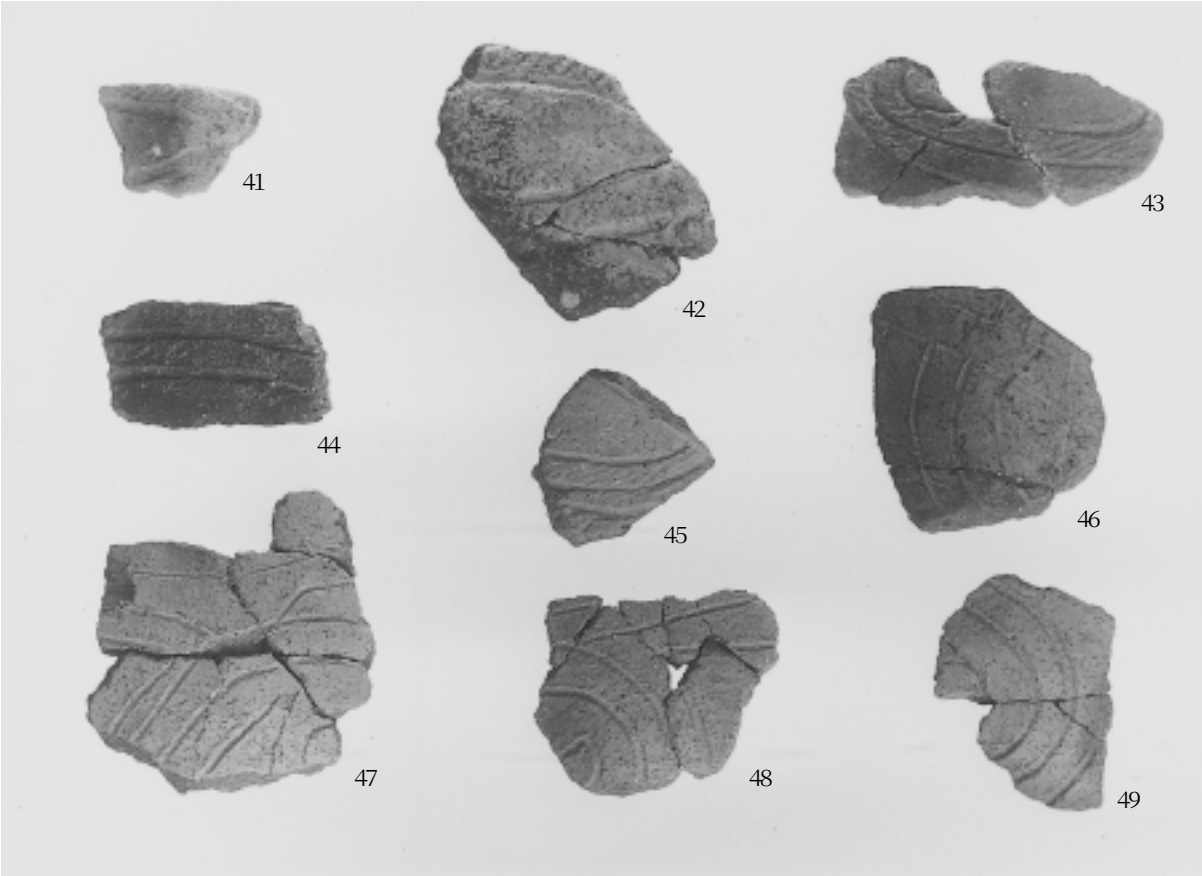
遺構外出土遺物（1）



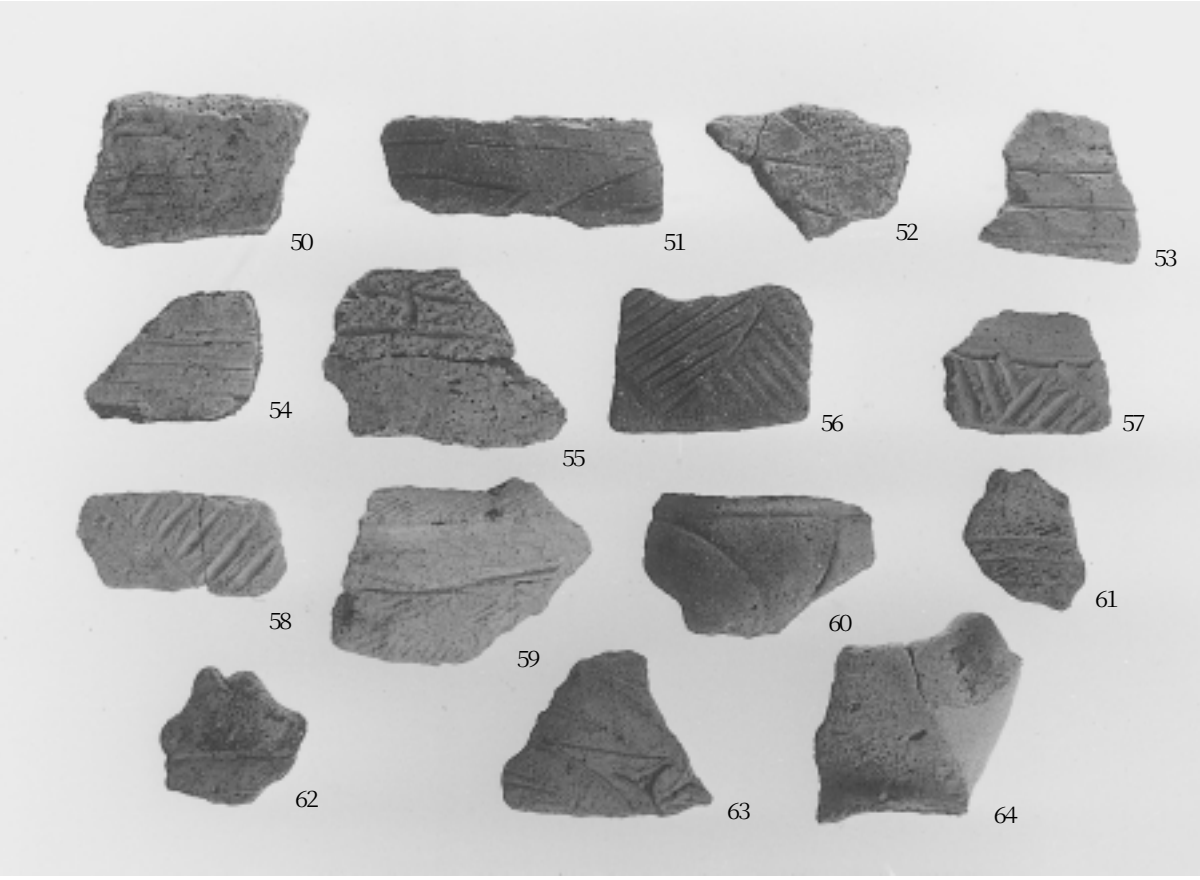


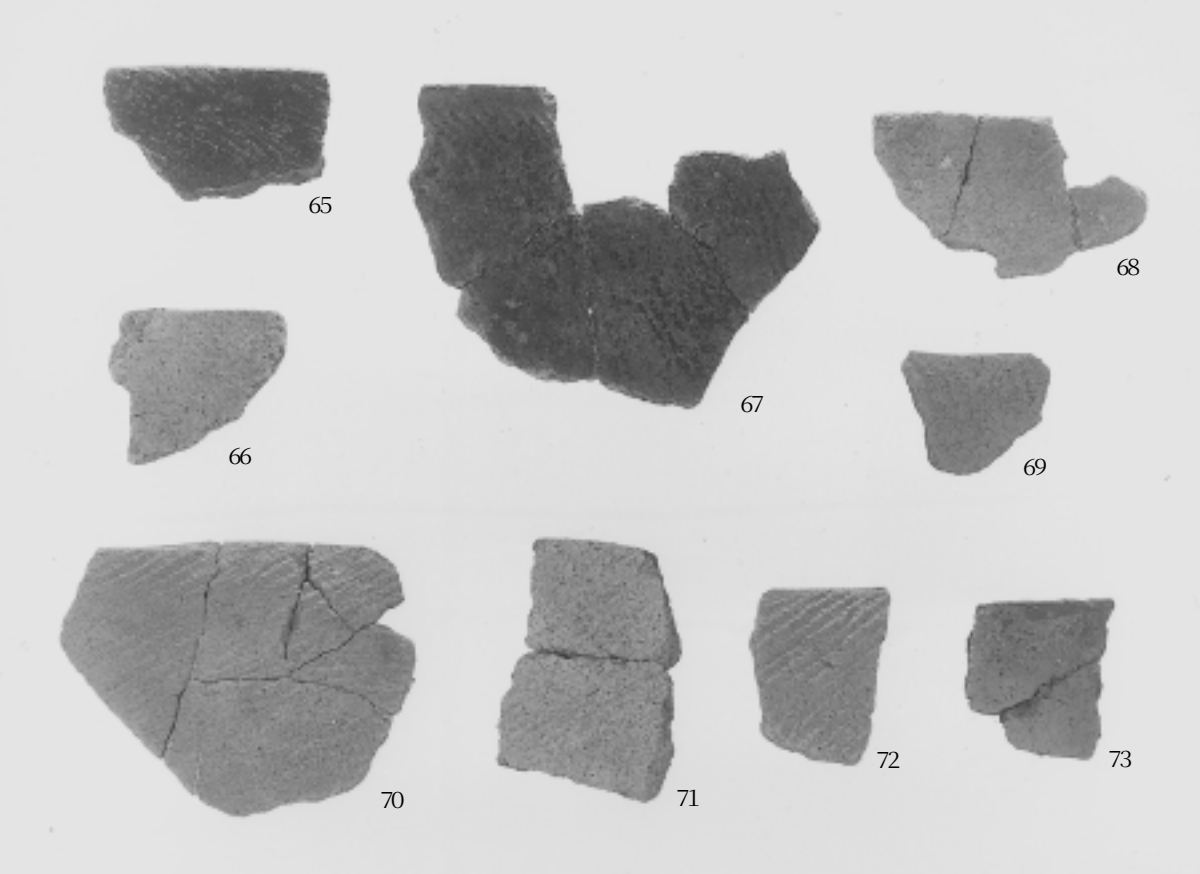
遺構外出土遺物（２）



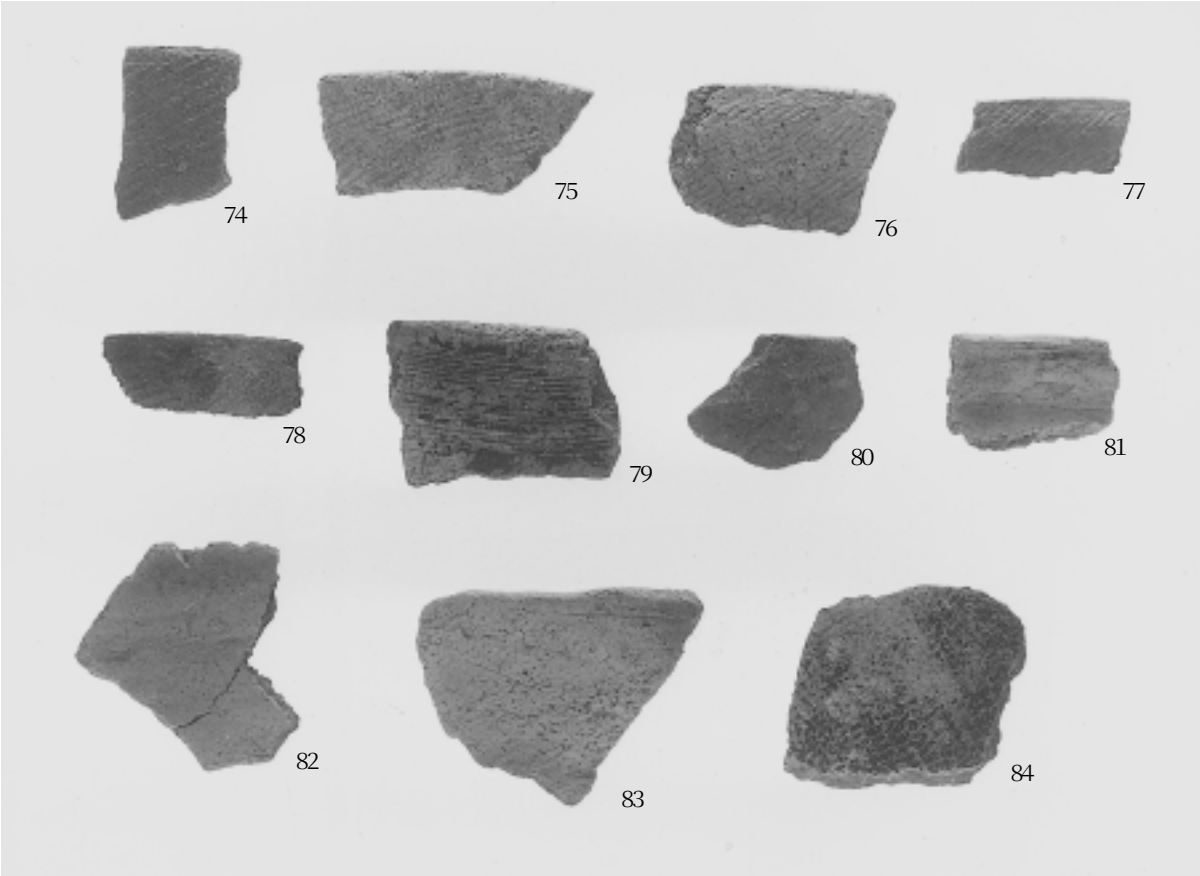


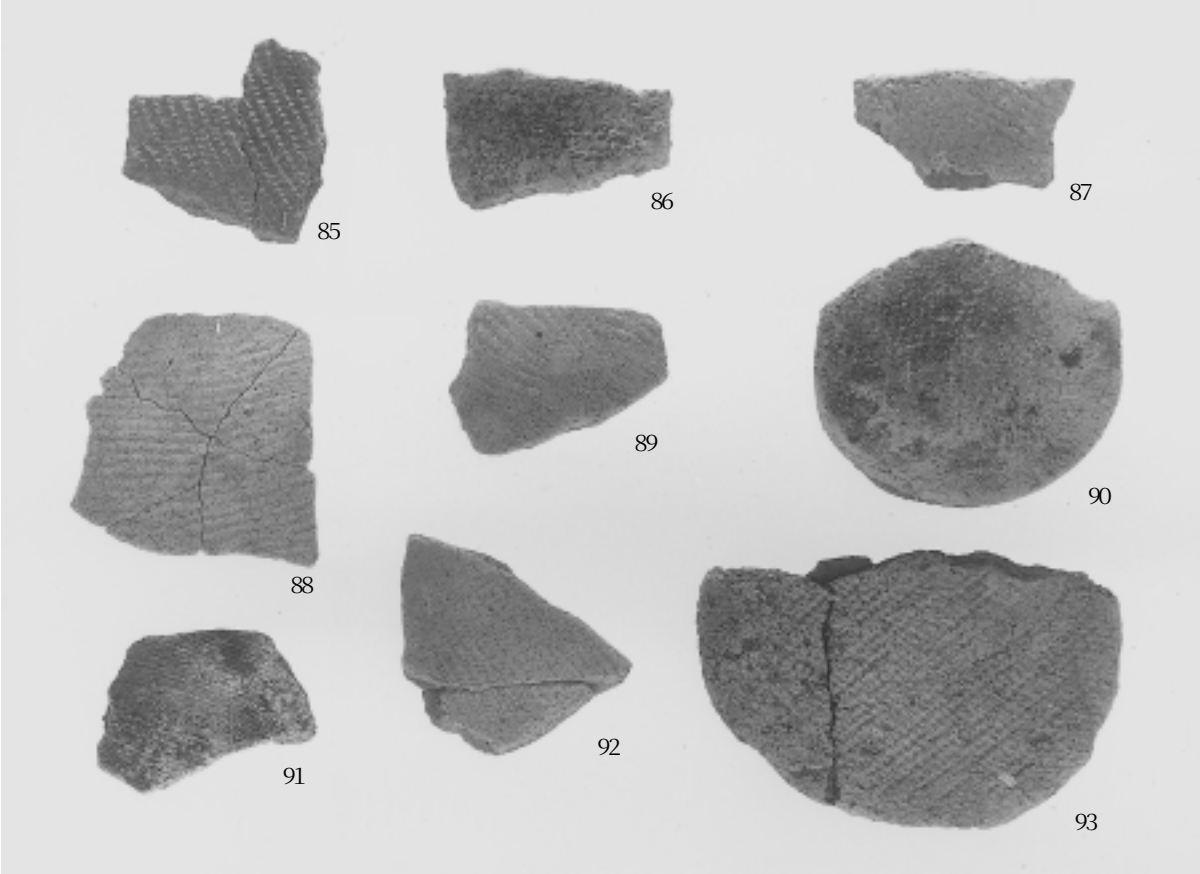
遺構外出土遺物（3）



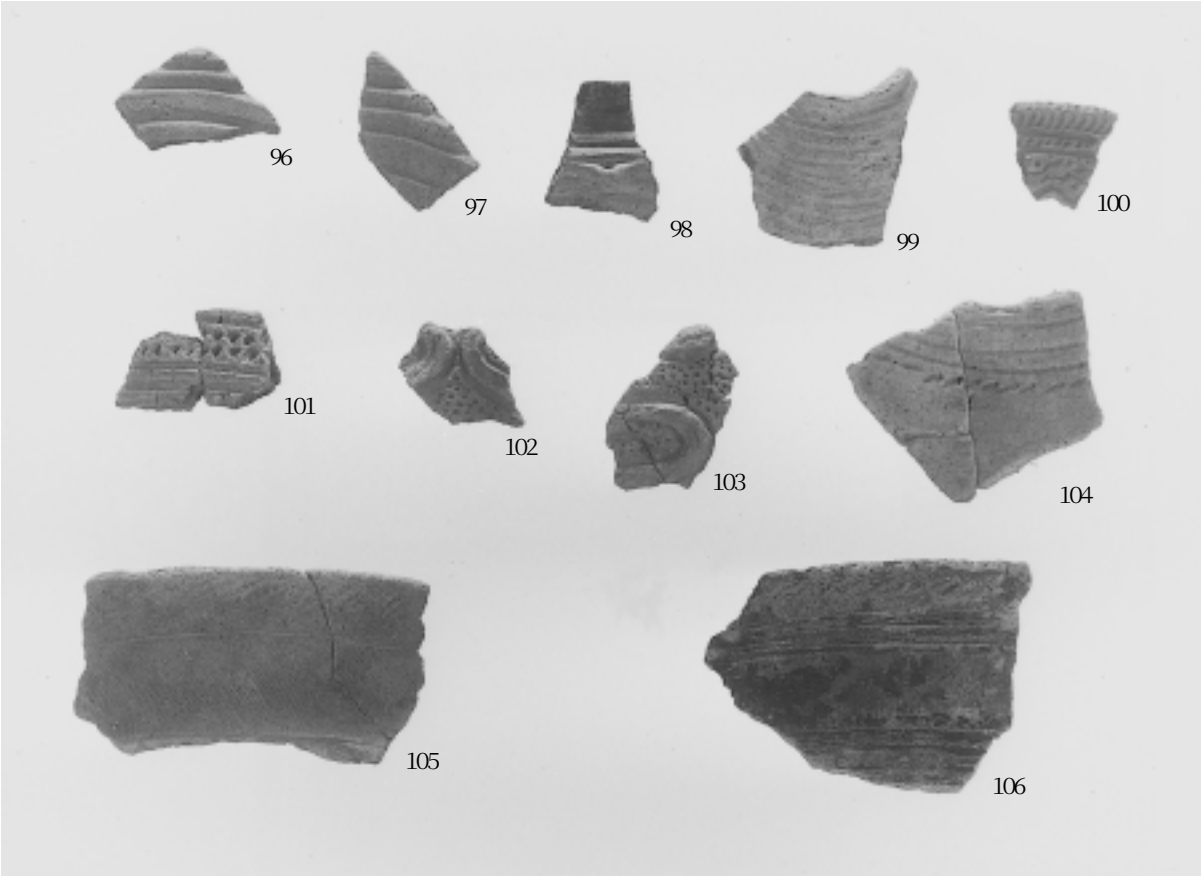


遺構外出土遺物（4）

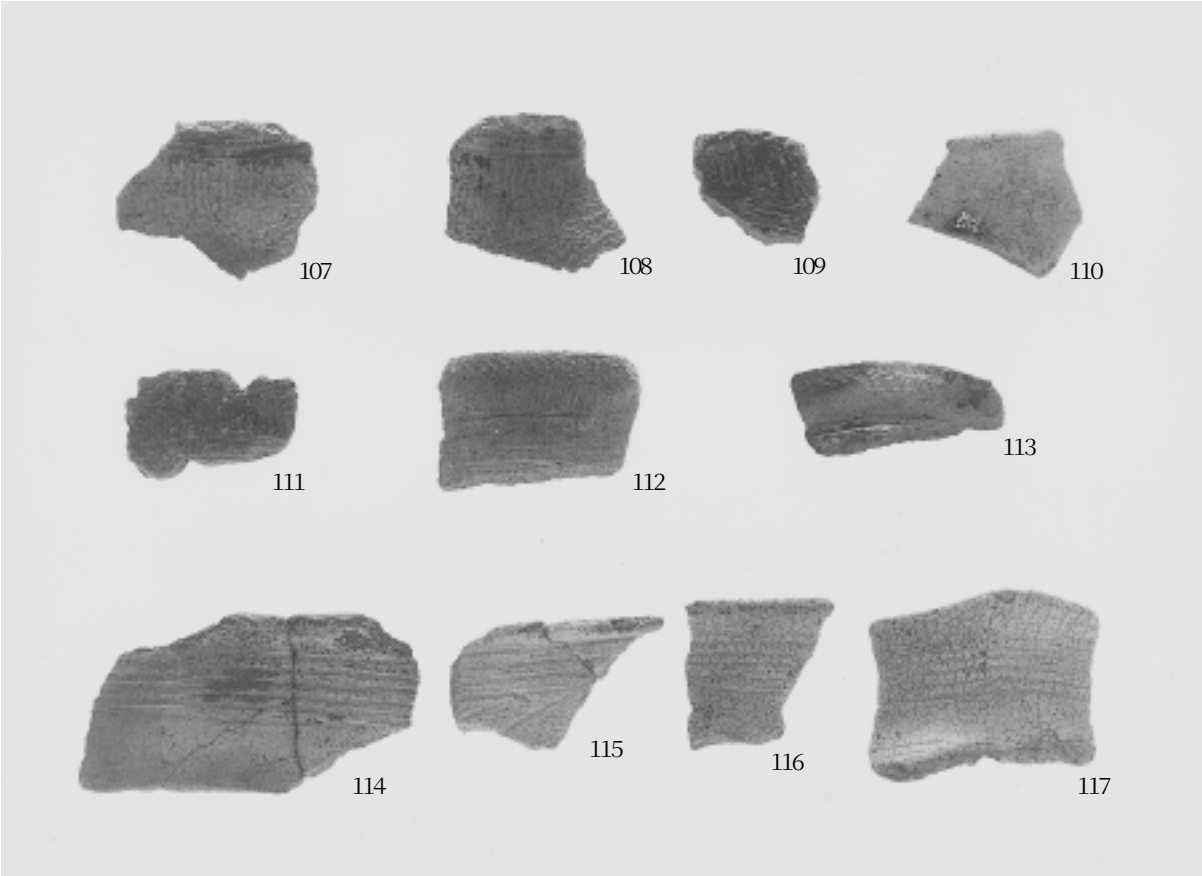


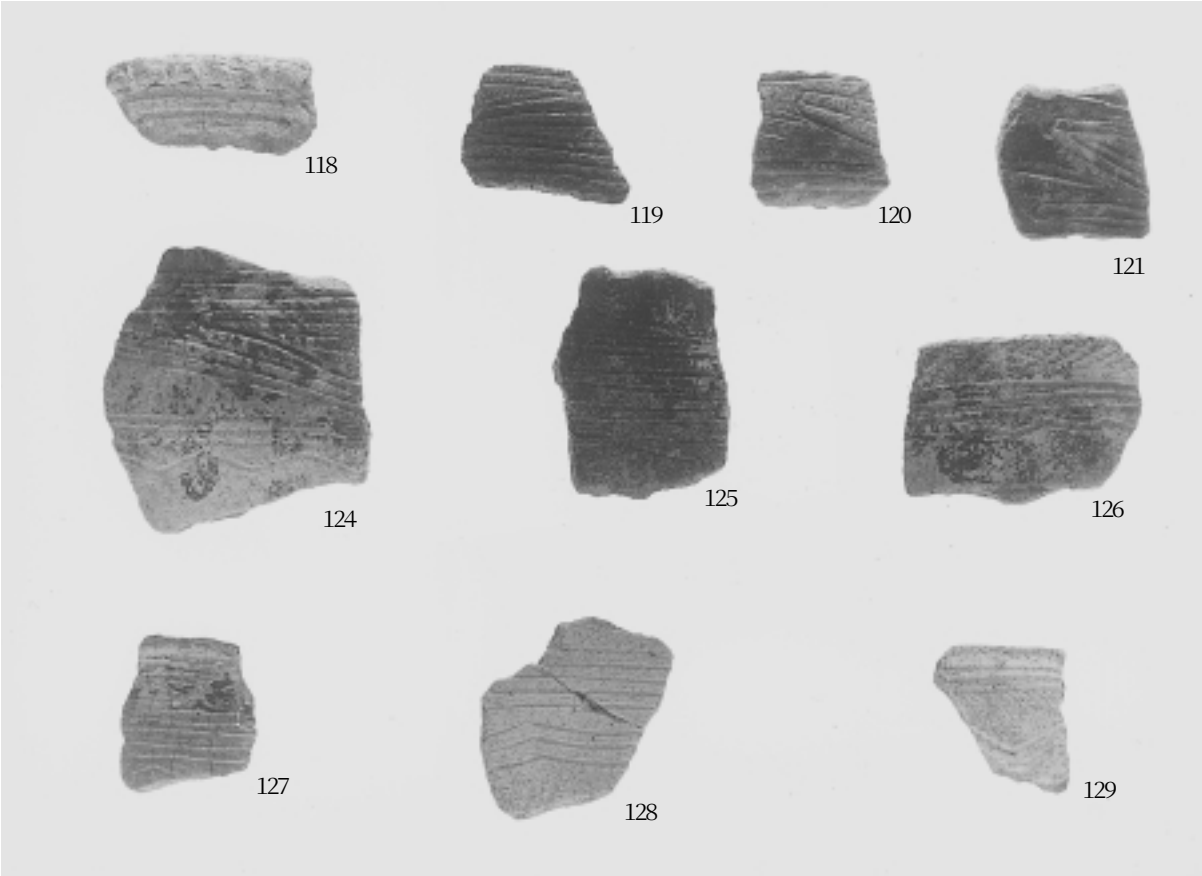


遺構外出土遺物（５）

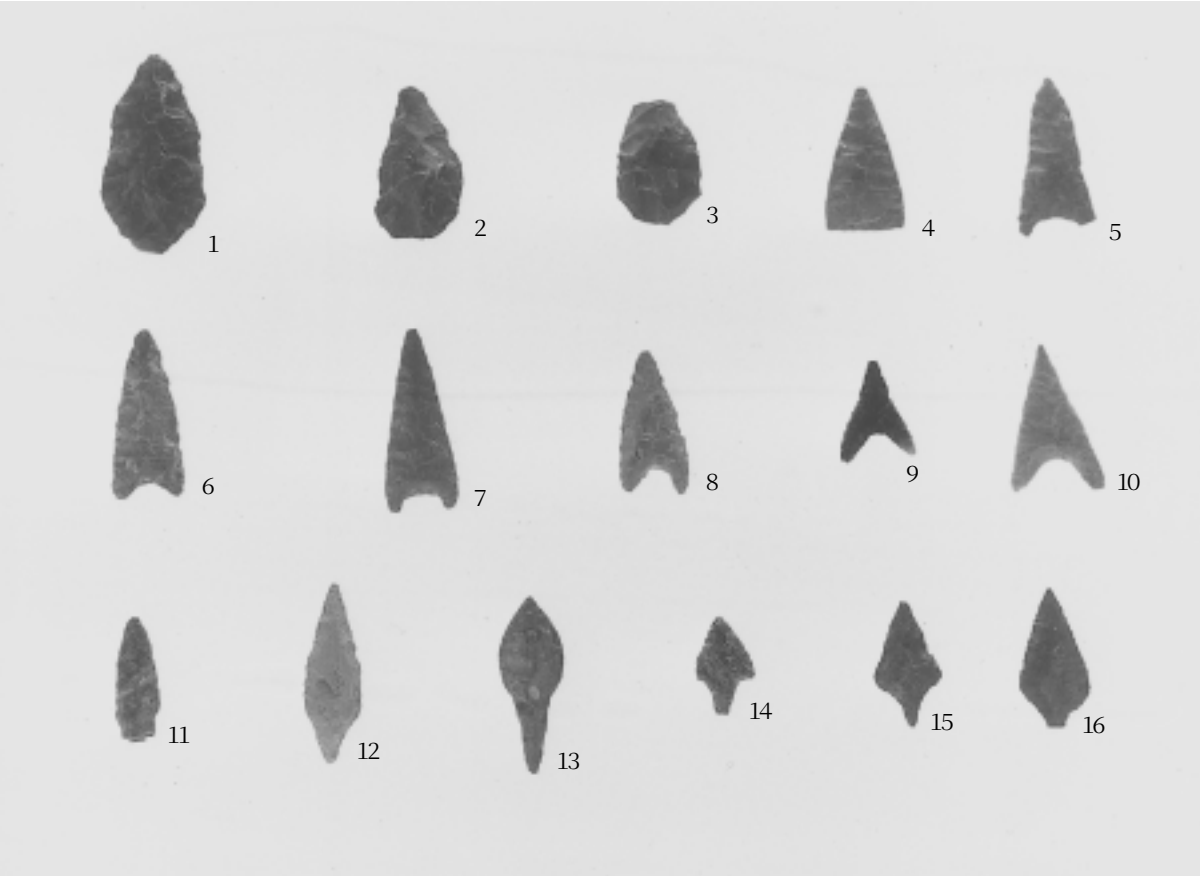


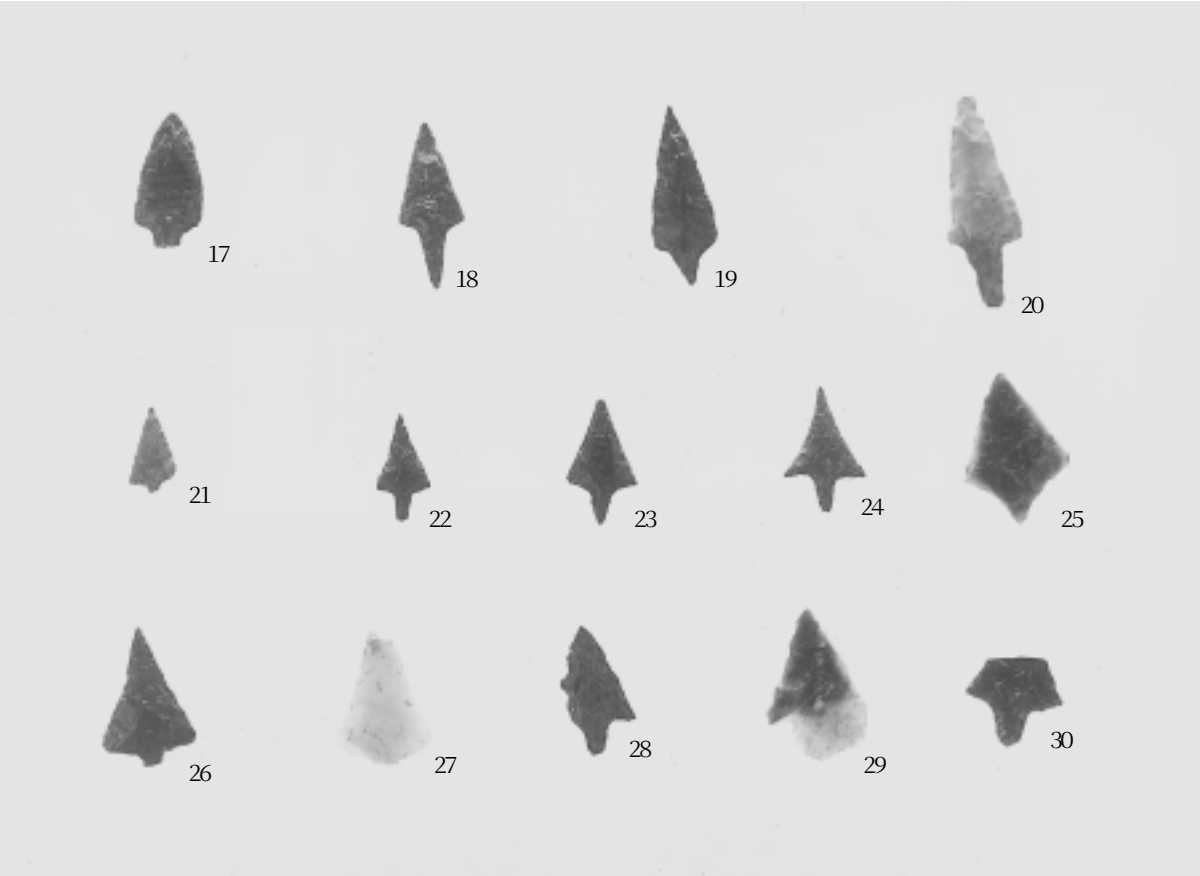
遺構外出土遺物（6）


107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117

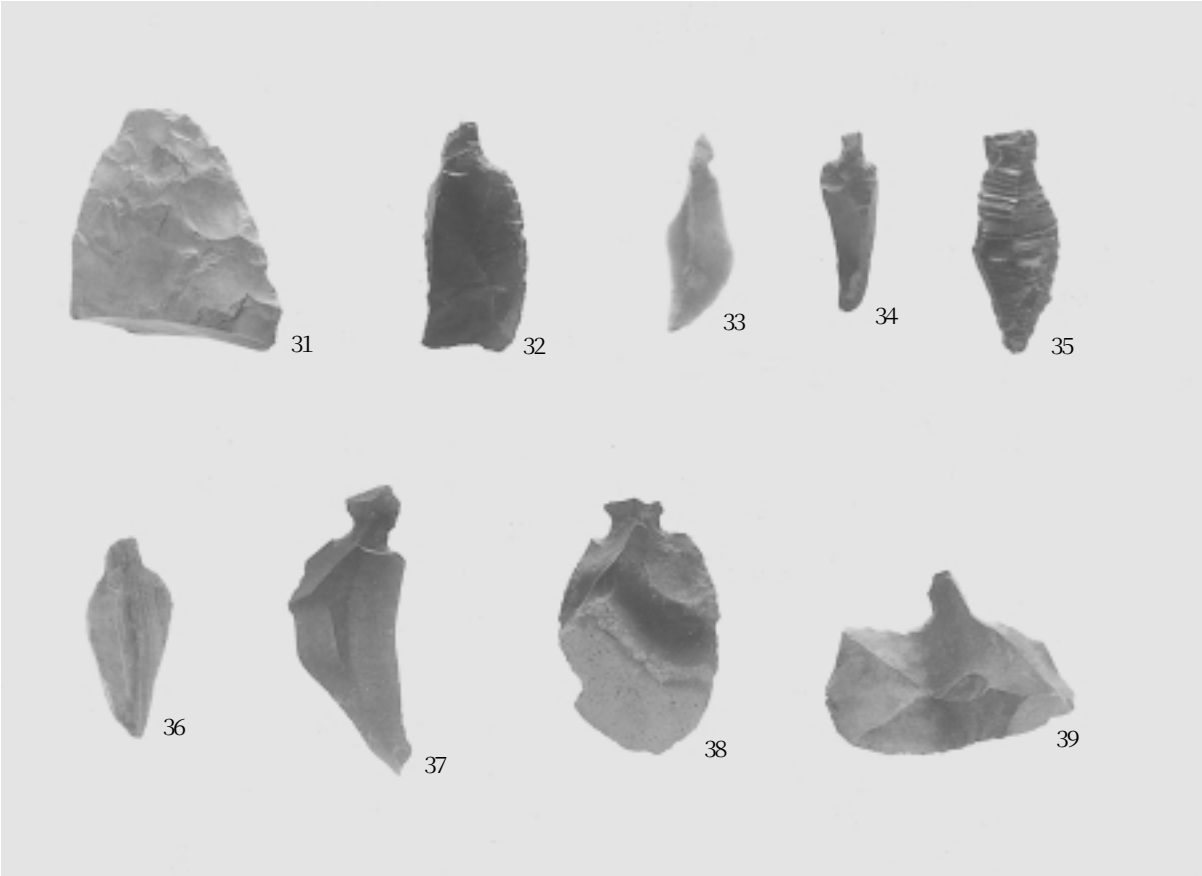

118
119
120
121
124
125
126
127
128
129

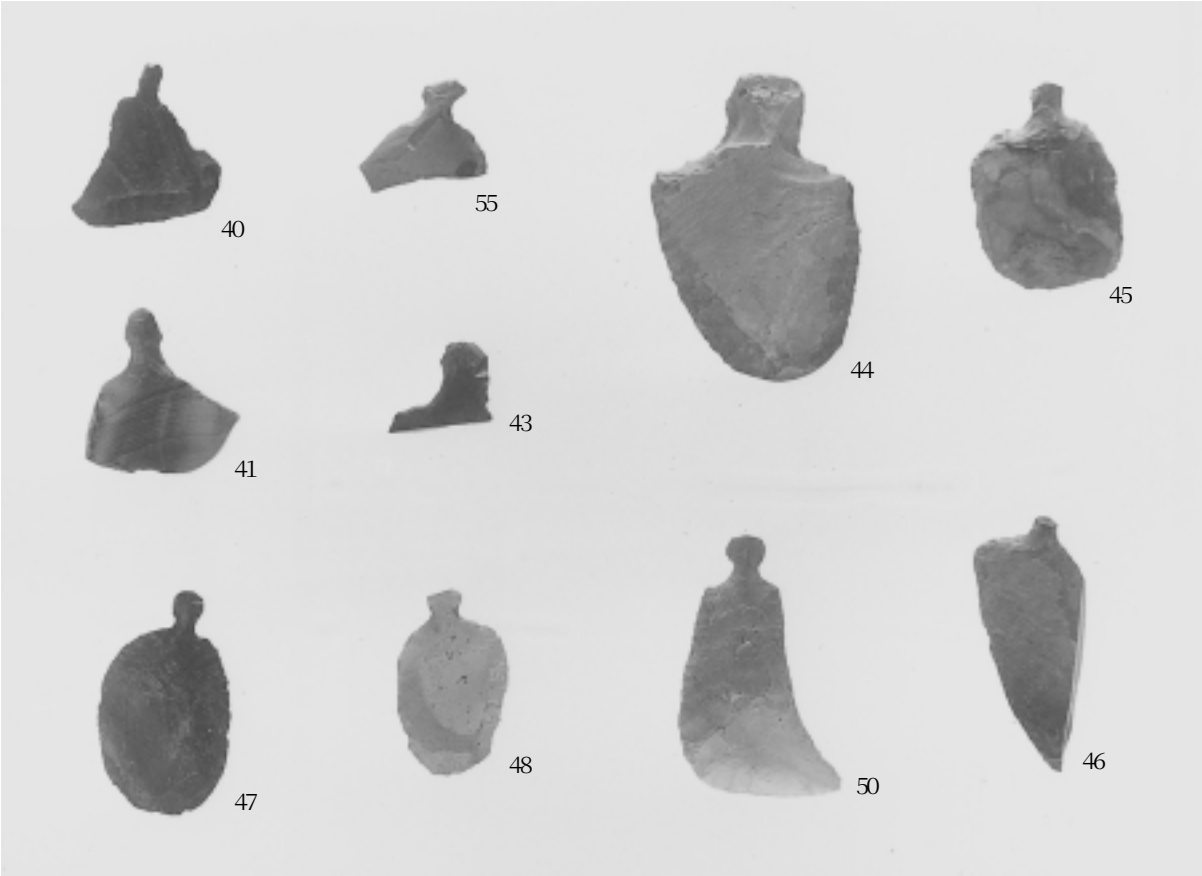
遺構外出土遺物（７）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16

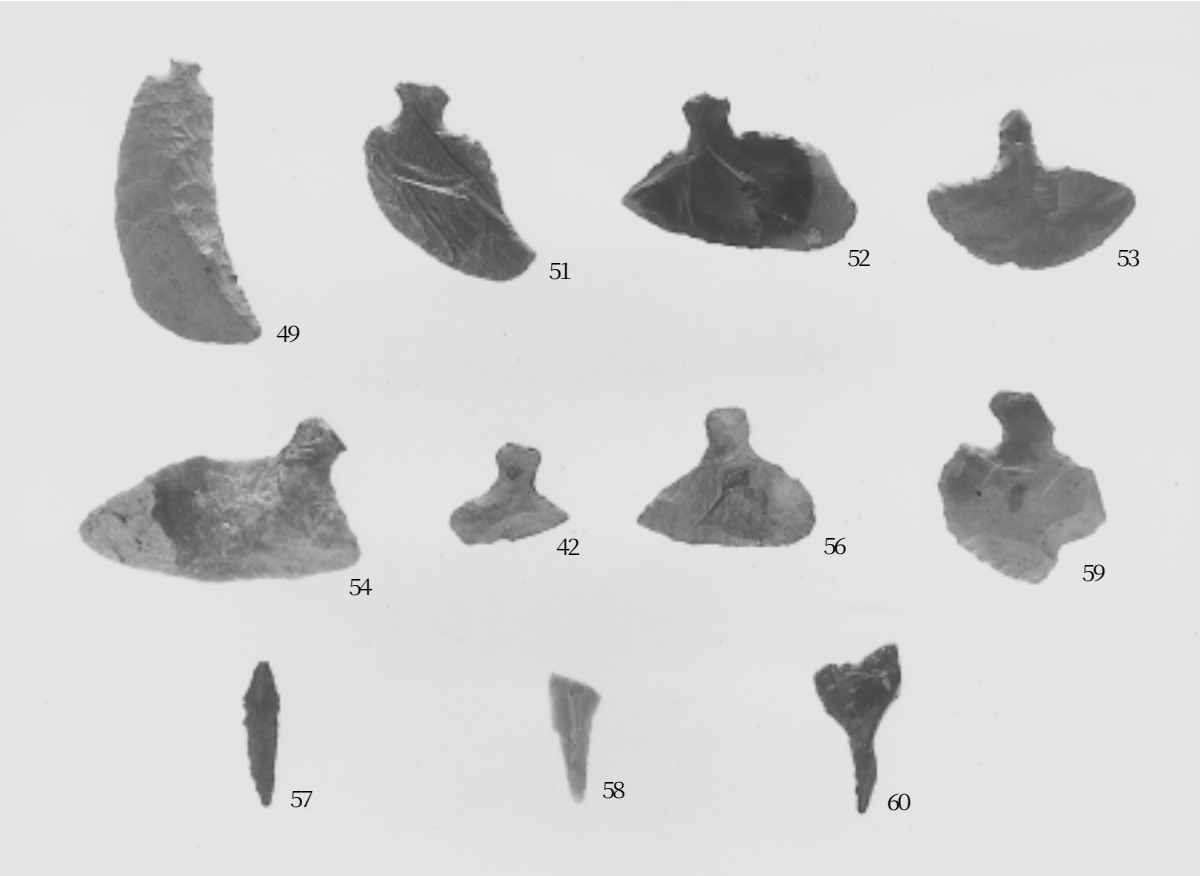

17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

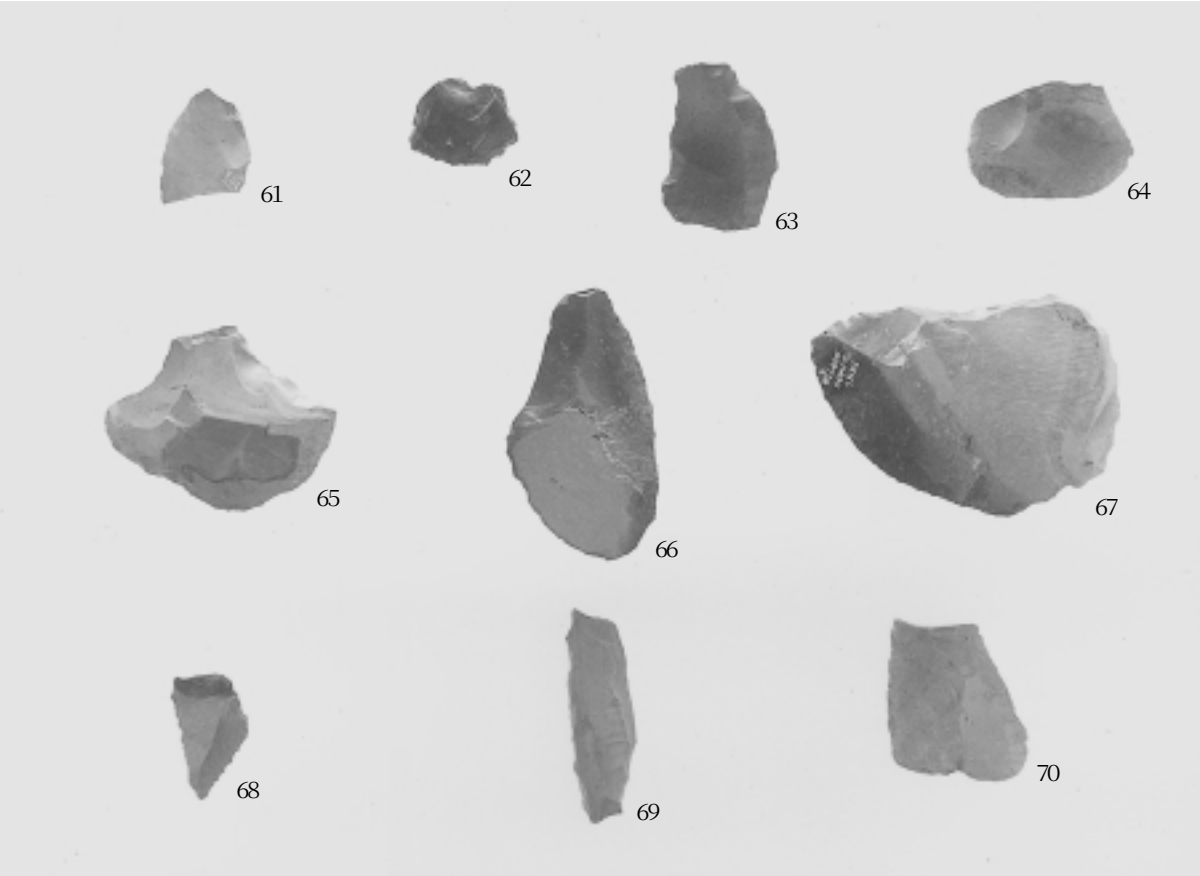
遺構外出土遺物（８）



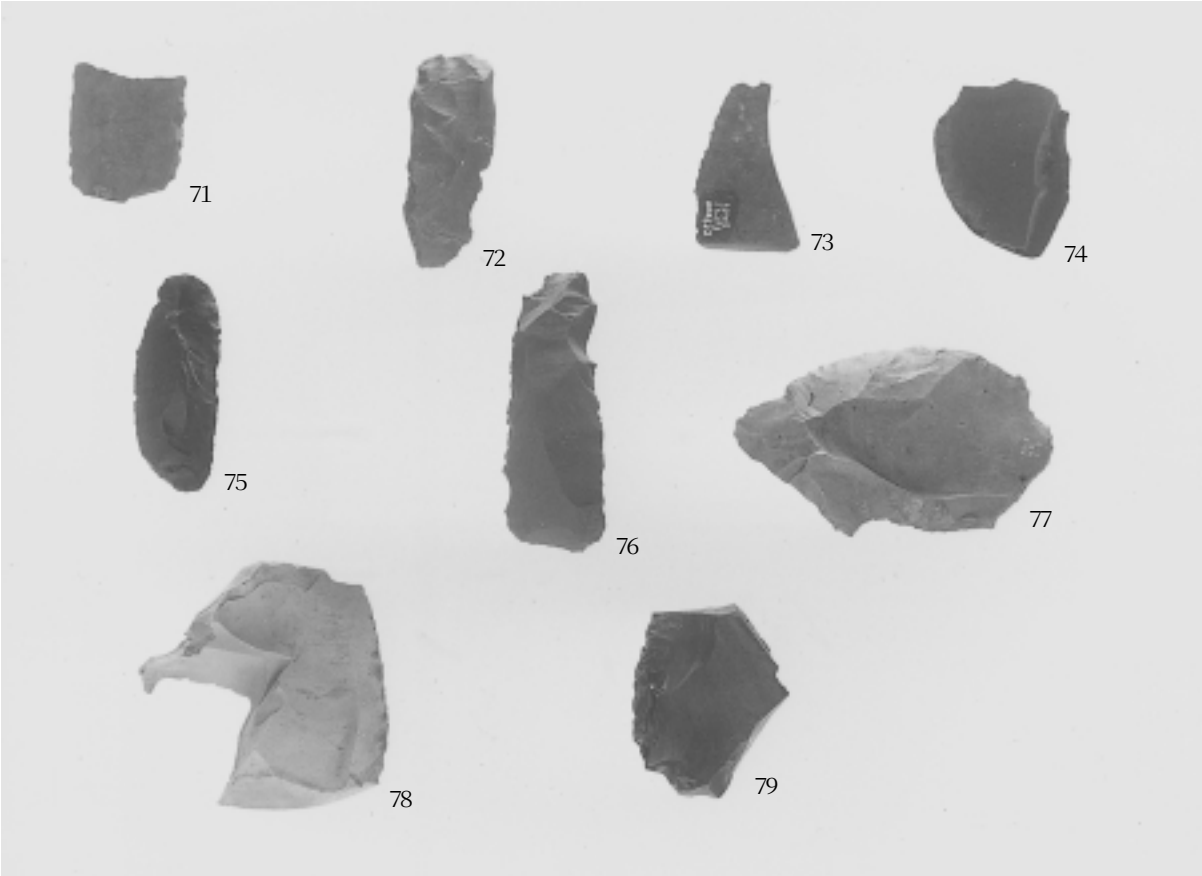


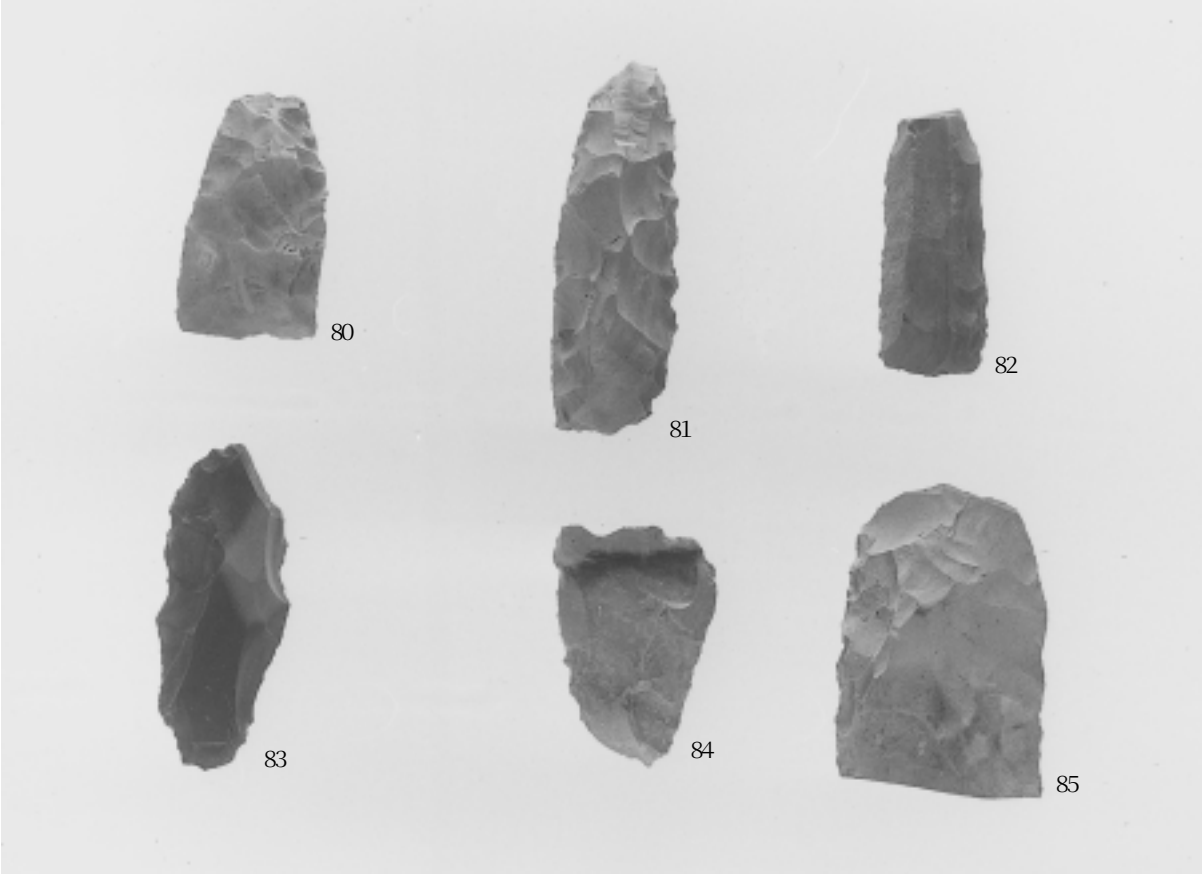
遺構外出土遺物（９）



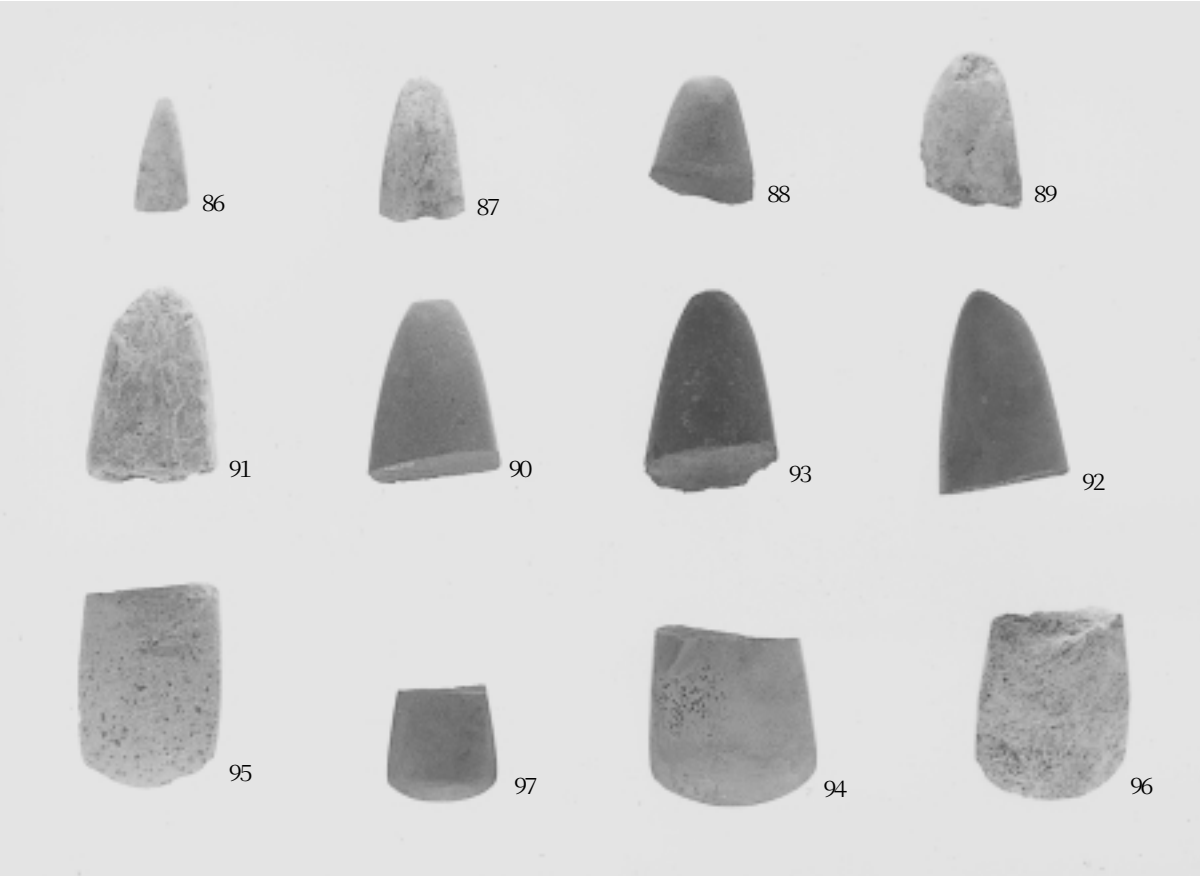


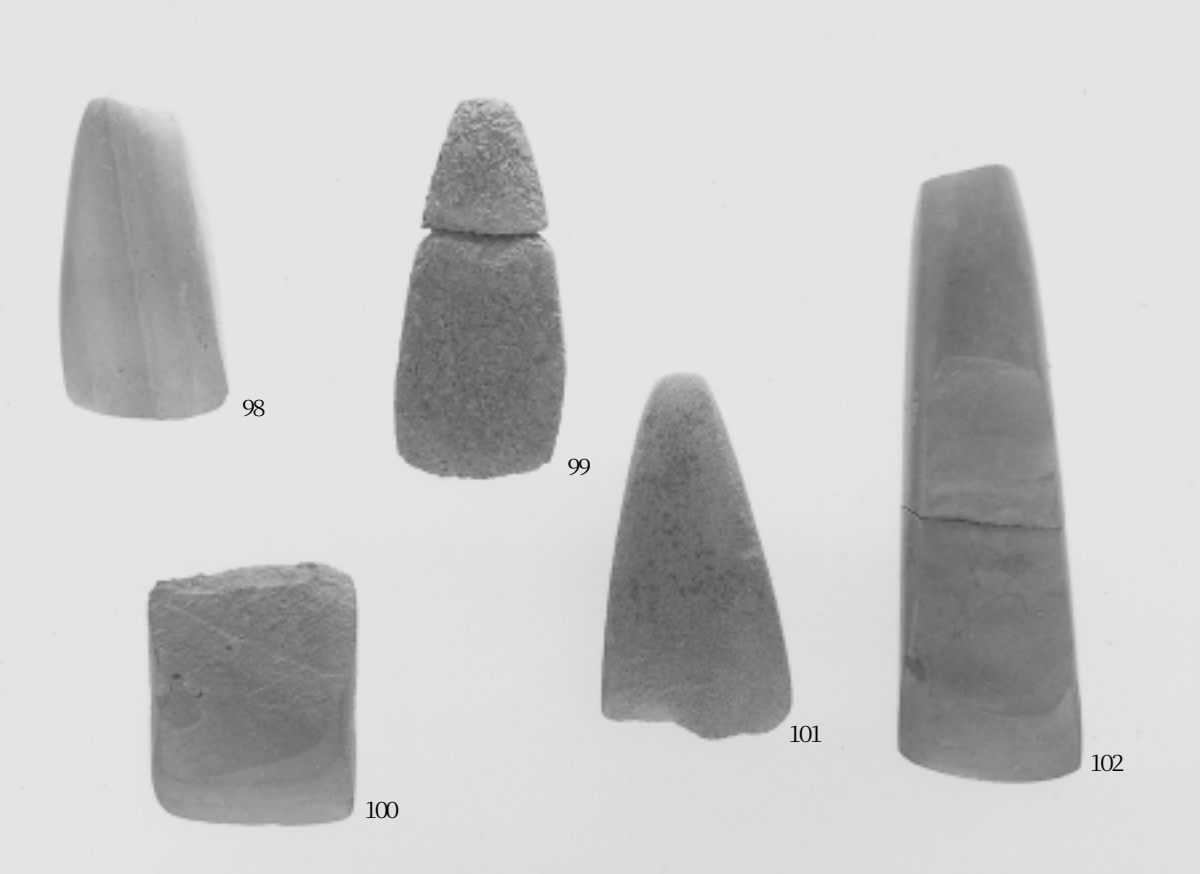
遺構外出土遺物（10）



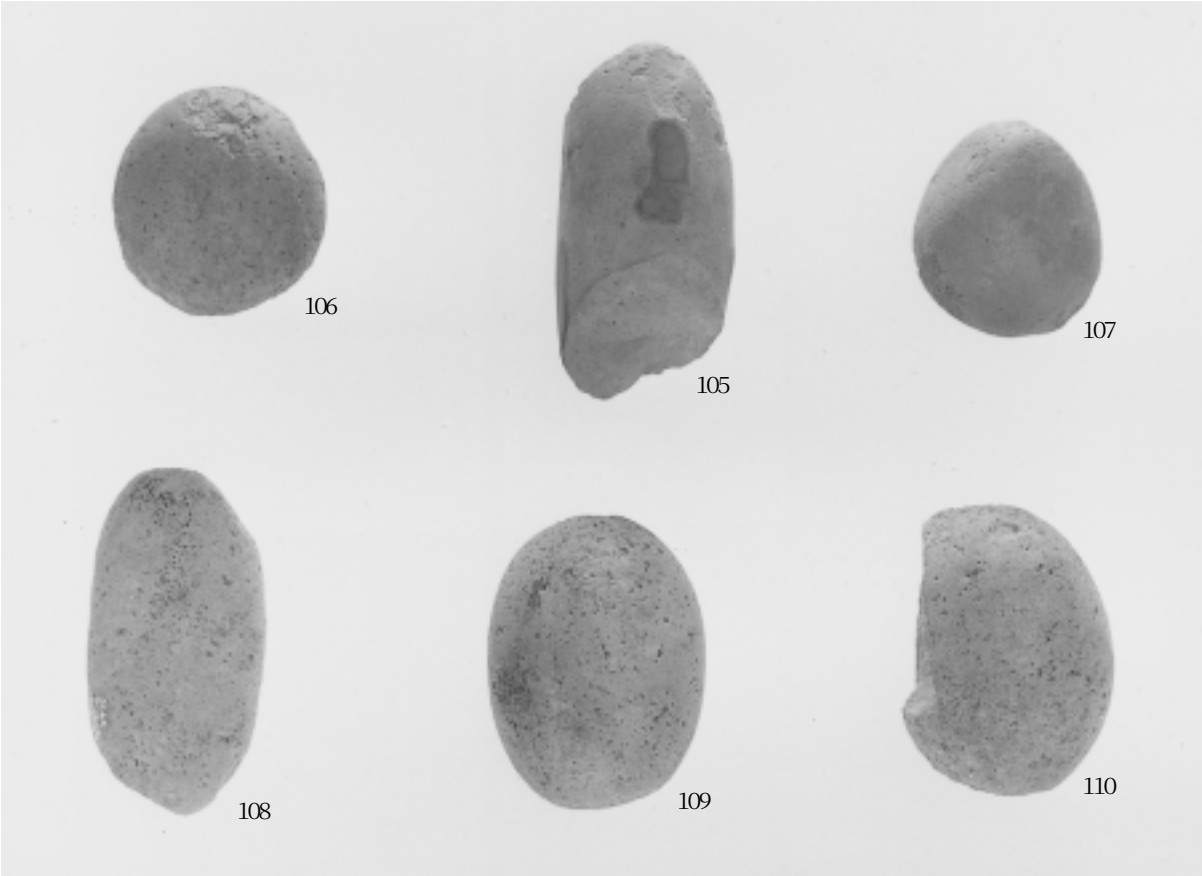


遺構外出土遺物（11）

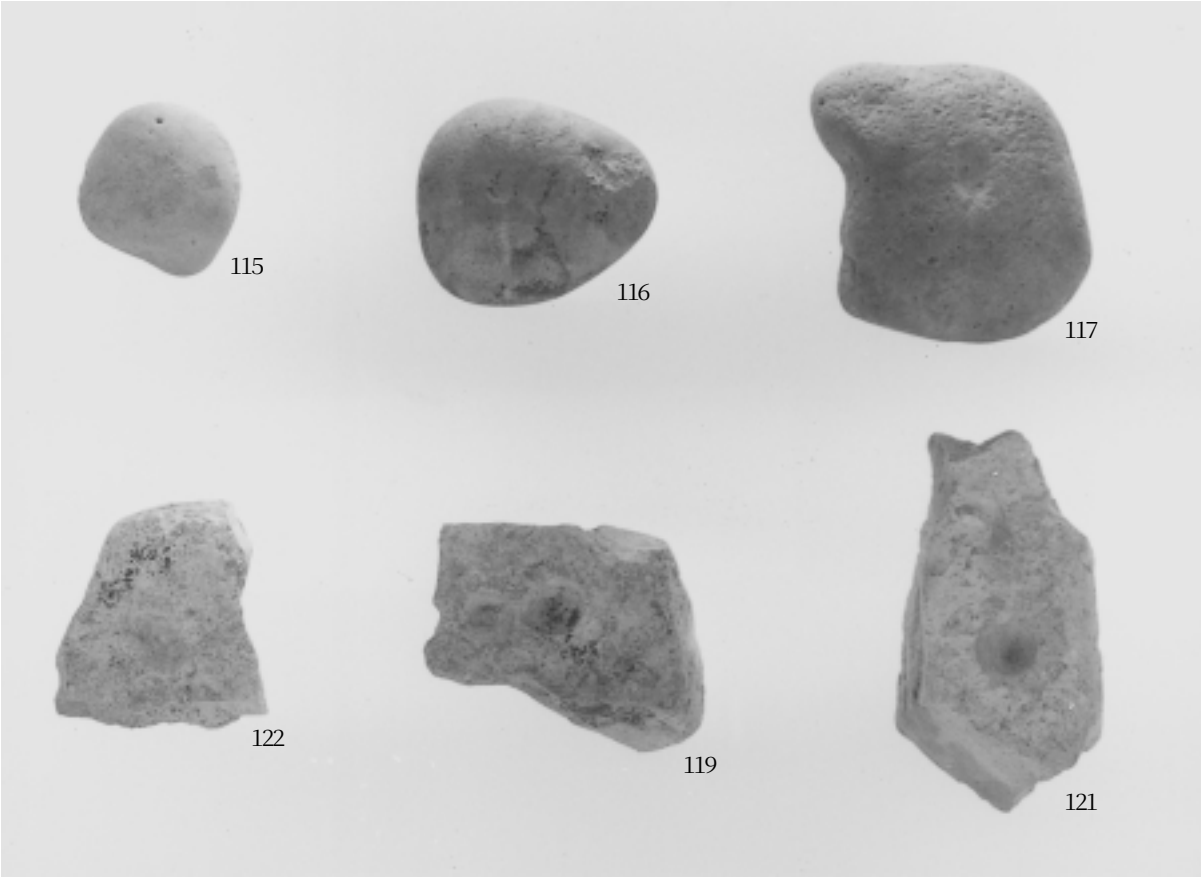




遺構外出土遺物（12）



遺構外出土遺物（13）



遺構外出土遺物（14）

報告書抄録

ふ り が な	どうのしたいせき
書　　名	堂の下遺跡
副　書　名	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	ＸＶ
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第356集
編 著 者 名	磯村　亨・高橋忠彦
編 集 機 関	秋田県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒014-0802　秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20　　TEL0187-69-3331
発行年月日	西暦2003年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
堂の下遺跡	秋田県山本郡琴丘町鹿渡字堂の下72外	05341	18-28	40° 0′ 44″	140° 5′ 29″	19980708 ～ 20001031	55,000㎡	日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る事前発掘調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特　記　事　項
堂の下遺跡	狩猟場 集落跡 集落跡 生産遺跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 中　　世	竪穴住居跡 フラスコ状土坑 陥し穴状土坑 竪穴住居跡 製鉄炉 炭窯 砂鉄貯蔵穴 捨て場	ナイフ型石器 縄文土器・石器 弥生土器・石器 鋳型・鉄製品・鉄滓・炉壁・土製品	旧石器時代から中世に至る複合遺跡。中心となる時代は中世の鉄生産に関する遺構・遺物群。縄文時代の遺構・遺物は、後期が中心で住居内から石棒が出土している。弥生時代では竪穴住居から土器や石製品が出土している。旧石器時代ではナイフ型石器が出土しているが、ブロック等の製作痕跡は確認されなかった。

秋田県文化財調査報告書第356集
堂の下遺跡Ⅰ
旧石器時代～弥生時代篇
－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ－
印刷・発行　平成15年３月
編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802　仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地
電話 0187（69）3331　FAX（0187）69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580　秋田市山王４丁目１番１号
電話 018（860）5193
印　　刷　株式会社 江川印刷所